

福島県南相馬市小高区

歓請内古墳発掘調査報告

辻 秀人

伊東静香

長田雄一郎・小関修太郎・佐藤勇太・中山知香

畑中 光・廣長 俊・幕田奈々

阿部良祐・佐久間美里・佐竹 崇・佐藤貴裕・佐藤泉英

鈴木麻衣・成瀬裕也・楡 望美・山本秀美・山口貴晃

遊佐恵太

熱海泰輔・新沼祐伸・千葉優菜・池田昇平

例 言

- 1 本報告は福島県南相馬市小高区飯崎字歓請内 16, 56, 57, 62 番地に所在する歓請内古墳の発掘調査報告書である。
- 2 調査開始から本書刊行までの間に、現地説明会資料及び学会発表、調査成果の概要報告などで中間的な調査成果を公表してきた。これらの記述が本書の内容と異なった場合、本書の記載がこれらに優先するものとする。
- 3 調査は、東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナールのゼミ活動の一環として実施したものである。第1次調査から第7次調査のすべてを東北学院大学文学部教授辻秀人が担当した。調査参加者は東北学院大学文学部歴史学科考古学ゼミナール所属の学生を及び東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻所属の大学院生である。
- 4 出土遺物、作成図面の整理は東北学院大学文学部歴史学科考古学ゼミナール所属学生及び卒業生、東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻所属の大学院生、及び大学院卒業生が行った。
- 5 本書の編集は辻秀人が担当した。執筆は、調査参加者が分担した。執筆者名は文末に記した。全体にわたり辻が加筆訂正を行っており、最終的な文責は辻にある。
- 6 調査報告の執筆にあたっては、調査年次ごとあるいは調査トレンチごとの記述を採用せず、墳丘、周辺埋葬、墳頂部に分けて記述をする方法を用いた。また、記述にあたっては図及び写真を文章中に挿入し、理解しやすいページ作りを心がけた。写真は可能なかぎり、図との対応関係をもたせた。
- 7 出土遺物、作成図面は東北学院大学文学部辻研究室にて保管している。
- 8 本書に掲載した図面の高さの表示はすべて海拔高を、方位の北はすべて真北を示している。
- 9 調査の実施にあたっては、南相馬市教育委員会及び地主水谷堯宣氏、水谷隆氏、松本登氏、富沢けい子氏の全面的なご支援を頂いた。

本報告刊行以前に公表した歓請内古墳発掘調査成果

『歓請内古墳第一次調査現地説明会資料』 2007年8月

「南相馬市小高区歓請内古墳第一次調査の概要」『福島考古』第49号 2008年3月

『歓請内古墳第三次調査現地説明会資料』 2008年8月

「南相馬市小高区歓請内古墳第2、3次調査の概要」『東北学院大学論集 歴史と文化』第44号 2009年3月

「南相馬市小高区歓請内古墳第4、5次調査の概要」『東北学院大学論集 歴史と文化』第45号 2010年3月

目 次

凡例

目次、図、写真目次

調査体制

序章 調査の目的と経過	9
第1節 調査の目的	9
第2節 調査の経過	9
第1章 古墳の立地	13
第1節 古墳の位置と周辺の地形	13
第2節 弥生時代から古墳時代前期の歴史的環境	14
第2章 測量調査成果	17
第3章 探査報告	20
1 第一次探査(調査前)	21
2 第二次探査(調査後)	37
第4章 発掘調査成果	48
第1節 墳丘の調査	48
1 墳丘東斜面	49
2 墳丘北斜面	55
3 墳丘西斜面	59
4 墳丘南斜面	63
第2節 周辺埋葬の調査	64
1 第1号壺棺	64
2 第2号壺棺	72
第3節 墳頂部の調査	77
1 墳丘積み土の様相	77
2 墳丘積み土下層の構築物	77
第5章 まとめ	83
第1節 墳丘の規模と構造	83
第2節 古墳築造年代	87
第3節 埋葬部の探索と墳丘下層構築物	88
第4節 歓請内古墳の特質	88
第5節 おわりに	89
謝辞	90

図 目 次

第1図 歙請内古墳位置図 …………… 13	第12図 第5トレンチ平面図・セクション 図 …………… 65
第2図 弥生時代主要遺跡、主要前・ 中期古墳分布図 …………… 15	第13図 第1号壺棺埋納状況実測図 …… 68
第3図 国家座標と局地座標系 …………… 18	第14図 大型壺(1号壺棺)実測図 …… 69
第4図 歙請内古墳測量図 …………… 19	第15図 小型壺実測図 …………… 71
第5図 歙請内古墳レーダ探査範囲………… 20	第16図 2号壺棺平面、断面図 …… 72
第6図 歙請内古墳測量図、トレンチ 配置図…………… 48	第17図 大型壺(2号壺棺)実測図 …… 74
第7図 第1トレンチ出土底部穿孔二 重口縁壺形土器実測図…………… 51	第18図 大型壺(壺棺蓋に使用)実測図… 76
第8図 第1トレンチ平面、断面図 …… 53	第19図 鉄族実測図 …………… 79
第9図 第2トレンチ平面、断面図 …… 57	第20図 第4トレンチ平面、断面図 …… 81
第10図 第3トレンチ平面、断面図 …… 61	第21図 墳丘東西、南西縦断面図 …… 85
第11図 平安時代土器実測図 …………… 63	第22図 各トレンチ出土底部穿孔二重 口縁壺形土器実測図…………… 87

写 真 目 次

写真1 第1次から第7次調査の状況 … 12	写真11 大型壺(1号壺棺)写真 …… 70
写真2 第1トレンチ出土底部穿孔二重 口縁壺形土器写真 …………… 51	写真12 小型壺写真 …………… 71
写真3 第1トレンチ写真 …………… 52	写真13 大型壺(2号壺棺)写真 …… 75
写真4 第2トレンチ調査風景 …………… 55	写真14 大型壺(壺棺蓋に使用)写真 …… 76
写真5 第2トレンチ …………… 56	写真15 最終段階の墳丘積み土範囲 …… 78
写真6 第3トレンチ調査風景 …………… 59	写真16 鉄族写真 …………… 79
写真7 第3トレンチ写真 …………… 60	写真17 第4トレンチ写真 …………… 80
写真8 平安時代土器写真 …………… 63	写真18 各トレンチ出土底部穿孔二重 口縁壺形土器写真 …………… 87
写真9 第5トレンチ検出状況写真………… 65	写真19 歙請内古墳全景 …………… 91
写真10 第1号壺棺埋納状況 …………… 68	

調 査 体 制

第 1 次調査

調 査 期 間	平成 19 年 7 月 30 日～8 月 25 日
調 査 主 体	東北学院大学文学部歴史学科辻ゼミナール
調 査 担 当 者	辻 秀人（東北学院大学文学部教授）
調 査 員	大久保弥生・伊東静香（大学院生） 荒井優作・池田裕輝・佐々木洸・須藤良介・高橋憲一・高橋玲子 山内彩子（4 年生） 長田雄一朗・小関修太郎・佐藤勇太（総括）・畑中 光・中山知香 廣長 俊・幕田奈々（3 年生）
調 査 参 加 者	赤石沙織・大久保亮・大沢かおり・太田千恵美・小野寺千晶・大山真実 奥田貴幸・菊池友紀・金野邦彦・日下 健・今野喜博・斉藤紀仁 斎藤里佳子・佐伯奈弓・佐々木美由紀・佐藤里香・瀬戸三保子 高橋一樹・高橋直樹・中沢麻里子・中村貴昭・藤原友香・藤崎真以子 山田真莉（2 年生） 五十嵐諒平・小島葉子・佐久間美里・庄子加奈子・帷子綾花・横山浩之 （1 年生）
調 査 協 力	南相馬市教育委員会 飯崎行政区・水谷 隆・水谷堯宣・松本 登・富沢けい子・玉川一郎 工藤博司・青山博樹・川田 強・佐川 久・林 紘太郎・荒 淑人 大谷 基（敬称略）

第 2 次調査

調 査 期 間	平成 20 年 3 月 1 日～3 月 12 日
調 査 主 体	東北学院大学文学部歴史学科辻ゼミナール
調 査 担 当 者	辻 秀人（東北学院大学文学部教授）
調 査 員	大久保弥生・伊東静香（大学院生） 荒井優作・佐々木 洸・須藤良介・高橋憲一・堀 佑貴（4 年生） 長田雄一朗・小関修太郎・佐藤勇太（総括）・畑中 光・中山知香 廣長 俊・幕田奈々（3 年生） 小野寺千晶・大山真実・菊池友紀・佐伯奈弓・高橋直樹・山田真莉 （2 年生） 五十嵐諒平（1 年生）
調 査 協 力	南相馬市教育委員会 飯崎行政区・水谷 隆・水谷堯宣・松本 登・富沢けい子・川田 強

佐川 久・林紘太郎・荒 淑人・大谷 基（敬称略）

第3次調査

調査期間

平成20年7月31日～8月23日

調査主体

東北学院大学文学部歴史学科辻ゼミナール

調査担当者

辻 秀人（東北学院大学文学部教授）

調査員

伊東静香（大学院生）

長田雄一郎・小関修太郎・佐藤勇太・畑中 光・中山知香・廣長 俊
幕田奈々（4年生）

大山真実、小野寺千晶、菊池友紀、佐伯奈弓、高橋直樹（総括）

山田真莉（3年生）

調査参加者

中沢麻里子（3年生）

阿部良祐・五十嵐諒平・石川喜野・大久保美穂・太田美由紀

菅野由依・佐久間美里・佐竹 崇・佐藤 南・庄子加奈子

鈴木麻衣・田中優奈・新野奈都美・楡 望美・早坂季里子

増岡由貴・山崎詩織・山本秀美・横山浩之・若生真希（2年生）

熱海泰輔・佐々木研人・戸倉大樹・三好祐二・渡辺航陽（1年生）

調査協力

南相馬市教育委員会

飯崎行政区・水谷 隆、水谷堯宣・松本 登・富沢けい子・工藤博司

川田 強・佐川 久・林紘太郎・荒 淑人・荒井優作・大谷 基

小野寺真澄・佐々木洸・佐藤敏幸・鈴木芳英・須藤良介・高橋憲一

藤木 海・堀 佑貴（敬称略）

整理参加者

伊東静香（大学院生）

長田雄一郎・小関修太郎・佐藤勇太・畑中 光・中山知香・廣長 俊
幕田奈々（4年生）

小野寺千晶・大山真実・菊池友紀・佐伯奈弓・高橋直樹・山田真莉
（3年生）

第4次調査

調査期間

平成21年3月2日～3月21日

調査主体

東北学院大学文学部歴史学科辻ゼミナール

調査担当者

辻 秀人（東北学院大学文学部教授）

調査員

伊東静香（大学院生）

小関修太郎・佐藤勇太・畑中 光・中山知香・廣長 俊・幕田奈々
（4年生）

大山真実・小野寺千晶・菊池友紀・佐伯奈弓・高橋直樹（総括）

山田真莉（3年生）

阿部良祐・佐久間美里・佐竹 崇・佐藤貴裕・佐藤泉英・鈴木麻衣
楡 望美・山口貴晃・山本秀美・遊佐恵太（2年生）

調査協力

南相馬市教育委員会

飯崎行政区・水谷 隆・水谷堯宣・松本 登・富沢けい子・川田 強
佐川 久・林紘太郎・荒 淑人・大谷 基・三瓶秀文・百々千鶴
遠藤美貴子（敬称略）

第5次調査

調査期間

平成21年8月3日～8月25日

調査主体

東北学院大学文学部歴史学科辻ゼミナール

調査担当者

辻 秀人（東北学院大学文学部教授）

調査員

伊東静香（大学院生）

大山真実・菊池友紀・高橋直樹・山田真莉（4年生）

阿部良祐・佐久間美里・佐竹 崇・佐藤貴裕・佐藤泉英・鈴木麻衣
成瀬裕也・楡 望美・山口貴晃・山本秀美・遊佐恵太（3年生）

調査参加者

熱海泰輔・大沼友樹・熊谷紀幸・佐々木織衣・佐々木由貴奈・杉原桃子
田中夕貴・新沼祐伸（2年生）

阿部 碧・伊藤慶華・海老田里咲・小田 恵・鹿野恵美・貴田麻美・
佐々木拓哉・成田 優・服部芳治・松本尚也・森田彩加・横田竜巳
吉田龍司（1年生）

調査協力

南相馬市教育委員会

飯崎行政区・水谷 隆・水谷堯宣・松本 登・富沢けい子・川田 強
佐川 久・林紘太郎・荒 淑人・大谷 基・佐藤良和・佐藤勇太・幕田奈々
（敬称略）

整理参加者

伊東静香（大学院生）

大山真実・小野寺千晶・菊池友紀・佐伯奈弓・高橋直樹・山田真莉（4年生）

阿部良祐・佐久間美里・佐竹 崇・佐藤貴裕・佐藤泉英・鈴木麻衣
成瀬裕也・楡 望美・山口貴晃・山本秀美・遊佐恵太（3年生）

第6次調査

調査期間

平成22年3月1日～3月20日

調査主体

東北学院大学文学部歴史学科辻ゼミナール

調査担当者

辻 秀人（東北学院大学文学部教授）

調査員

大山真実、菊池友紀、山田真莉（4年生）

阿部良祐・佐久間美里・佐竹 崇・佐藤貴裕・佐藤泉英・鈴木麻衣
成瀬裕也・楡 望美・山口貴晃・山本秀美・遊佐恵太（3年生）
新沼祐伸・熱海泰輔・池田昇平（2年生）
鹿野恵美・成田 優・服部芳治・松本尚也・森田彩加、（1年）

調査協力

南相馬市教育委員会
飯崎行政区・水谷 隆・水谷堯宣・松本 登・富沢けい子・堀 耕平
川田 強・藤木 海・荒 淑人・荒 麻美・大谷 基（敬称略）

整理参加者

伊東静香（大学院生）
阿部良祐・佐久間美里・佐竹 崇・佐藤貴裕・佐藤泉英・鈴木麻衣
成瀬裕也・楡 望美・山口貴晃・山本秀美・遊佐恵太（3年生）

第7次調査

調査期間

平成22年8月12日～8月24日、8月30日～9月8日

調査主体

東北学院大学文学部歴史学科辻ゼミナール

調査担当者

辻 秀人（東北学院大学文学部教授）

調査員

阿部良祐・佐久間美里・佐竹 崇・佐藤貴裕・佐藤泉英・鈴木麻衣
成瀬裕也・楡 望美・山口貴晃・山本秀美・遊佐恵太（4年生）
新沼祐伸・熱海泰輔・千葉優菜・池田昇平（3年生）

調査参加者

佐々木拓哉・千田紗由梨・成田 優・服部芳治・松本尚也
森田彩加・横田竜己・佐藤香織・星野剛史・山手貴裕・吉田竜司
田澤大介・大内美樹（2年）
佐々木睦・高橋 璃（1年）

調査協力

南相馬市教育委員会、福島県教育委員会
飯崎行政区・水谷 隆・水谷堯宣・松本 登・富沢けい子・堀 耕平
川田 強・藤木 海・荒 淑人・荒 麻美・大谷 基・玉川一郎
青山博樹・三瓶秀文（敬称略）

整理参加者

伊東静香（大崎市）
阿部良祐・佐久間美里・佐竹 崇・佐藤貴裕・佐藤泉英・鈴木麻衣
楡 望美・山本秀美・遊佐恵太（4年生）
新沼祐伸・熱海泰輔・千葉優菜・池田昇平（3年生）

序章 調査の目的と経過

第1節 調査の目的

東北学院大学辻ゼミナールでは、東北古墳時代の様相を解明することを目標として活動を継続している。福島県浜通地方についてはこれまでに南相馬市原町区の桜井高見町遺跡の発掘調査を実施（辻他 1996）し、同桜井古墳群上渋佐支群7号墳の発掘調査（鈴木、吉田 2001）の支援を行ってきた。福島県浜通地方の古墳時代の様相についてはこれまでに原町市教育委員会（現南相馬市教育委員会）による桜井古墳の発掘調査（荒他 2002）や法政大学による浪江町本屋敷古墳群の発掘調査（伊藤玄三他 1985）などにより明らかにされてきた。しかし、その中間地域にあたる小高区の様相についてはこれまで不明な点が多かった。歓請内古墳の発掘調査はこれまで不明であった小高区古墳時代の様相を解明することを目的として実施した。

第2節 調査の経過

第1次調査 平成19年7月30日～8月25日

墳丘を含む範囲に局地座標系を設定し、墳丘測量の基準点を設置し、測量を実施した。墳丘を清掃し、25cmの等高線で墳丘測量図を作成した結果、従来円墳と見られていた歓請内古墳が長軸約30m、短軸約25m、墳丘高約5mの方墳であることが判明した。

墳丘構造を解明するために、東斜面に第1トレンチ、西斜面に第3トレンチを設定し、調査を実施した。第1トレンチでは墳丘中段斜面、下段テラス、墳丘下段斜面、墳端を検出した。第1トレンチ墳丘斜面からは底部穿孔二重口縁壺形土器破片が出土した。第3トレンチでは、墳丘斜面とテラスを検出し、墳端付近で壺棺を検出した。

墳頂部に第4トレンチを設定し、埋葬に関わる遺構の探索を実施した。

調査の最終段階で現地説明会を開催した。

第2次調査 平成20年3月1日～12日

第1次調査で設定した第1トレンチを墳頂平坦面に至るまで延長し、東斜面全体の構造を把握した。その結果東墳丘斜面はテラスが2条めぐり、墳丘が三段で構成されていることが判明した。また、墳丘上段斜面からは比較的多くの底部穿孔二重口縁壺形土器破片が出土し、墳頂平坦面に底部穿孔二重口縁壺形土器破が置かれていたことが推測された。

第3トレンチを延長し墳丘西斜面の墳端を確認した。墳端の高さから周濠の存在が予想されたが、トレンチの範囲内では周濠西側の立ちあがりを確認できなかった。

墳頂部、第4トレンチの調査では引き続き埋葬に関わる遺構の探索を実施した。

第3次調査 平成20年7月31日～8月23日

墳丘北斜面の構造を確認するために第2トレンチを設定し、調査を実施した。墳丘斜面を検出したが、墳丘に構成の攪乱があり、テラスを確認することはできなかった。

周濠の西側の立ちあがりを確認するために第3トレンチを西側に延長した。その結果、

墳丘西側墳端から西側は緩やかな傾斜をもって少しずつ高くなっていき、やがて周囲の高さと同じになっていくことが分かった。この緩やかな傾斜を周濠の西側の立ち上がりとすることも可能ではあるが、一般の周濠の形態と違っていと認識された。

墳頂部の第4トレンチでは墓壙のプランとなると判断された土質の違いと陥没坑と見られる土質の違いを検出した。

第4次調査 平成21年3月2日～3月21日

第2トレンチを北にのぼし、墳丘北斜面の墳裾の探索をするとともに、墳丘外側の様子を調査した。調査の結果北側墳裾を確認したが、墳丘の外に落ち込みはみられず、北側に周濠はないと判断した。

墳頂の第4トレンチでは墓壙のプランと見られたラインに沿って掘り下げを実施した。掘り下げの結果、緩やかな傾斜が確認されたが明確な掘り込みにはならず、本来の墓壙のプランは調査区内に収まっていないのではないかと推測された。

第5次調査 平成21年8月3日～8月25日

墳丘南斜面の構造を把握するために第5トレンチを設定し、調査を実施した。墳丘南斜面には祠があり、墳丘面は大きく改変されていたため、調査区は祠の位置を避け、墳端近くに設定した。調査の結果、墳丘面は予想通り大きく改変されていたが、わずかに残る墳端部分を確認し、墳丘規模を決定することができた。また、墳端よりもやや南側に埋納された壺棺を発見し、調査した。

墳丘の外側には明確な掘り込みは見られず、周濠はないと判断された。

墳頂部では調査区を拡張し、墓壙のプランを追求し、墓壙のプランと陥没坑のプランを把握した。

第6次調査 平成22年3月1日～3月20日

墳頂第4トレンチで前回調査で把握した墓壙のプランに従って掘り下げるとともに、陥没坑を6区に細分して慎重に掘り下げた。墓壙のプランと認識したラインに沿って掘り下げた結果、緩やかな傾斜が確認されたにとどまり、墓壙の掘り込みではないことが判明した。また、陥没坑も土色の違いは明確であったが、陥没坑のような急激な落ち込みはみられず、積み土の土質の違いと判断された。

第7次調査 平成22年8月12日～8月24日、8月30日～9月8日

これまでの墓壙、陥没坑の想定が違っていたことを受け、墳頂部であらためて埋葬部を探索するため積み土を検討しながら層位的に掘り下げていった。墳頂の積み土は、外周部が早い段階でドーナツ状に高く積み、その中に土が流し込まれる形で墳丘が形成されている様子を確認することができた。しかし、墳頂の積み土を切る掘り込みは存在せず、少なくとも調査範囲内には墓壙は存在しないと考えられた。ただ、墳頂部の墳丘積み土の下層に粘土と砂礫混じりの土で構築された高まりがあることが確認された。この構築物は墳丘下層の埋葬施設である可能性があるが、それ以上の調査は実施しなかった。

引用文献

- 伊藤玄三他 1985 『本屋敷古墳群の研究』 法政大学
辻 秀人他 1996 『桜井高見町A遺跡発掘調査報告書』 原町市埋蔵文化財調査報告書 第12集
鈴木文雄、吉田陽一 2001 『桜井古墳群上洪佐支群7号墳発掘調査報告書』 原町市埋蔵文化財調査報告書 第27集
荒 淑人他 2002 『国史跡桜井古墳保存整備事業報告書』 原町市埋蔵文化財調査報告書 第31集



第1次調査 第3トレンチ



第3次調査 第4トレンチ



第2次調査 第2トレンチ



第4次調査 第4トレンチ



第5次調査 第5トレンチ



第6次調査 第4トレンチ



第7次調査 第4トレンチ

写真1 第1次から第7次調査の状況

第1章 古墳の立地

第1節 古墳の位置と周辺の地形

歓請内古墳は福島県南相馬市小高区飯崎字歓請内に所在する。小高区中心の市街地の西にあたり、小高川と前川の合流地点の西側台地上に所在する。古墳は阿武隈山地からのびる台地状地形の東端、太平洋に面する海岸平野を一望する位置に築かれている。古墳の築かれている台地状の地形は中位河岸段丘と考えられている。古墳の西側の台地上には広大な平坦面が広がり、畑が営まれている。古墳東側の丘陵東端は削り取られては崖となり、崖下には歓請内地区の集落が広がっている（第1図）。



第1図 歓請内古墳位置図

第2節 弥生時代から古墳時代前期の歴史的環境

弥生時代の福島県浜通り地方北部では、中期後半に有力な集落遺跡が確認される。南相馬市原町区桜井遺跡はその代表的な遺跡である。東北地方の弥生時代中期後半を代表する桜井式の標識遺跡であるが、残念ながら桜井式段階の遺構は確認されていない。故竹島国基氏により多くの遺物か採集、公表されており、その内容を知ることができる(竹島編 1992)。また、南相馬市鹿島区天神沢遺跡でも、故竹島国基氏により大量の石庖丁とその未製品が採集され、石庖丁の製作遺跡と考えられている(竹島編 1983)。後期には楡葉町天神原遺跡で多数の土器棺墓が確認されている(馬目順一 1982)。集落の様相は明確ではないが、天神原式と天王山式が分布している。終末期には天王山式の系譜にある土器群、天神原式の後続型式の他、十王台式系の土器群も分布している。南相馬市桜井遺跡では十王代式の新しい段階の堅穴住居跡が2棟確認(辻他 1996)されるととともに、浪江町本屋敷古墳群下層住居から北陸系土器群が出土している。他に竹島コレクション中には東海系の土器群もあり、弥生終末期の相双地区は複雑な様相を呈している。

古墳時代前期には、南相馬市原町区桜井古墳(荒 淑人他 2002)、浪江町本屋敷1号墳(伊藤玄三他 1985)などの大型、中型前方後方墳が登場し、桜井古墳群上渋佐支群7号墳、浪江町本屋敷2、4号墳、南相馬市荒井前1、2号墳(二本松文雄 2002)などの方墳や柚原古墳群、飯崎館跡1号墳(荒 淑人 2010)などの小規模な円墳も知られている。他に浪江町加倉3号墳(生江芳徳他 1979)からは塩釜式土器も出土しており、古墳時代前期に属する可能性がある。

この地域最古の古墳は、本屋敷1号墳であると考えられる。墳丘から出土した土器群は塩釜式でも古い段階と考えられ、築造は古墳時代前期の中頃もしくは前半と考えられる。現在のところ東北地方でも最古段階の古墳である可能性が高い。本屋敷古墳群の下層住居からは北陸北東部の特徴を持つ土器群が出土しており、本古墳群の成立には北陸北東部から移住してきた人々が関与した可能性が高い。相双地区に最初に登場した首長墓と言えよう。続く首長墓は桜井古墳である。全長74.5mを測る東北地方でも最大規模の前方後方墳である。後方は三段築成で、前方部は無段である。墳頂部には二重口縁壺形土器が配置される。埋葬部は未調査だが、陥没坑の様相から主軸に平行して2基の木棺が埋置されていると見られる。

これらの首長墓の他、桜井古墳群上渋佐支群7号墳や今回調査を行った歓請内古墳などの一辺20～30m規模の中型古墳にも方形が採用されており、相双地区は東北地方の中でも際だって方形古墳が優越する地域といえよう。福島県会津盆地東北部の雄国山録にも前方後方墳、方墳が集中する地域があるが、きわめて狭い範囲のことであり、相双地区のように広い範囲で方形古墳が優越するのはきわめて珍しい。このような状況の背後にどのような歴史状況を読み取れるかが今後の課題である。

(辻 秀人)



- 1 桜井遺跡
- 2 天神沢遺跡
- 3 柚原古墳群
- 4 荒井前1,2号墳
- 5 桜井古墳
- 6 歓請内古墳
- 7 飯崎館跡1号墳
- 8 加倉古墳群
- 9 本屋敷古墳群
- 10 堂の森古墳
- 11 狐塚古墳

第2図 弥生時代主要遺跡、主要前・中期古墳分布図
 国土地理院 20万分の1、福島を使用

引用文献（年代順）

- 生江芳徳他 1979年 『福島県浪江町加倉古墳群』 浪江町教育委員会
- 馬目順一 1982年 『楢葉天神原遺蹟』
- 竹島国基編 1983年 『天神沢』 竹島コレクション考古図録第1集
- 伊藤玄三他 1985年 『本屋敷古墳群の研究』 法政大学
- 竹島国基編 1992年 『桜井』 竹島コレクション考古図録第3集
- 辻 秀人他 1996年 『桜井高見町A遺跡発掘調査報告書』 原町市文化財調査報告書 第12集
- 荒 淑人他 2002年 『国史跡桜井古墳保存整備事業報告書』 原町市埋蔵文化財調査報告書第31集
- 二本松文雄 2002年 「荒井前遺跡」『県営高平ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 原町市埋蔵文化財調査報告書第29集
- 荒 淑人 2010年 「飯崎館跡（第4次調査）」『南相馬市内遺跡発掘調査報告6』 南相馬市埋蔵文化財調査報告第18集

第2章 測量調査成果

従来、歓請内古墳は、小高地域の中で比較的規模が大きい円墳と考えられてきた。発掘調査の開始に先立ち、古墳の基礎的なデータを得るため測量調査を実施した。

測量にあたり、まず古墳を含む局地座標系を設定した。当初墳丘を楕円形と認識していたため、楕円形の長軸にあわせて座標軸を設定したが、結果として方墳の主軸に対して座標軸が斜交することになってしまった。作図は平板を用い、原図縮尺を100分の1とし、25cmごとに等高線をひき、1mごとの等高線を太線とした。

歓請内古墳の基準点は、古墳周辺に適当な三角点が存在しなかったため、GPS装置を利用し2点の国家座標の数値取得を行い(基1,基2)地上測量で基準点を1点加えた(基3)。国家座標の数値は表の通りである。

	X軸	Y軸	標高
基1	173715.6	100583.2	25.458
基2	173707.4	100471.4	27.58
基3	173719.3	100625.3	25.466

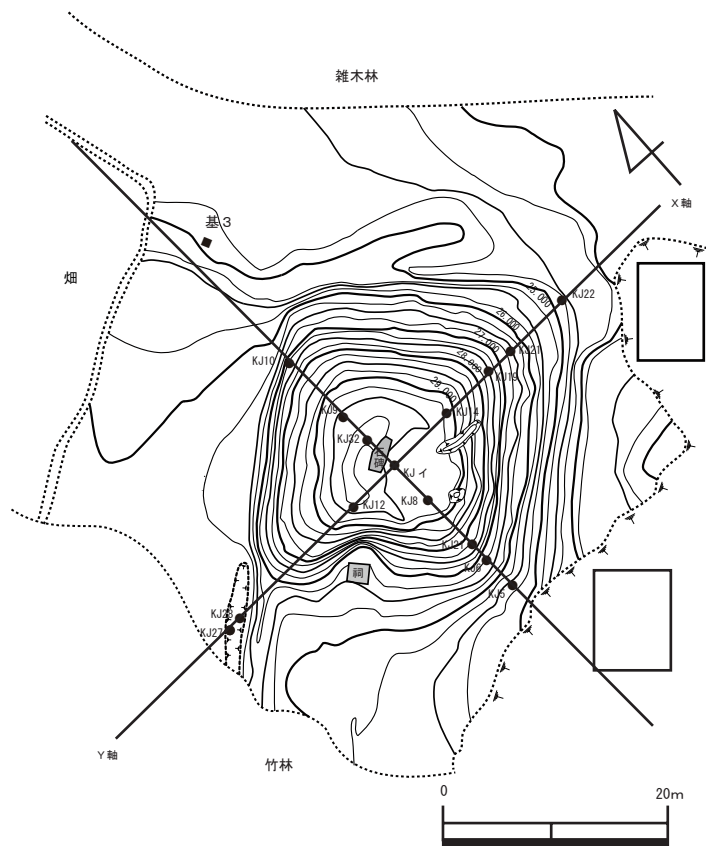
この国家座標の基準点を利用して局地座標系の位置を確定した。局地座標の原点を古墳墳頂平坦面のほぼ中心部分の位置に設定し、 $X = 0$ 、 $Y = 0$ とした。ここを基準点とし、局地座標軸を設定した。なお、国土座標と同様にX軸では北が正、南が負

の方向、Y軸では東が正、西が負の方向である。(第3図)

墳丘の全体測量により明らかとなった点は次の通りである(第4図)。

- ・墳丘は長軸約30m、短軸約25m、高さ約5mを測る方形を呈する。
- ・墳頂平坦面は約10m×10mの方形である。墳頂平坦面はややくぼんだ状態で、これは墳頂にある石碑の造成に伴い削平されたものと思われる。
- ・墳丘南側の裾には祠があり、祠の造成に伴って墳丘南斜面は大きく削られている。
- ・墳丘南東隅は、崖によって一部失われている。
- ・墳丘の南西隅部分には、後世に取り付いたと思われる土塁状の高まりがある。
- ・墳丘北斜面の下部にはテラスかと見られる平坦面が観察されたが、一周する確証がなく、測量調査からはテラスの有無を判断できなかった。
- ・古墳は丘陵末端の東側に向けて傾斜する場所に築かれているため、古墳周囲との比高差は西側で約3.5m、東側で約5mを測る。傾斜地に古墳が築かれる場合、墳頂平坦面を水平に築くためには当然このような比高差を持つことになるが、結果として東側の平野から見上げた場合、墳丘はより大きく見える構造となっている。古墳築造当初からこのような見え方を意図した可能性が高い。

以上総合すると、歓請内古墳は福島県浜通り地域では珍しい大型方墳であり、東側から見られることを想定して築造された古墳と考えられる。古墳東側の河川の対岸に前期の集落遺跡も確認されており、歓請内古墳と集落の関係も注目される。東北地方の方墳はほとんどは前期古墳であり、歓請内古墳も前期古墳である可能性が考えられる。(伊東静香)



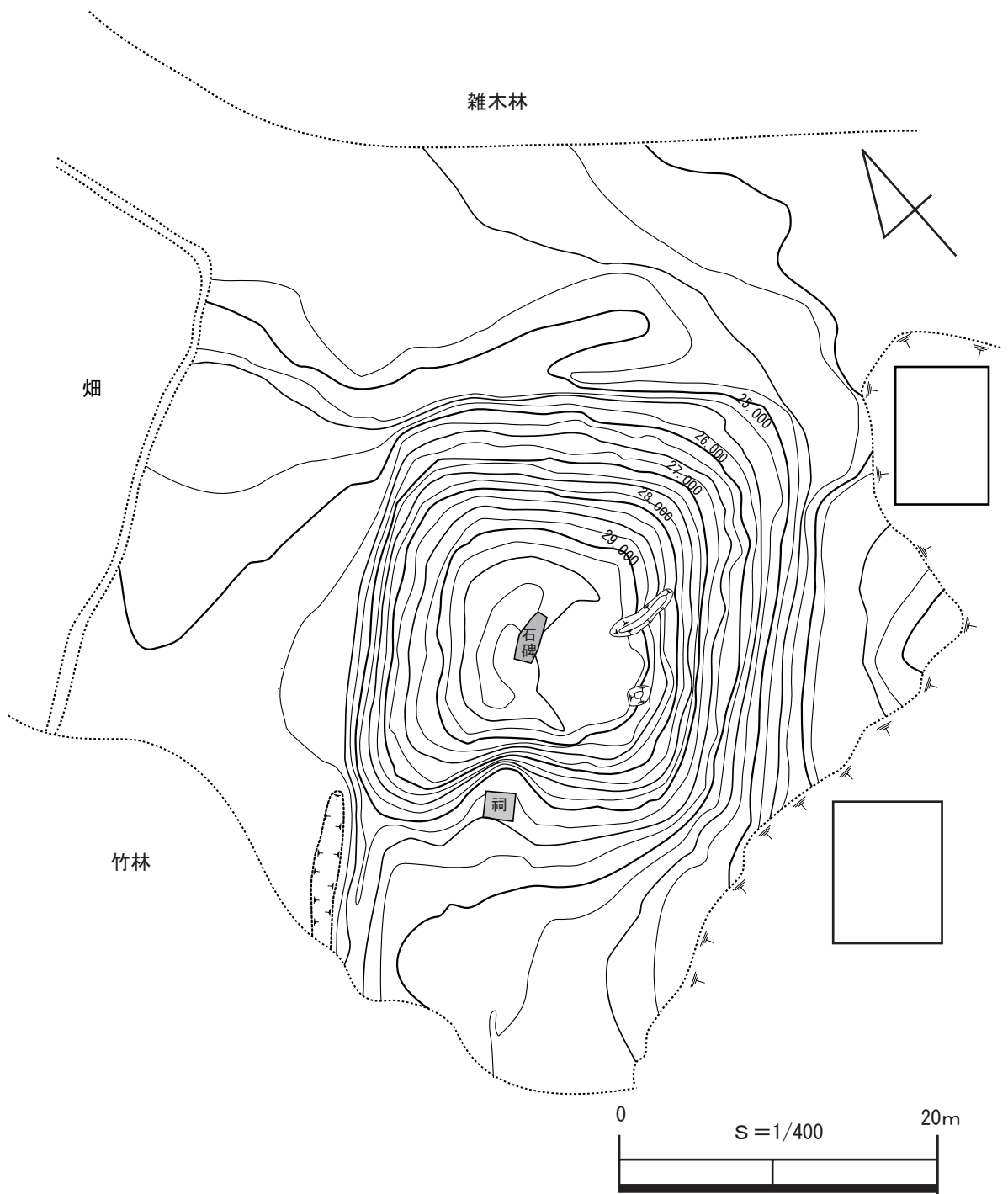
歎請内古墳 国家座標 配点図

	X	Y	H
基1	173715.588	100583.235	25.458
基2	173707.369	100471.394	27.580
基3	173719.286	100625.318	25.466

歎請内古墳 配点図 任意座標

	X(任意座標値)	Y(任意座標値)	X(国家座標値)	Y(国家座標値)	標高
KJ1	0.000	0.000	173707.003	100648.284	29.493
KJ5	0.000	14.900	173701.237	100662.029	
KJ6	0.000	11.440	173702.575	100658.840	
KJ7	0.000	9.842	173703.193	100657.360	27.273
KJ8	0.000	4.332	173705.324	100652.283	29.405
KJ9	0.000	6.246	173709.430	100642.543	
KJ10	0.000	12.710	173711.915	100636.572	27.518
KJ12	3.039	-5.237	173711.789	100644.624	23.752
KJ14	6.513	0.000	173713.006	100650.810	
KJ19	11.929	0.000	173717.996	100652.912	27.425
KJ21	14.567	0.000	173720.392	100653.924	
KJ22	20.963	0.000	173726.262	100656.402	24.724
KJ27	-20.142	-0.074	173688.455	100640.464	
KJ28	-19.212	-0.063	173689.313	100640.827	
KJ32	0.000	3.123	173708.229	100645.415	

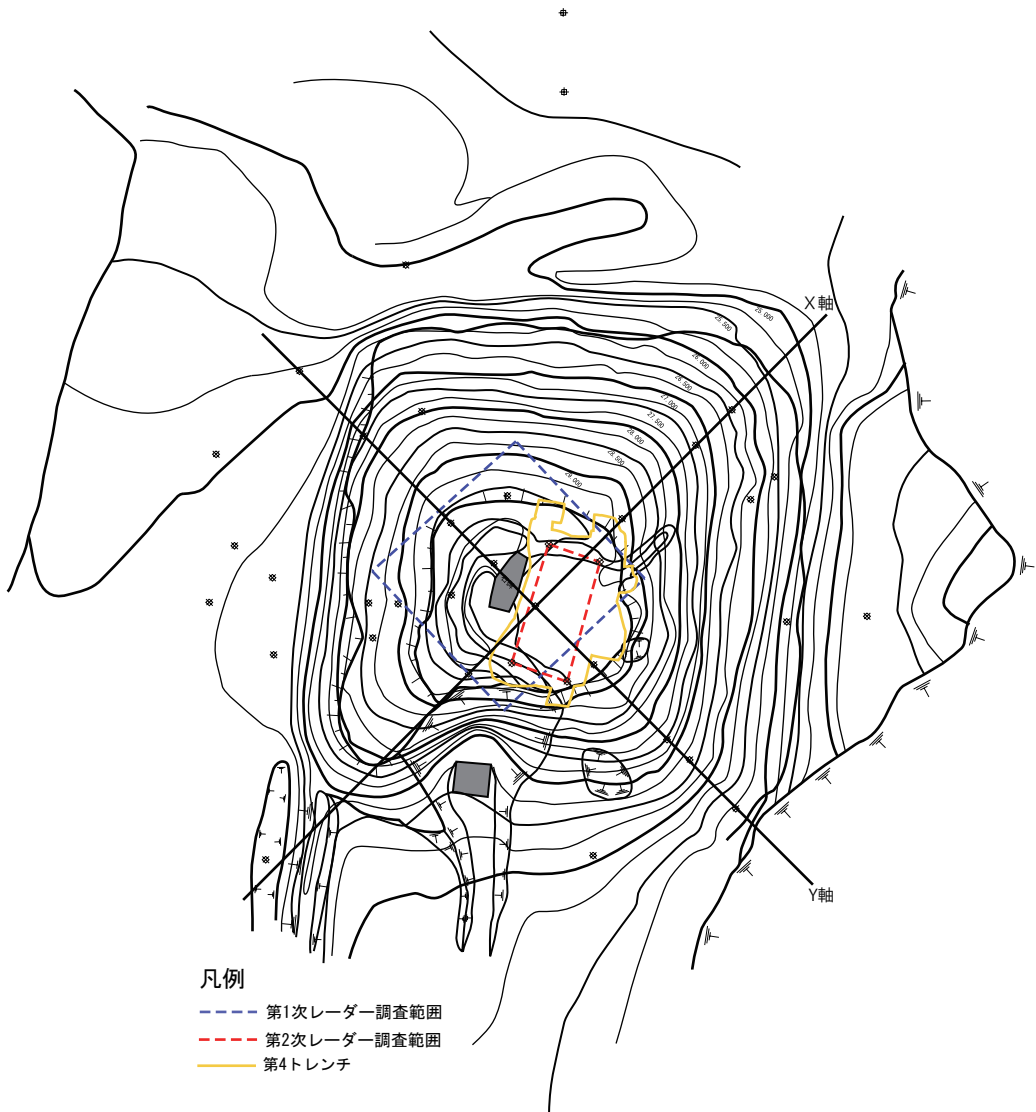
第3図 国家座標と局地座標系



第4図 歆請内古墳測量図

第3章 探査報告

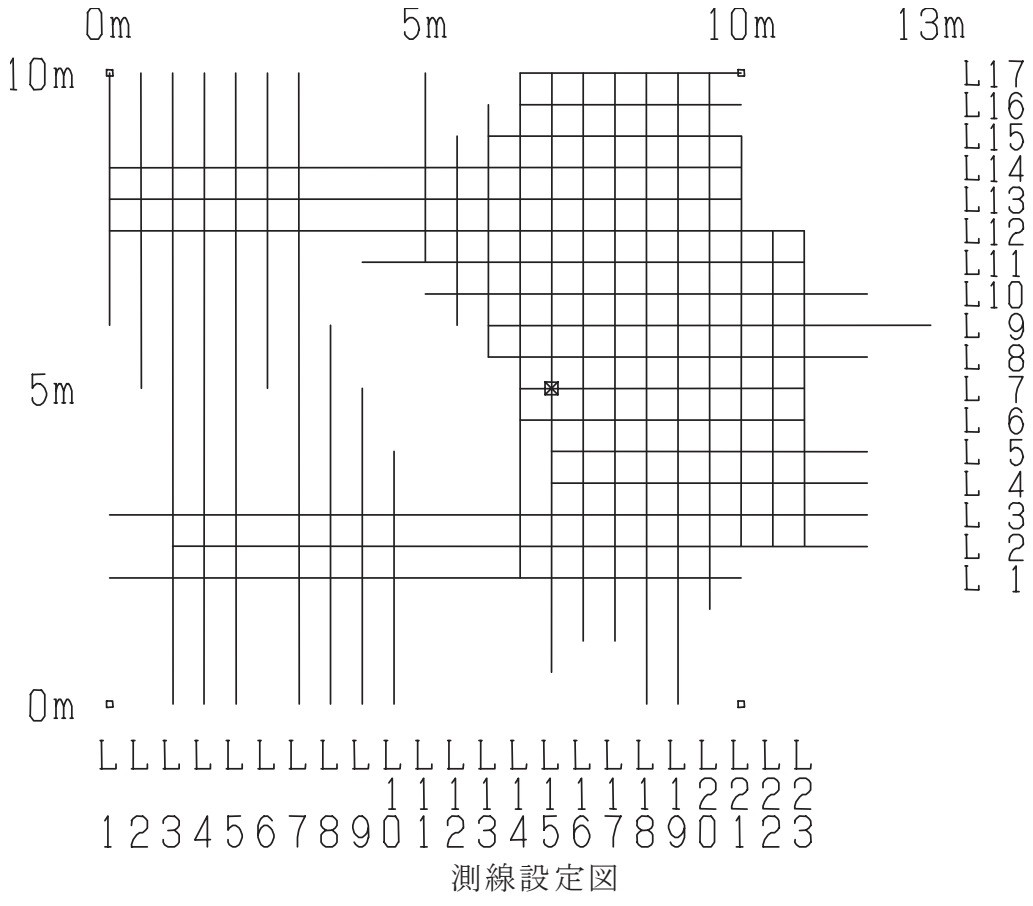
歓請内古墳の調査では、測量調査の段階で比較的広い範囲でのレーダ探査（第1次）をおこなうとともに、調査の最終段階で墳丘積み土の下層に構築物が有ることが判明した段階でその性格を考えるために狭い範囲でのレーダ探査（第2次）をいずれも桜小路電気有限会社工藤博司氏に依頼し、実施していただいた。探査の位置は第5図に示すとおりである。以下2回にわたる探査の成果について工藤博司氏から報告を受けた内容をそのまま掲載する。

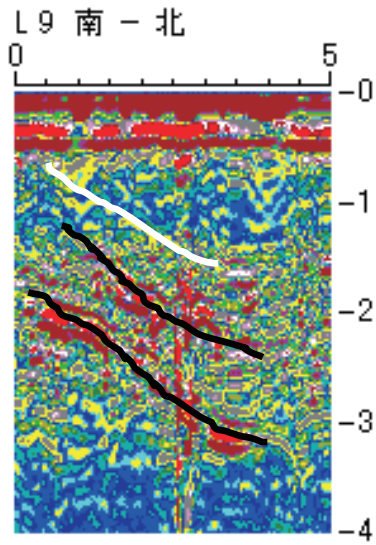


第5図 歓請内古墳レーダ探査範囲

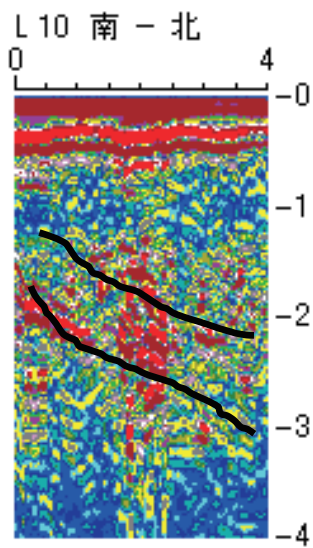
歓請内古墳第1次レーダ探査報告

桜小路電機有限公司 工藤博司

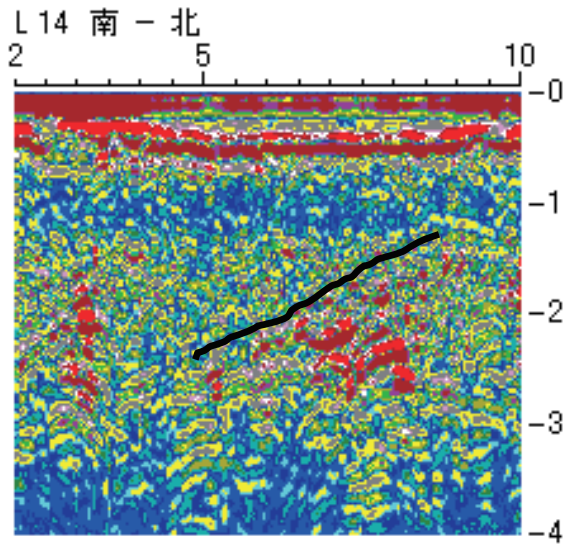




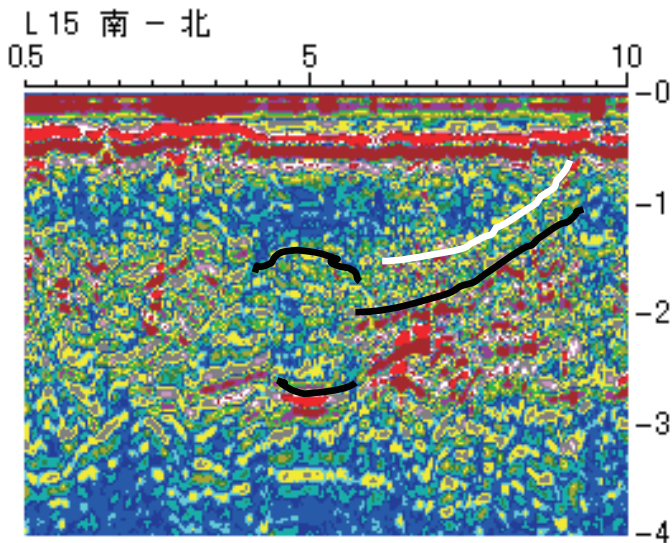
- ・北に下がる弱い変化が見られます。(白線)
下がり始めの深度は 0.5m 付近と思われます。
- ・深部の北に下がる変化は強い反応です。(黒線)



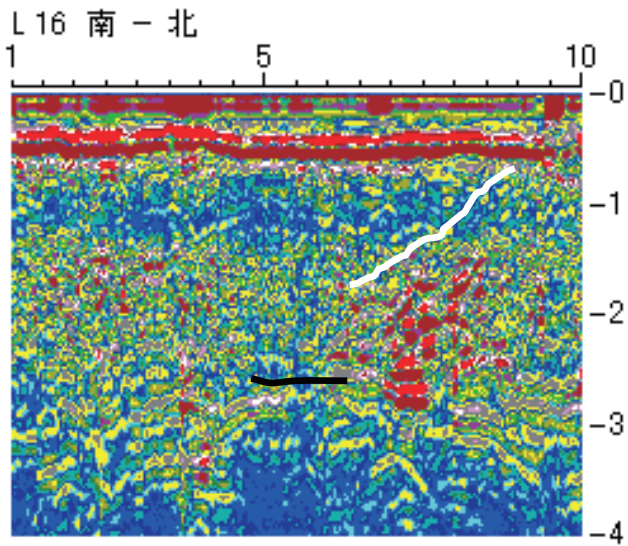
- ・強い反応の北に下がる変化が見られます。(黒線)



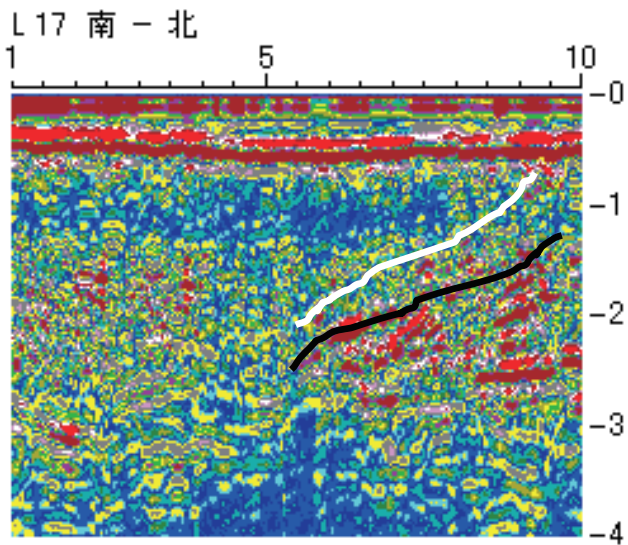
・南に下がる変化が見られます。



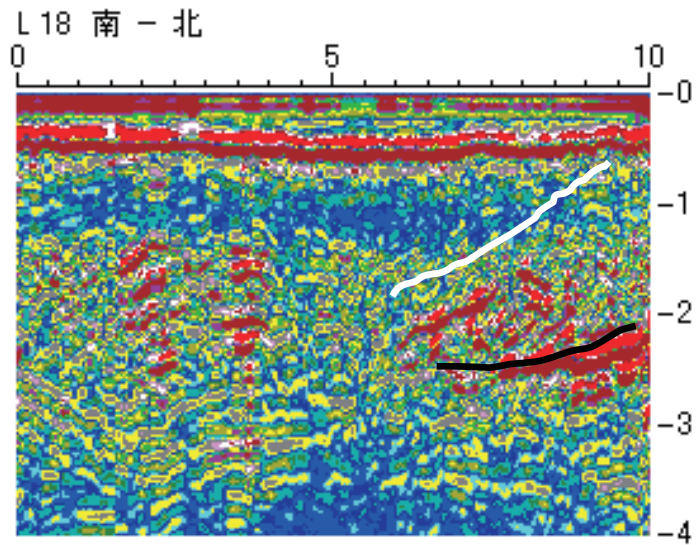
- ・ 4.0m～6.0m 付近に深度 1.5m、幅約 1.6m の円弧状の弱い変化と、深度 2.7m 幅 1.2 m 幅 1.2m に平らな強い変化（下の黒線）が見られます。この部分の土は電波の通り（誘電率）が悪いために深度 3.0m 付近から下側の反応は弱くなっています。
- ・ 9.0m～6.0m 付近に南に下がる弱い変化（白線）と、下側に強い南に下がる変化が見られます。下がり始まりの深度は 0.5m 付近と思われます。



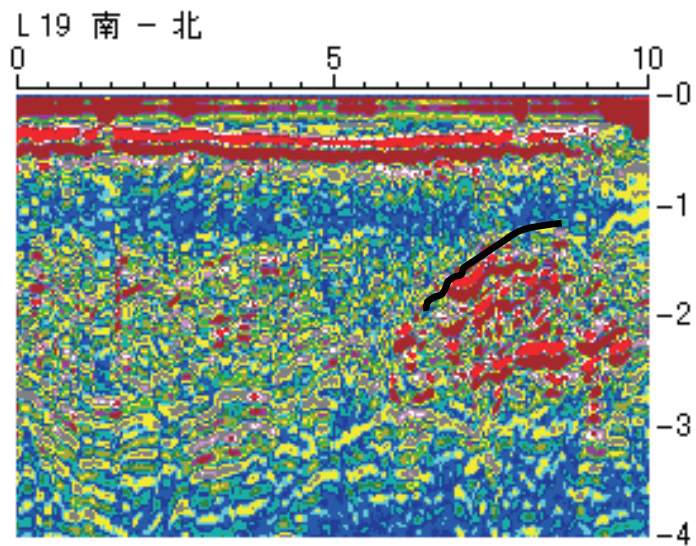
- ・ 4.5m～6.5m 付近は電波の通り（誘電率）が悪く、深度 3.0m 付近から下側の反応は弱くなっています。
- ・ 9.5m～6.5m 付近に南に下がる弱い変化（白線）が見られます、下がり始めの深度は 0.5m 付近と思われます。



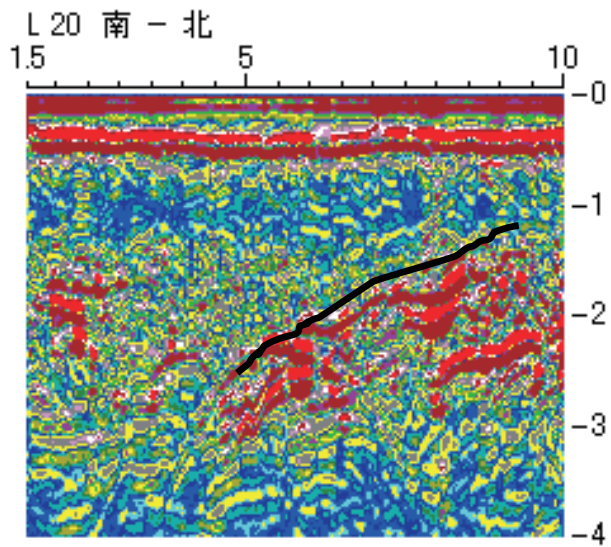
- ・ 9.2～6.0m 付近に南に下がる弱い変化（白線）と、下側に強い南に下がる変化（黒線）が見られます。下がり始めの深度は 0.5m 付近と思われます。



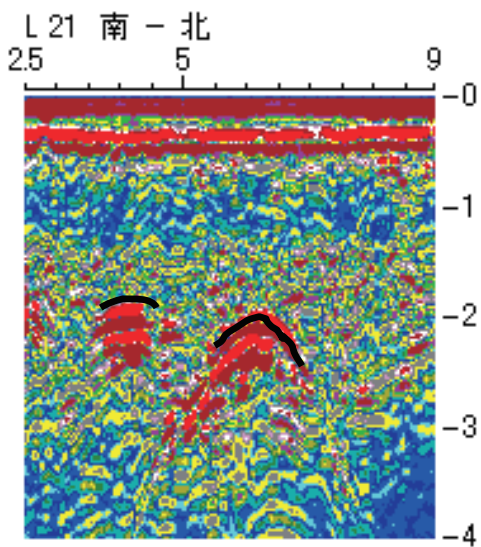
- ・ 9.5m～6.0m 付近に南に下がる弱い変化（白線）と、下側に強い南に下がる変化（黒線）が見られます。下がり始めの深度は 0.5m 付近と思われます。



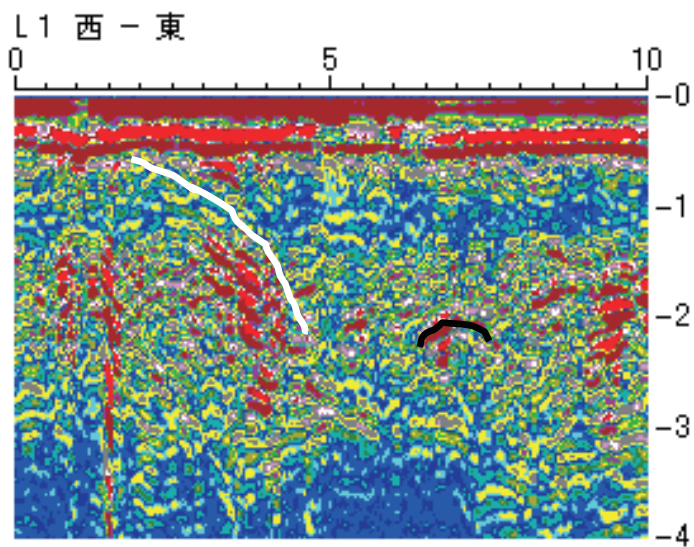
- ・ 8.0m～6.0m 付近に南に下がる強い変化が見られます。
- ・ 東西 5.0m から東側の南北測線では北側に南に下がる変化が見られますが、南北測線 5.0m から南側には北へ下がる変化が見られません。



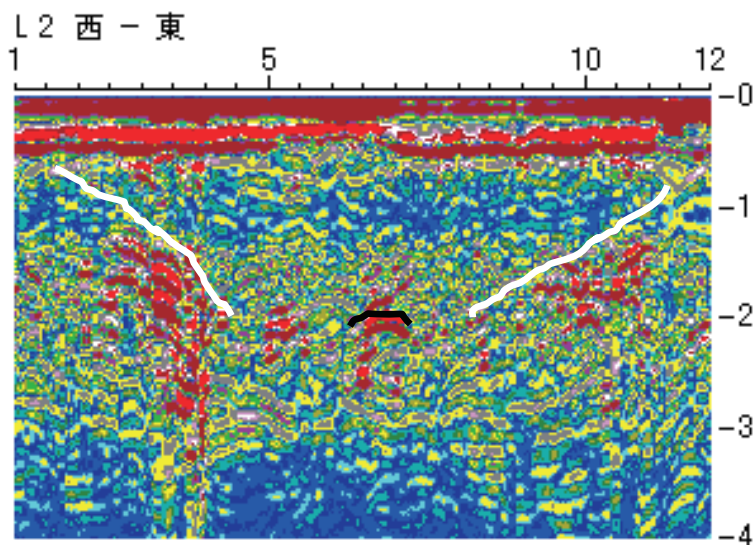
- ・ 9.0m～5.0m 付近に南に下がる強い変化（黒線）が見られます。



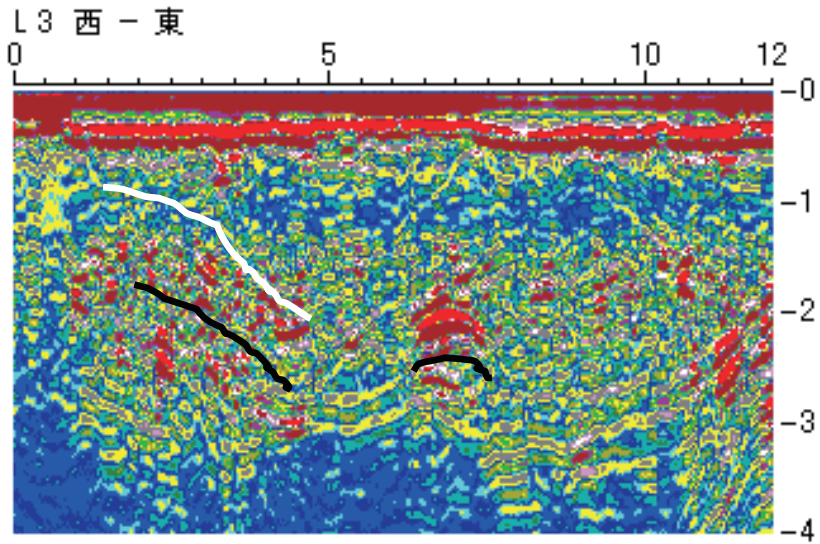
- ・ 深度 2.0m 付近に二つの強い変化が見られます、東西測線の 6 測線と 10 測線の強い反応の下がる変化の固い土か粘土の塊と思われます。



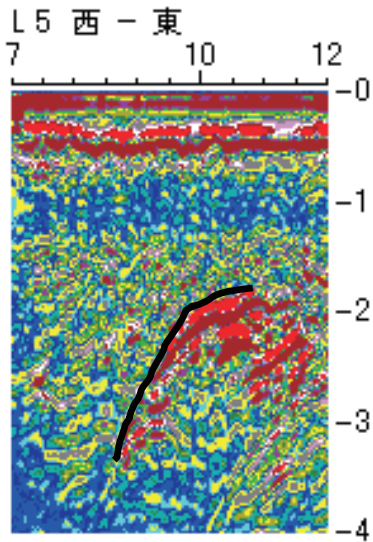
- ・ 2.0m～5.0m 付近に東に下がる強い変化が見られます。
下がり始めりの深度は 0.4m 付近と思われます。
- ・ 7.0m 深度 2.0m 付近に円弧状の強い変化が見られます、2・3 測線にも同じ位置に見られます。



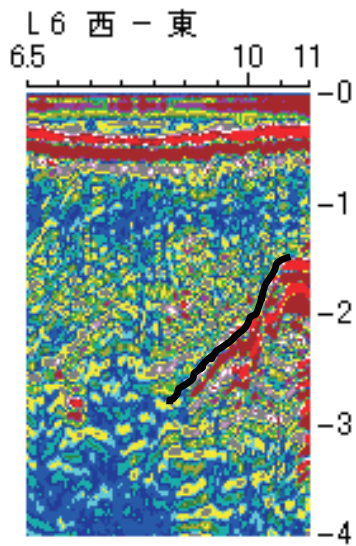
- ・ 1.5m～4.5m 付近に東に下がる変化と、11.5m～8.5m 付近に西に下がる変化が見られます。下がり始めりの深度は 0.5m 付近と思われます。
- ・ 6.9m 深度 2.0m 付近に円弧状の強い変化が見られます、1・3 測線にも同じ位置に見られます。



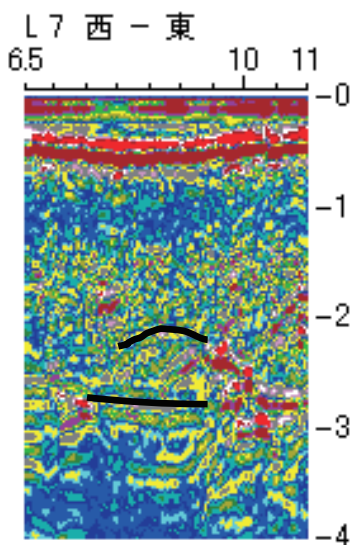
- ・ 1.5m～4.5m 付近に西に下がる弱い変化（白線）と、その下に強い変化（黒線）が見られます。下がり始めの深度は 0.5m 付近と思われます。
- ・ 6.8m 深度 2.0m 付近に円弧状の強い変化が見られます、1・2 測線にも同じ位置に見られます。



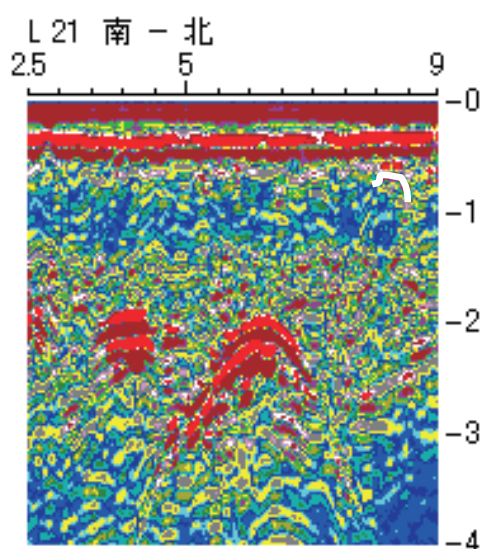
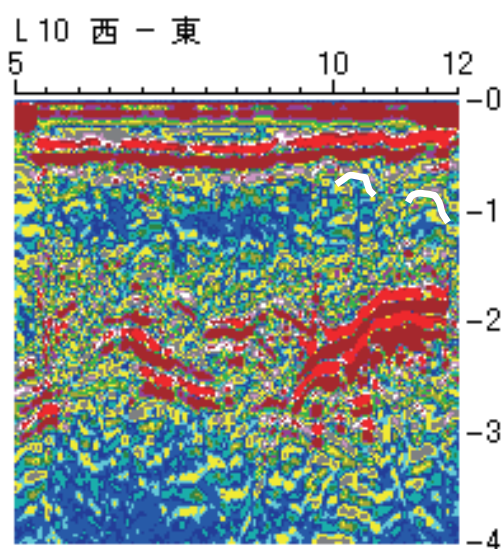
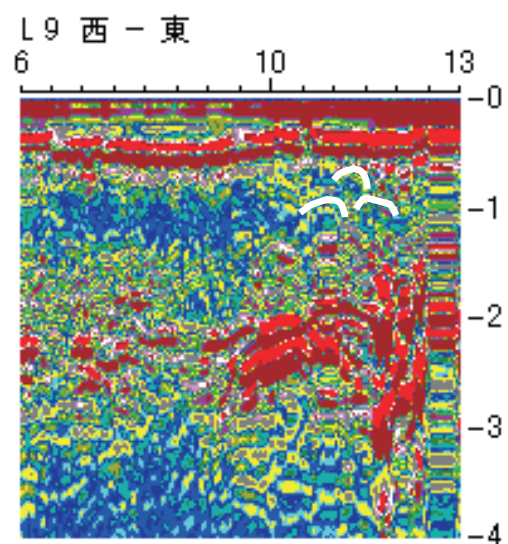
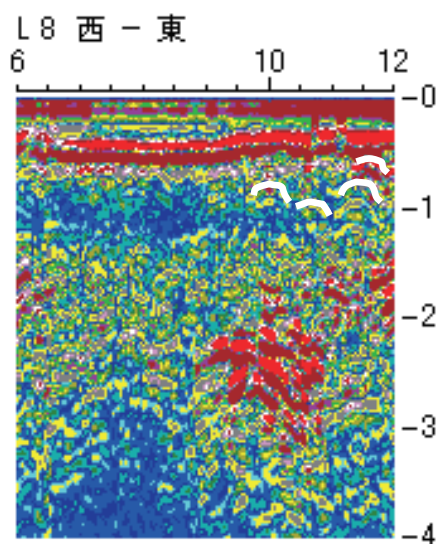
- ・ 11.0m～8.5m 付近に西に下がる強い変化が見られます。

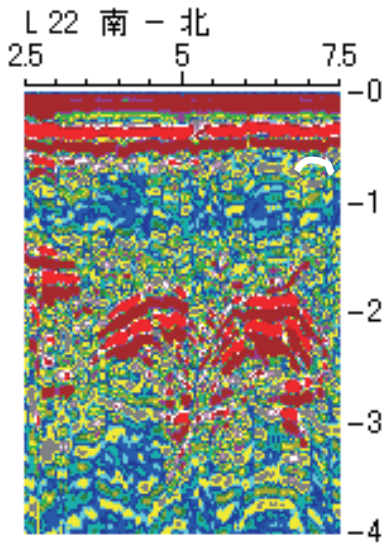


- ・ 11.0m～9.0m 付近に西に下がる強い変化が見られます。

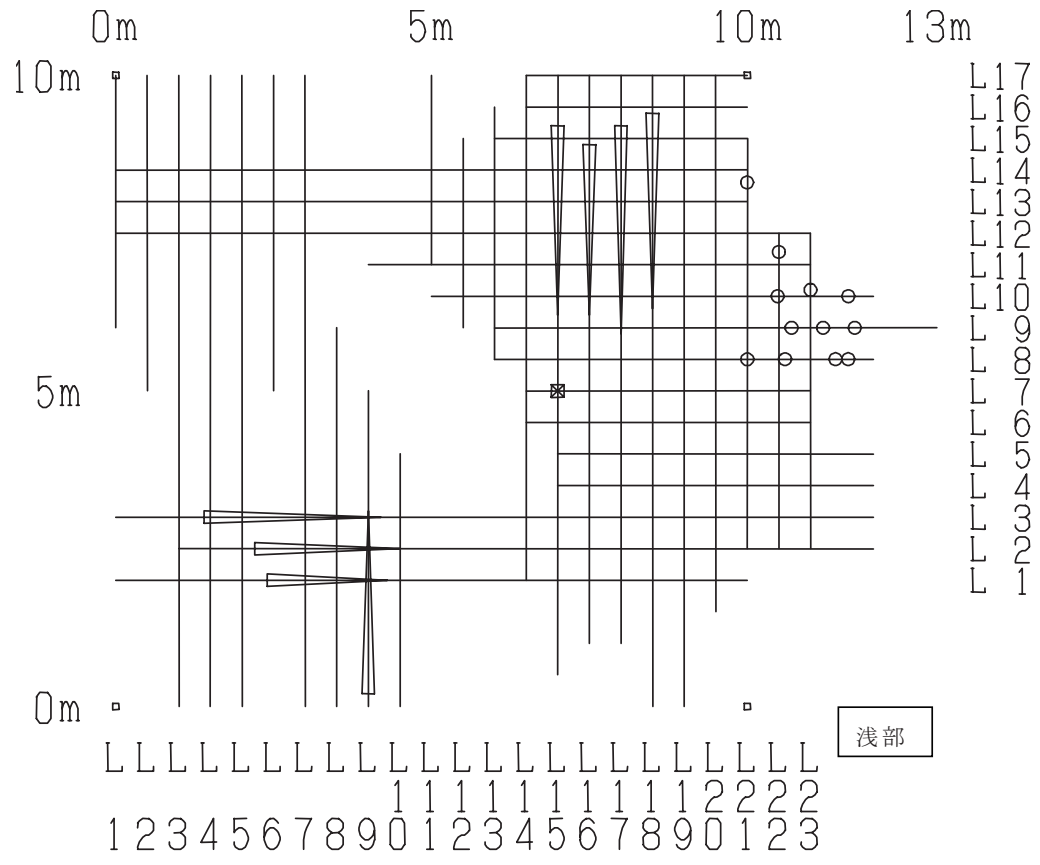


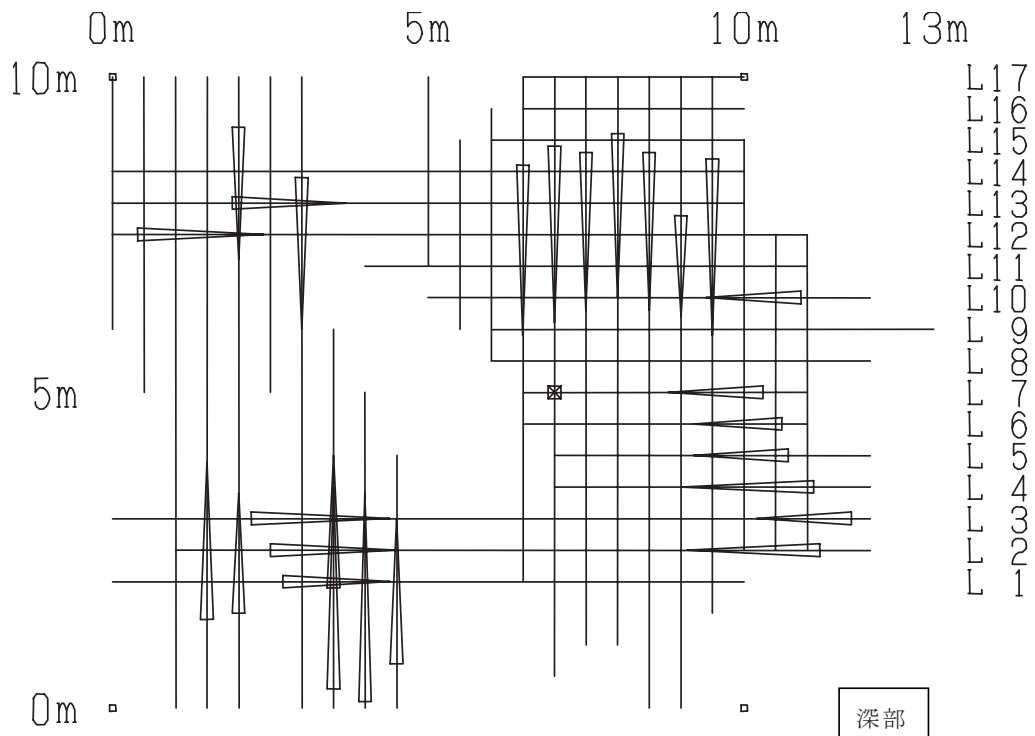
- ・ 平坦な変化と円弧状の変化が見られます、
 円弧状の変化 深度 2.1m
 平坦な変化 深度 2.8m



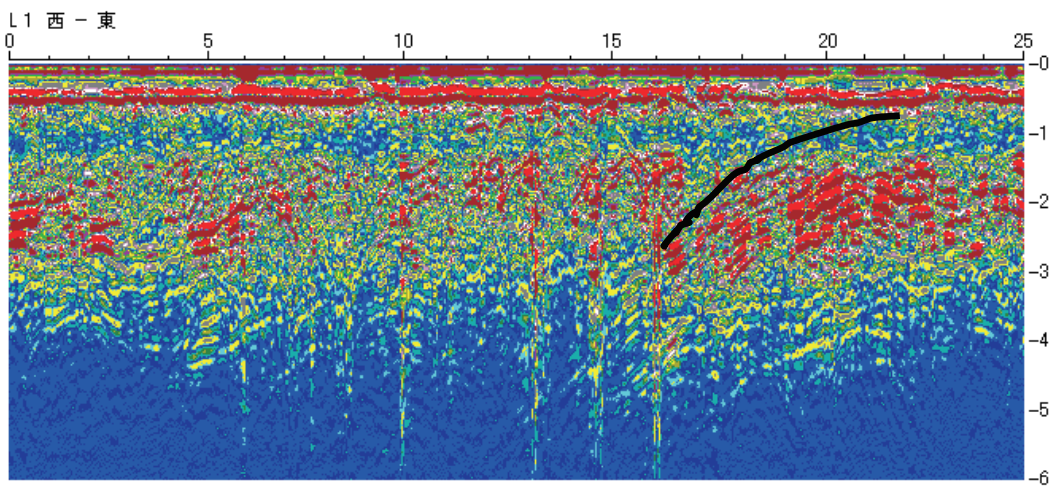


- ・白線で示した所は 0.2m 程度の大きさの石か粘土の塊と思われる反応で、深度は 0.5~0.9m 付近です。
- ・位置は次頁変化図浅部の○印の所です。

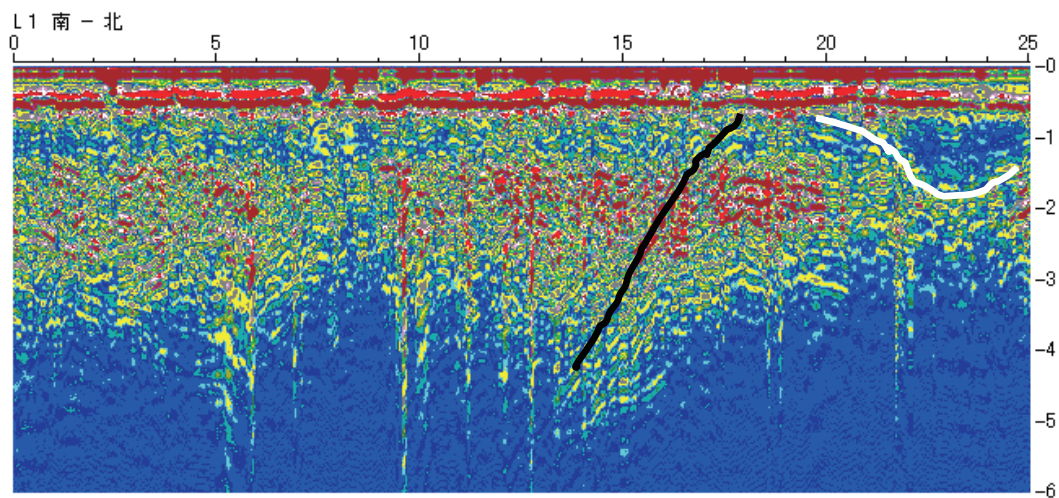




- 上段図は深度 0.5m 付近からの下がる変化と、前頁の石か粘土の塊の変化（丸印）を示した図です。
- 下段図は深度 1.0m 付近以下の下がる変化を示した図です。



- 9.0m 付近から 0.0m は墳頂部です。
- 22.0m 付近から 16.0m 付近まで下がる黒線は実際には平で 22.0m 付近から法面をアンテナが登っているため下がる変化になって見えます。

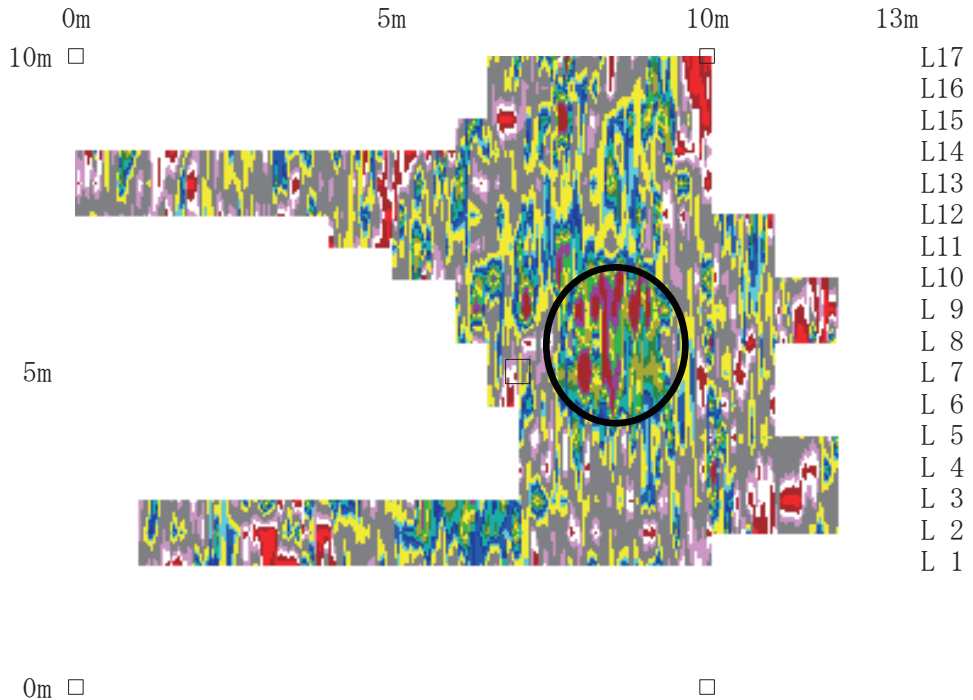


- 8.5m 付近から 0.0m は墳頂部です。
- 17.5m 付近から 13.5m 付近まで下がる黒線は実際には平で 17.5m 付近から法面をアンテナが登っているために下がる変化になって見えます。
- 20.0m～25.0m の白線は北へ下がる変化で深度は 1.6m 付近です、下がる変化の上部の土は均一で電波の通りの良い土と思われます。

おわりに

- ・ 墳頂部の中心付近に極浅いところに長さ 4.0m、幅 2.0m の陥没と思われる変化が見られます。(2 頁参照)
- ・ 深度 1.0m~2.0m 付近に強い下がる変化が墳丘内側に向いて下がっています、一度周りに土手を作ってから墳丘を積み上げたと思われます。(4~7 頁黒線部参照)

深度 0.62m



- ・ 東西測線のこの深度にほぼ真円に近い変化が見られます、注意してください。

敏請内古墳第2次レーダ探査報告

桜小路電機有限公司 工藤博司

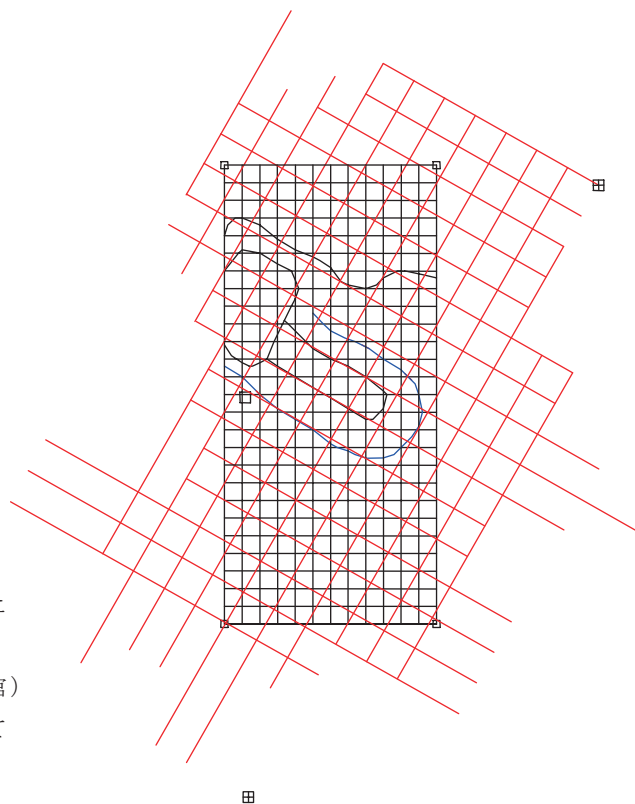
- ・ 22年（第2次）、19年（第1次）探査画面を精査しましたが空洞パターンや金属等の反応は見られません。
- ・ 目標物（棺）は弱い反応で周りの積み土が強い反応でなっています。

空洞パターン

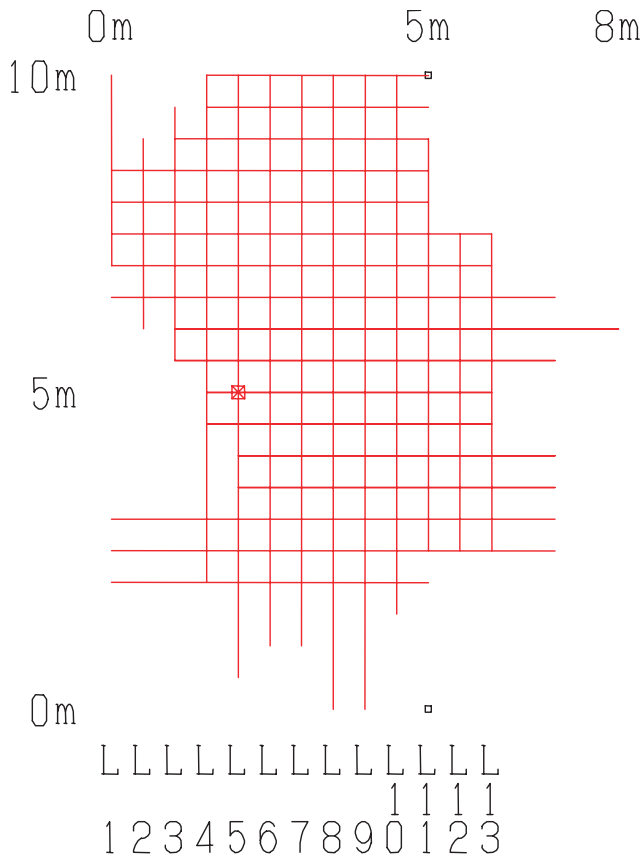
塩ビ管に乾いた砂を入れて地中に埋設しレーダで探査すると乾燥した砂は電波速度が早くなるために砂の下の画像が持ち上がって見える現象です。

* 測線図・特殊描写入り断面・断面は次頁以降に示してあります。

赤線 第1次探査測線
黒線 第2次探査



- ・ 右の平面は17年探査測線と22年探査測線を合わせた測線図です。
- ・ 22年探査測線に目標物（棺）を測量図から起こして入れてあります。

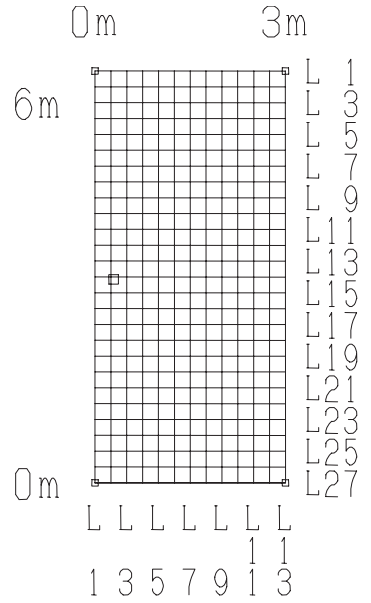


19年（第1次）探査測線

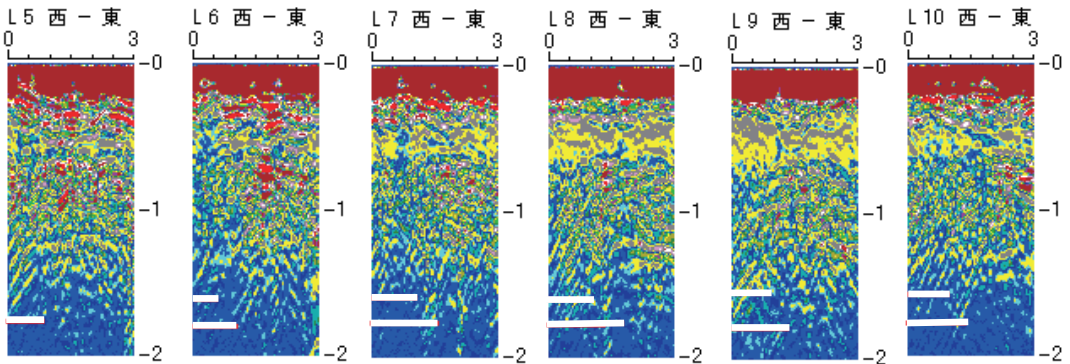
・西側5mのデータは削除しています。

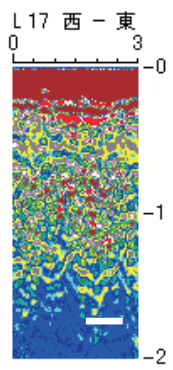
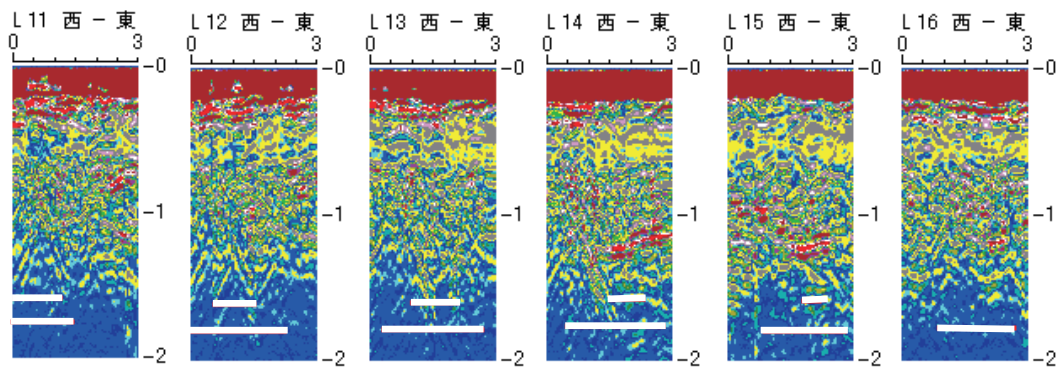
・

22年（第2次）探査特殊描写入り断面（1/150）

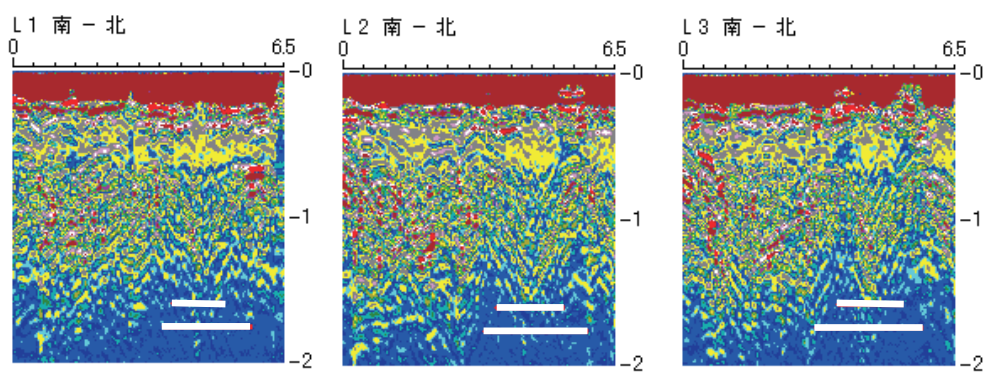


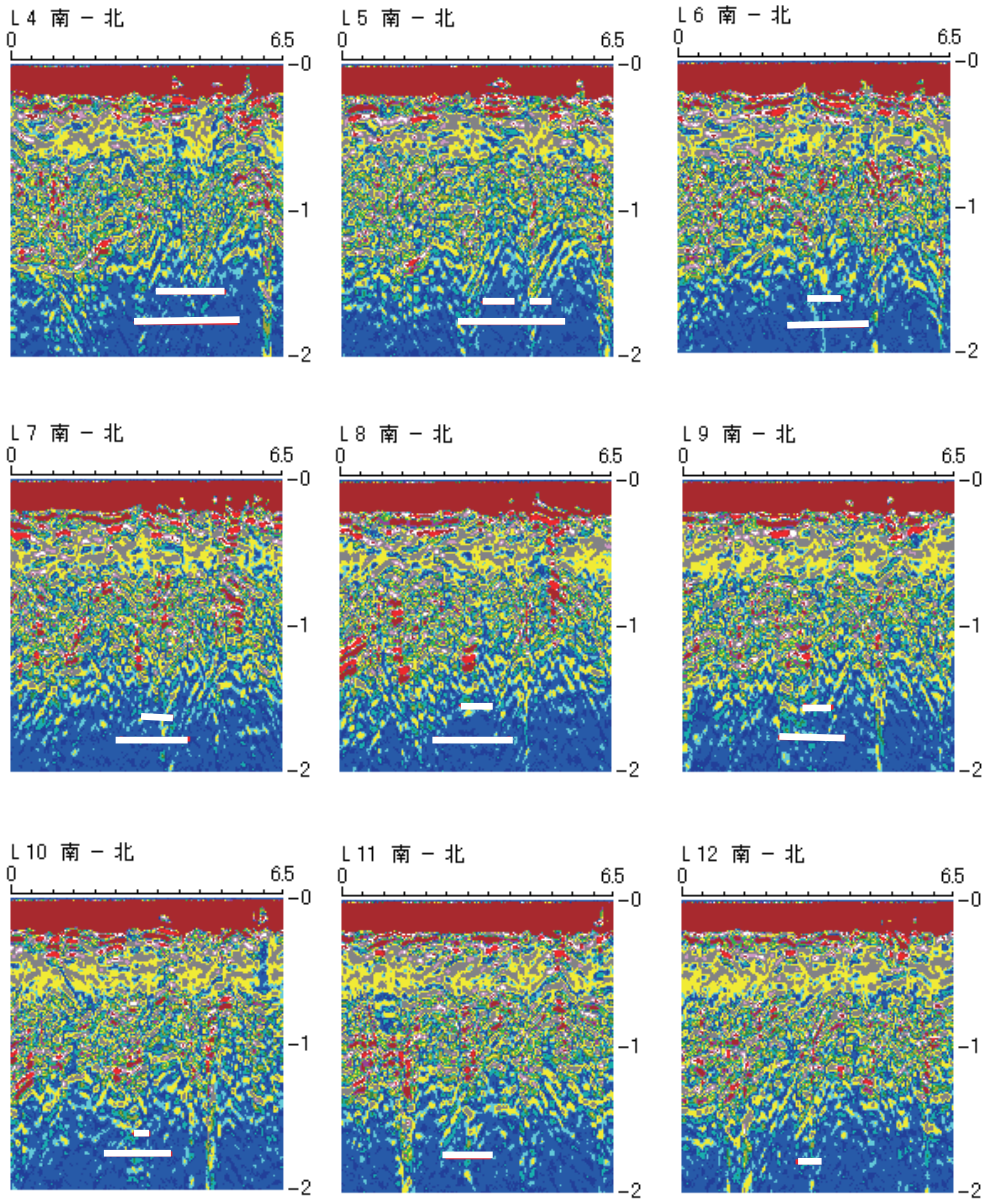
22年（第2次）探査測線



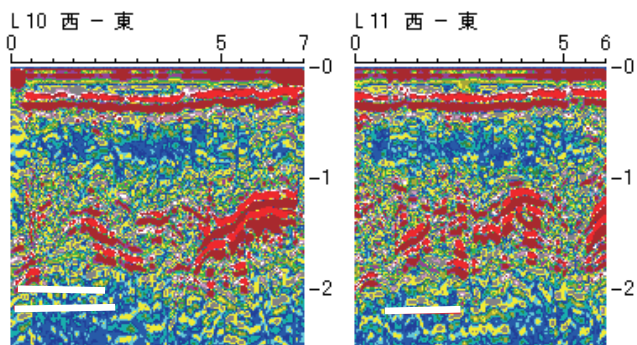
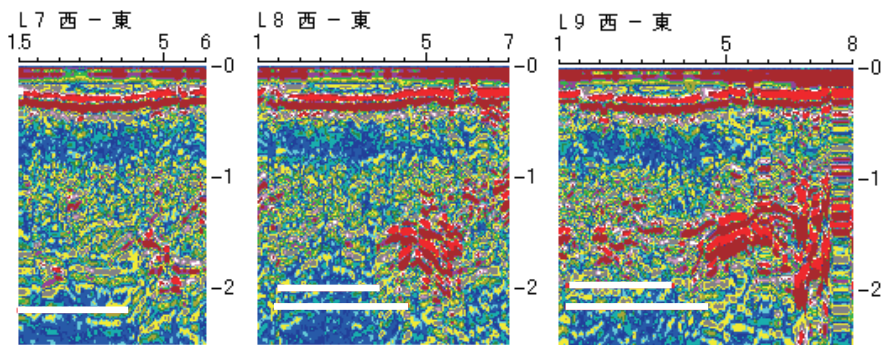


- ・断面内の白い横棒は実測図から起こした目標物（棺）の位置です。
- ・上が目標物（構築物）の上面で下は目標物（構築物）の裾です。
- ・白い横棒一本は目標物（構築物）の裾です。

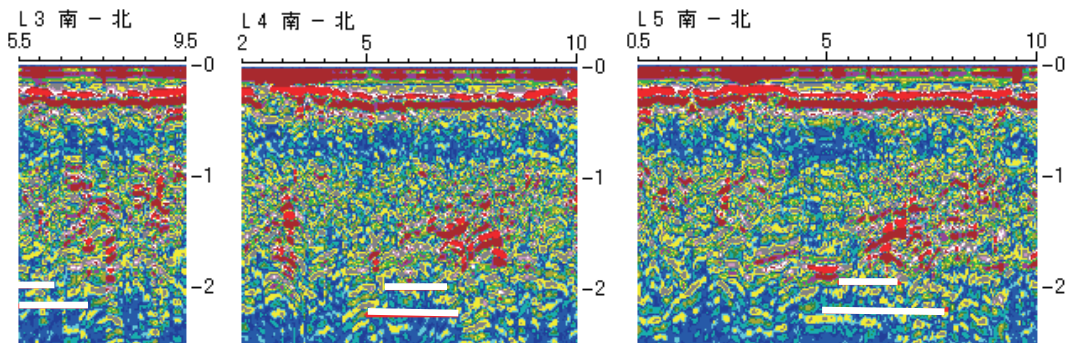


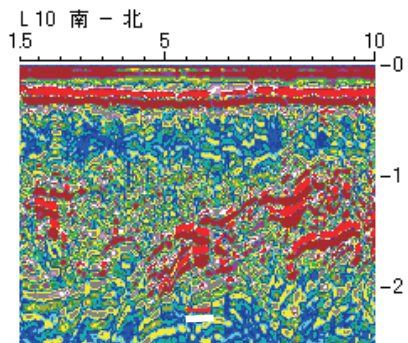
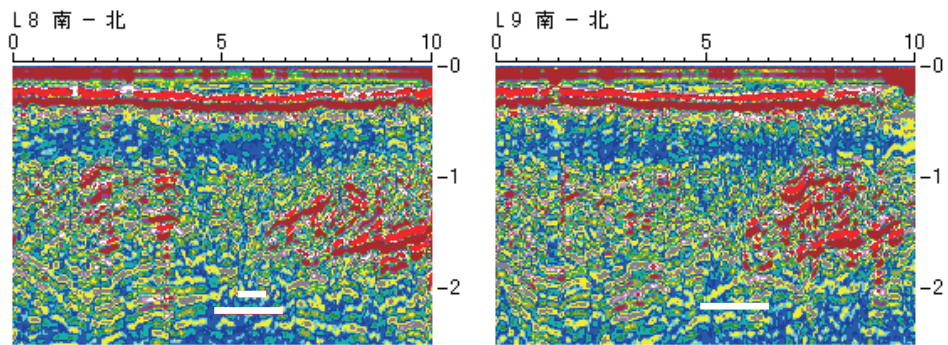
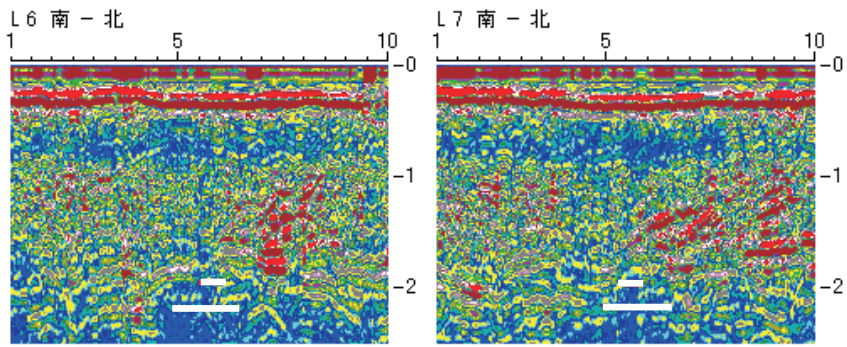


- ・断面内の白い横棒は実測図から起こした目標物（構築物）の位置です。
- ・上が目標物（構築物）の上面で下は目標物（構築物）の裾です。
- ・白い横棒一本は目標物（構築物）の裾です。



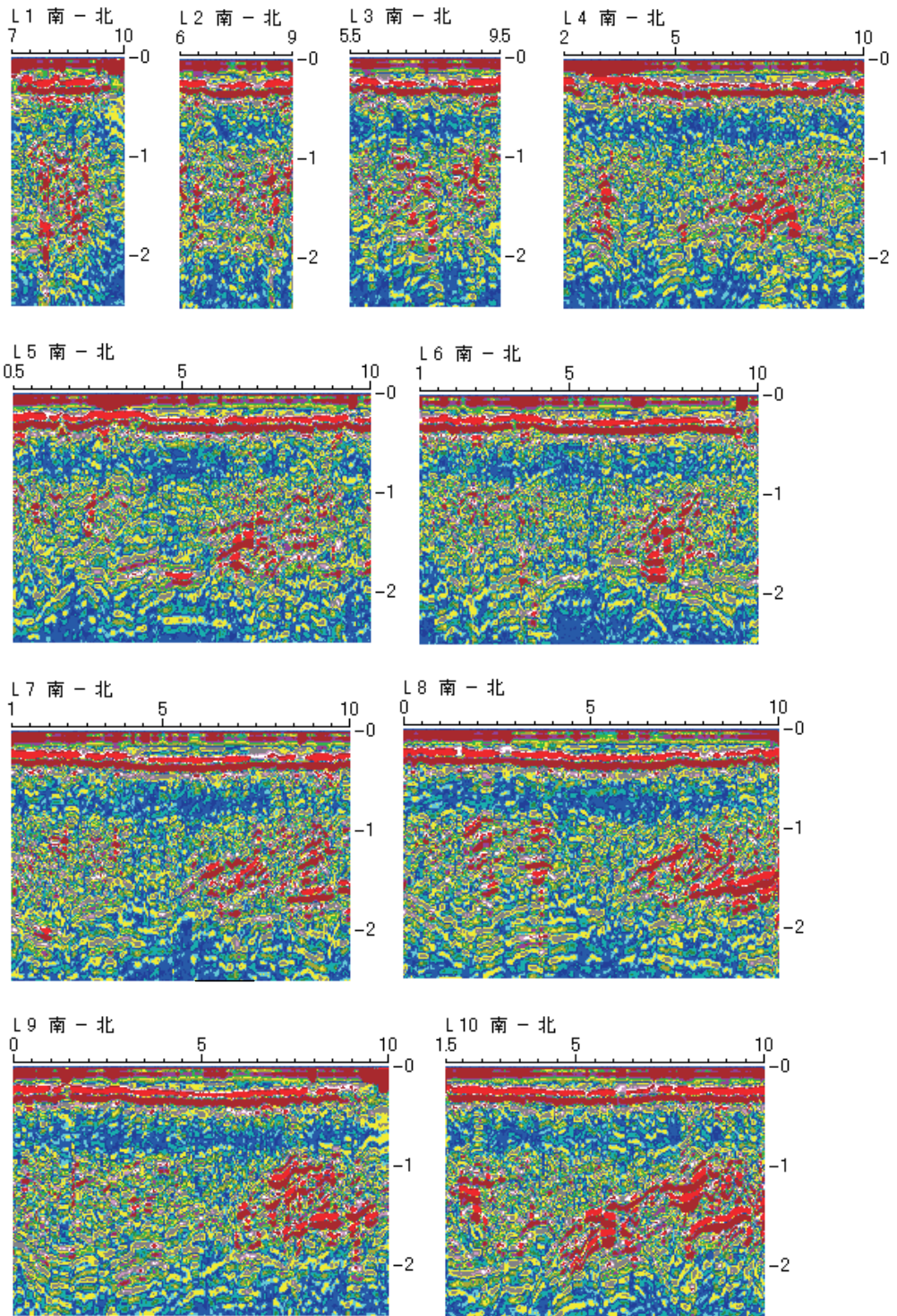
- ・断面内の白い横棒は測量図から起こした目標物（構築物）の位置です。
- ・上が目標物（構築物）の上面で下は目標物（構築物）の裾です。
- ・白い横棒一本は目標物（構築物）の裾です。

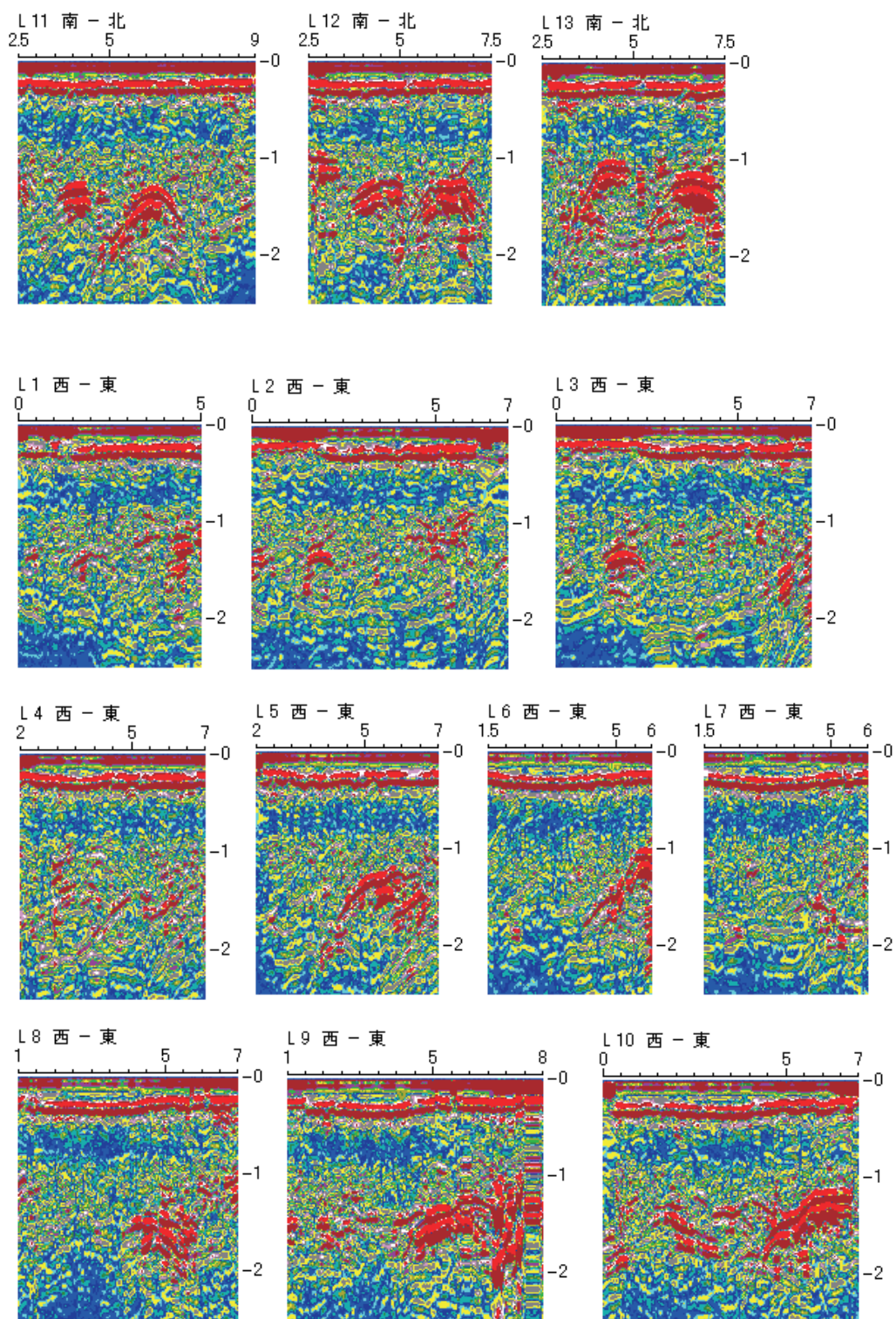


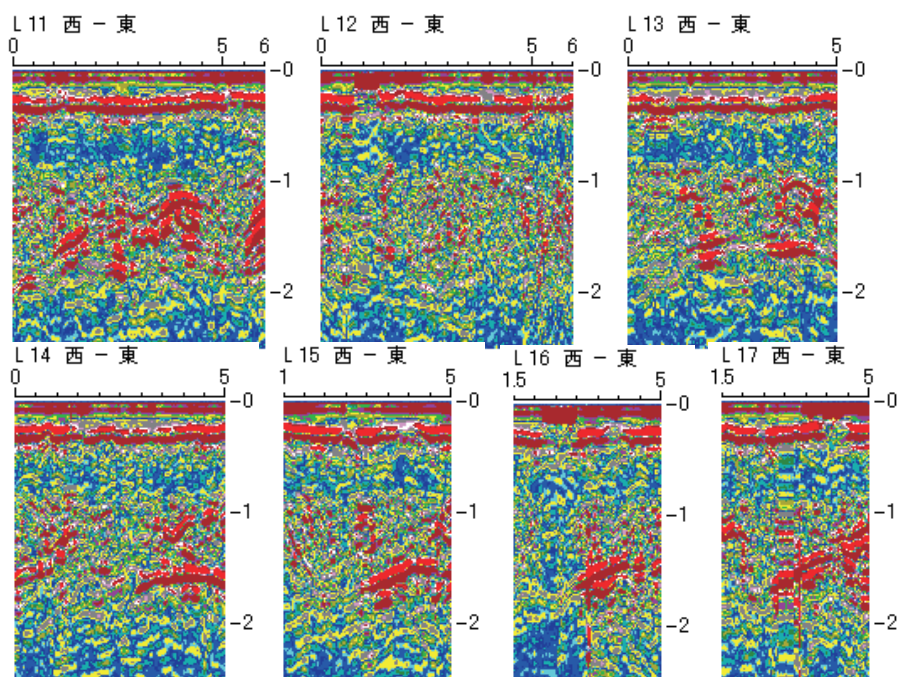


- ・断面内の白い横棒は測量図から起こした目標物（構築物）の位置です。
- ・上が目標物（構築物）の上面で下は目標物（構築物）の裾です。
- ・白い横棒一本は目標物（構築物）の裾です。

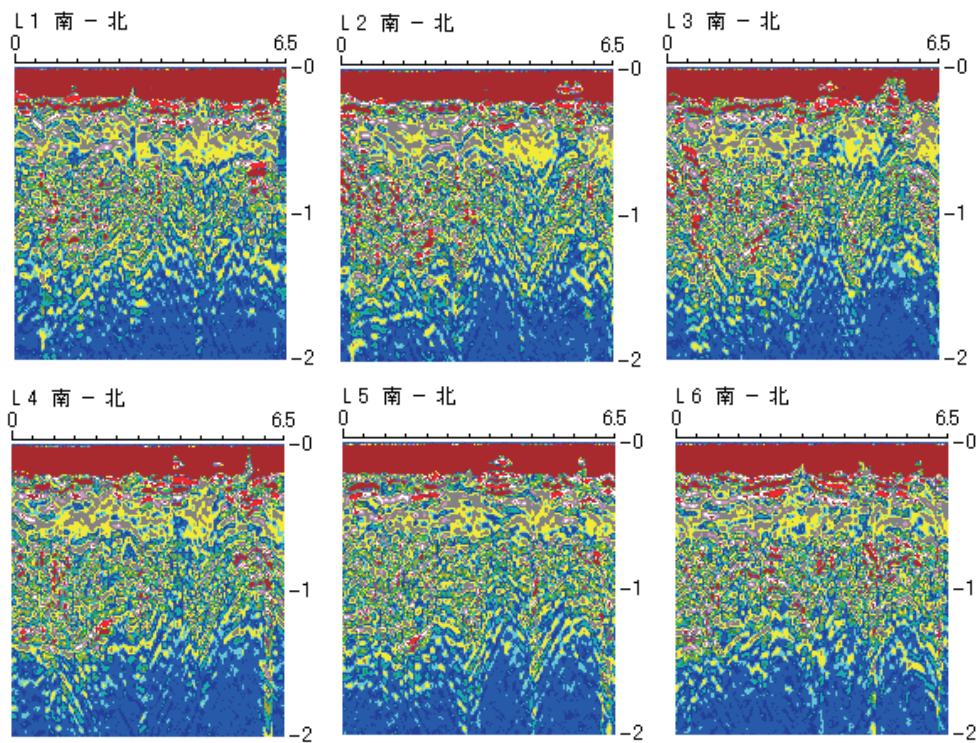
1999年（第1次）探查断面 1/150

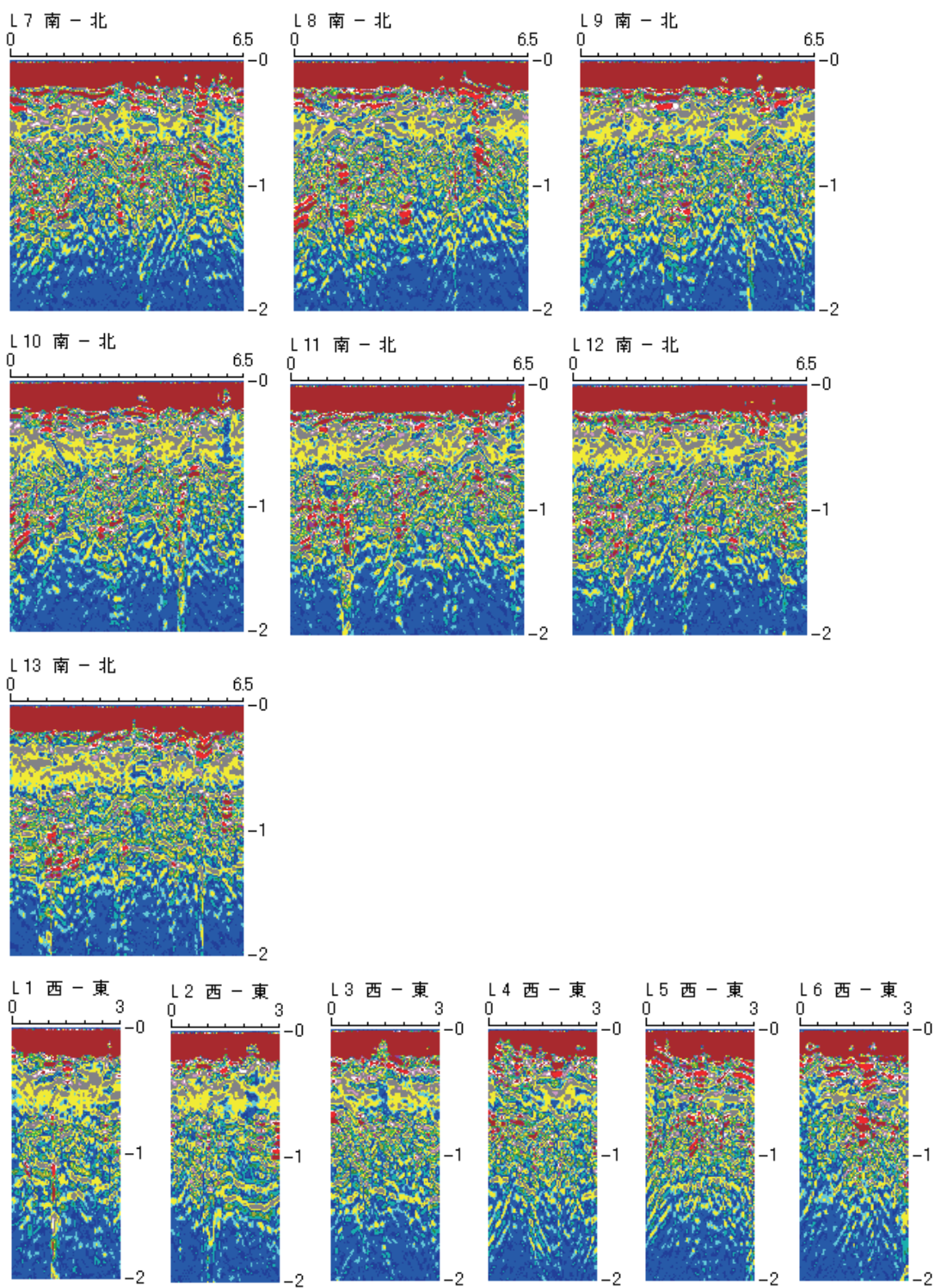


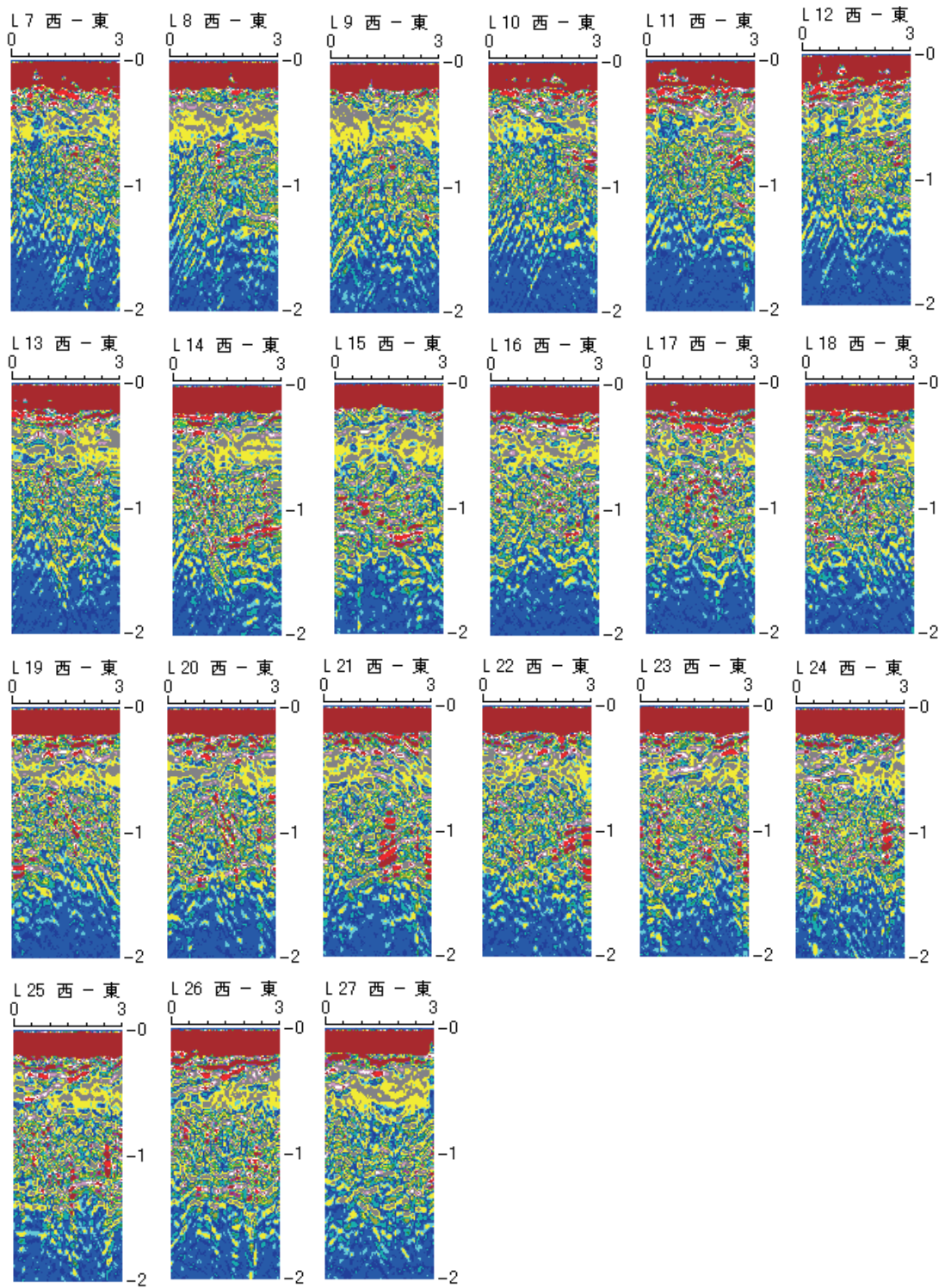




2 2 年（第 2 次）探査断面



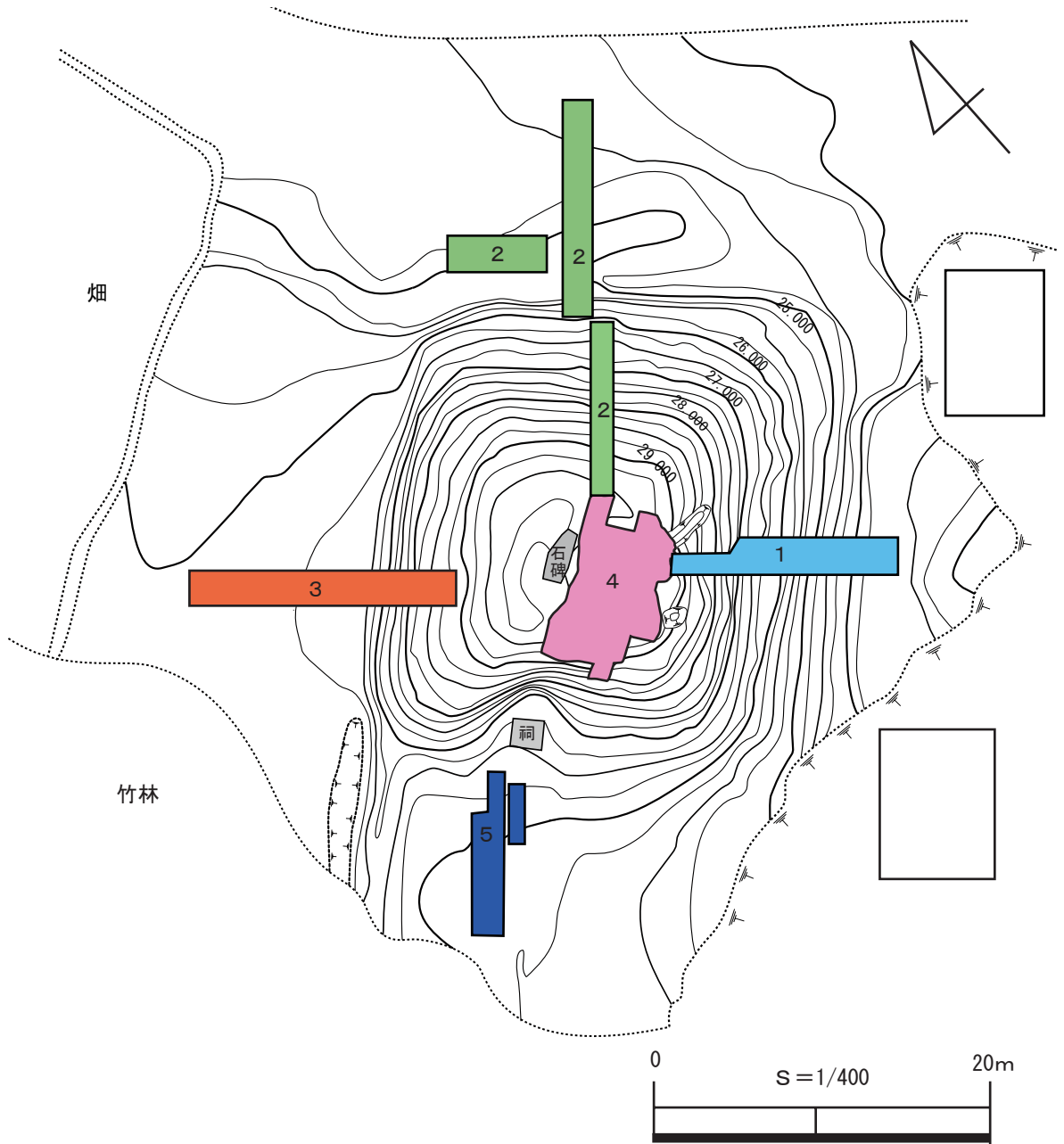




第4章 発掘調査成果

第1節 墳丘の調査

墳丘構造を知るために東西南北の各斜面にトレンチを設定した。第1及び第3トレンチは墳丘東西の主軸に方向をあわせており、第1トレンチ南壁、第3トレンチ北壁を主軸と一致させている。北斜面の第2トレンチ西壁は墳丘南北の主軸にあわせ、墳頂の第4ト



第6図 歙請内古墳測量図、トレンチ配置図

ンチ西壁ともあわせてあるが、南斜面の第5トレンチは祠を避けて設定したため、主軸からはずれた位置にある（第6図）。

1、墳丘東斜面

墳丘東斜面の構造を知るために東斜面の中央に墳丘の主軸方向にあわせて第1トレンチを設定した。

第1トレンチでは、上段斜面、上段テラス、中段斜面、下段テラス、下段斜面、墳端を検出した。（第8図）

上段斜面は、標高28.5m前後の墳頂部との傾斜変換点から始まり、標高26.5mの上段テラスとの傾斜変換点まで続く。すべて積み土で構成されている。斜距離で約5m、標高差2m前後である。傾斜は約40度を測る。

上段テラスは標高26.2mから26.3mの位置に当たる。幅は70cm前後と狭いが上段斜面と中断斜面にくらべて明らかに傾斜が緩く、テラスと判断した。

中段斜面は上段テラスとの傾斜変換点から下段テラスとの変換点までである。斜距離にして4.4mを計測する。長さ、角度ともに上段斜面とほぼ同じである。中段斜面のやや低い位置に幅30cmほどの黒色土があり、旧表土と判断した。中段斜面のうち旧表土より上方の墳丘は積み土で構成され、旧表土より下はシルトと砂礫の互層で構成される地山を削りだして作られている。

下段テラスは、標高24.0mから24.5m付近である。緩やかな傾斜はあるが、中段斜面と比べて明らかに傾斜角度が変わり、下段斜面との間にも明らかな傾斜変換点を持つため、テラスと判断した。幅は2.2m前後を測る。テラスは地山を削り出して作られている。

下段斜面は下段テラスから墳端にいたる斜面である。幅は80cm程で短い。標高23.2m前後で、その外側とは明瞭な傾斜変換線を形成するため、下段斜面下端すなわち墳端と判断した。

下段斜面の東側すなわち墳丘の外側に周濠が存在するか否かは古墳の立地する丘陵の東側がすでに削られてしまっているため判断できなかった。

第1トレンチの調査結果により、東側墳丘には上下2段のテラスが巡り、墳丘は上、中、下の三段で構成されることが明らかとなった。墳丘の築成は、当時の地表面と地山を削って墳丘斜面と下部のテラスを作り出し、その上に地山の土を積み上げ、三段構成の墳丘をつくったと考えられる。（伊東静香）

出土遺物

墳丘面を覆う墳丘流出土からは約200点程度の土師器片及び弥生終末期の土器片が出土した。整理作業の結果、土師器片の大多数が朱彩の壺形土器の破片であった。確認できた底部はすべて焼成前に穿孔されている。残念ながら全形を復元できる個体はないが、口縁部、体部の形態などからほぼすべて底部穿孔の二重口縁壺形土器と見られる。すべて古墳に伴う資料と見られる。墳丘上段斜面に多く出土し、テラスや墳丘下部に下るにつれて出土点数が減る様子から見て墳頂平坦面に置かれた二重口縁壺が周囲に流れたと見ることが

できよう。底部資料が第1トレンチだけでも10点出土しており、墳頂に置かれた二重口縁壺形土器は数十個体に登る可能性があるろう。なお、旧表土中あるいは旧表土起源の天王山式あるいはその後続型式の土器破片も若干出土している。

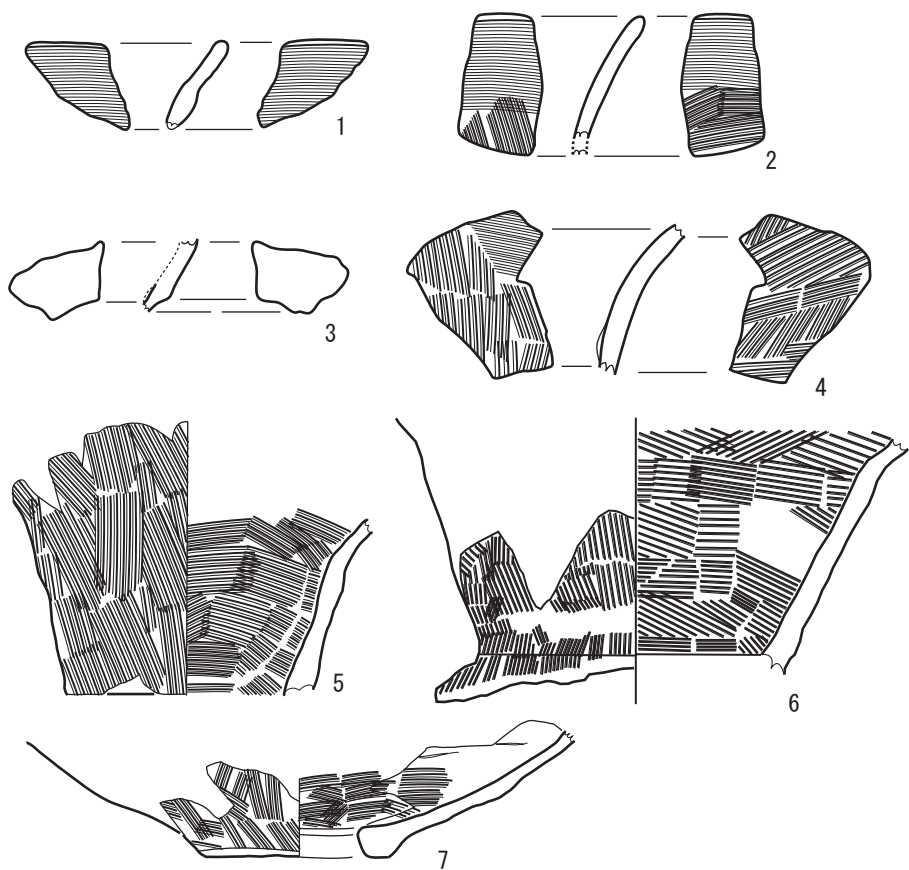
底部穿孔壺形土器（第7図、写真2）

1、2は口縁端部の破片である。1は、調整は内外とも横ナデで、赤彩は見られない。2は、調整は内外とも横ナデ・ハケメで、赤彩が施されている。3は頸部から口縁部に至る段に貼り付けられた粘土紐だと思われる。調整は内外とも施されていないが、外面には焼成痕、内面には剥離した痕跡が確認できた。この粘土紐は辻編年のⅢ-2期以降の土器によく見られる特徴の一つである。頸部から口縁部にかけての段は徐々に退化していき、代わりにこの粘土紐によって段が形成された土器が増えてくる傾向がある。4は口縁部の破片で調整は、外面は横ナデと縦・斜め方向のハケメ、内面には横・斜め方向のハケメが施されている。外面には赤彩が見られた。7は焼成前穿孔が施された底部片で、残存高5.5cm、底部径8.0cm、穿孔径約6.0cmを測る。穿孔部は内傾しながら立ち上がり体部に至る。調整は、外面は縦・斜め方向のハケメ、内面は横・斜め方向のハケメが施されている。外面の一部焼成痕が見られる。5は頸部片で、残存器高11.0cm、頸部径約10.0cmの二重口縁壺の頸部片である。内外面に赤彩の痕跡が見られる。調整は、外面が縦・斜め方向のハケメ、内面は横・斜め方向のハケメが施されている。6も頸部片でわずかに体部上半と接合できた。残存器高10.7cm、頸部径約13.0cmの二重口縁壺の頸部片である。外面には縦・斜め方向のハケメ、内面には横・斜め方向にハケ調整が施されている。内面に赤彩の痕跡が見られる。5よりもやや大きめで、外傾しながら口縁部に至ると考えられる。なお5~7はいずれも反転復原を行った。

これらの破片で底部穿孔壺形土器の全形を描くことは困難だが、可能な範囲で考えてみたい。まず、頸部に屈曲部が確認できず、外反しながらのびて口縁部に至り二重口縁を形成しないと予想される。また、体部は全体に丸みを帯び、内外共に刷毛目で調整される。以上のような特徴から、全体の姿は郡山市大安場古墳出土底部穿孔壺形土器（柳沼賢治他 1998）と近い形態を持ち、辻編年のⅢ-3または4（辻 1994、1995）に位置づけられると推測された。古墳築造も底部穿孔壺形土器の時期、前期中葉から後半の中で収まると考えられる。（畑中 光）

引用文献

- 辻 秀人 1994 「東西南部における古墳出現期の土器編年-その1 会津盆地-」『東北学院大学論集 歴史学・地理学 史学科創立30周年記念 第26号』pp.105~140 東北学院大学学術研究会
- 辻 秀人 1995 「東西南部における古墳出現期の土器編年-その2-」『東北学院大学論集 歴史学・地理学 第27号』pp.39~88 東北学院大学学術研究会
- 柳沼賢治他 1998 『大安場古墳群-第2次発掘調査報告-』郡山市教育委員会



第7図 第1トレンチ出土底部穿孔二重口縁壺形土器実測図（縮尺1/3）



写真2 第1トレンチ出土底部穿孔二重口縁壺形土器写真



第1トレンチ全景 (N→W)



第1トレンチ遺物出土状況① (遠景)



第1トレンチ遺物出土状況② (遠景)



第1トレンチ遺物出土状況② (近景)

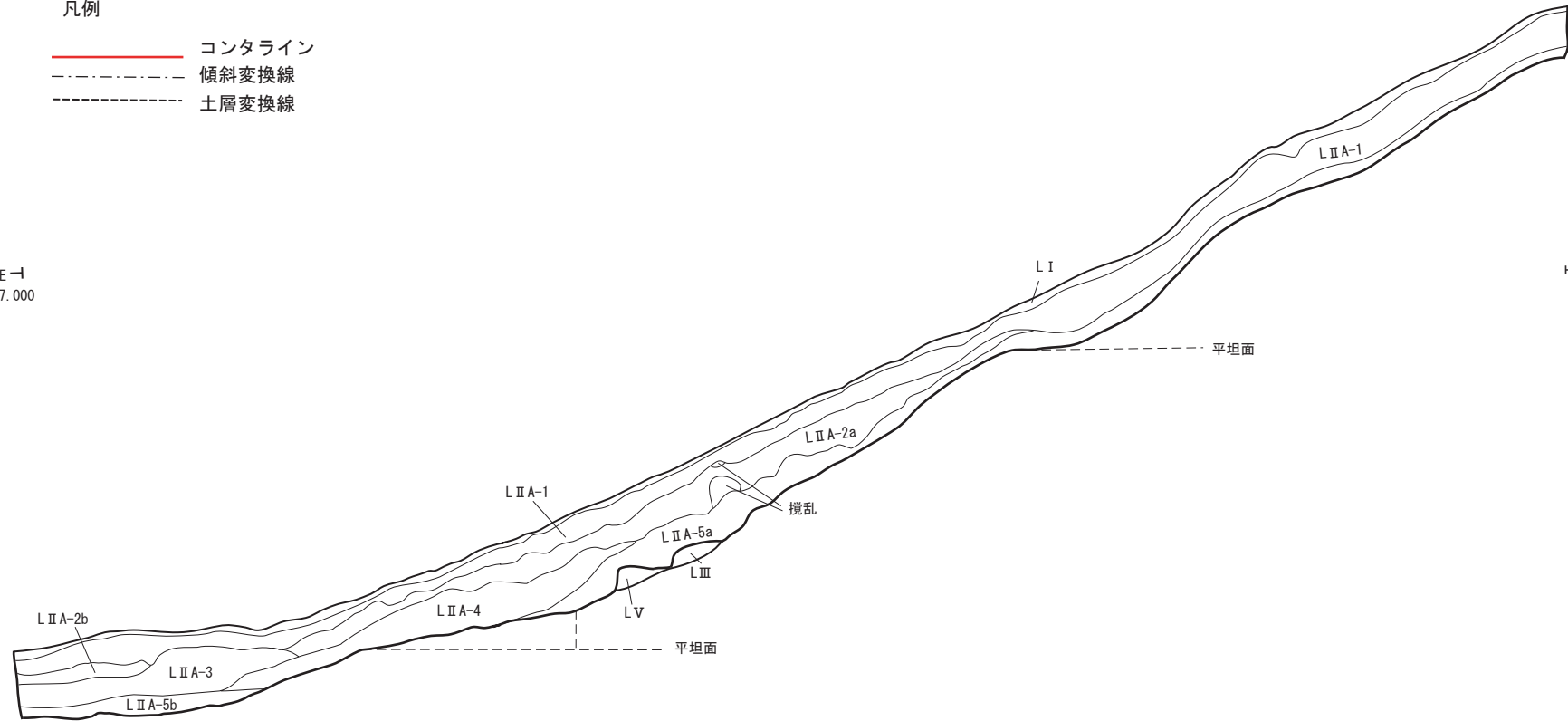
写真3 第1トレンチ写真

凡例

- コンタライン
- - - - 傾斜変換線
- - - - 土層変換線

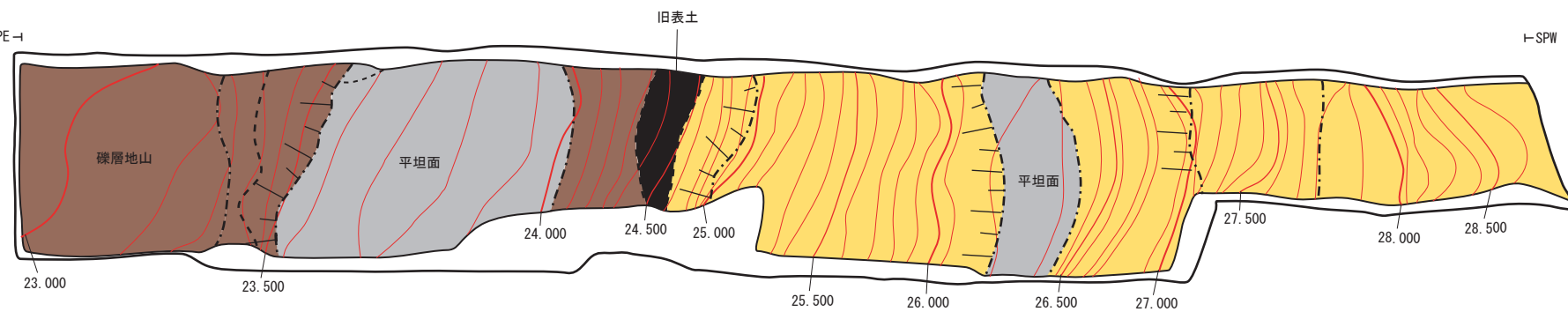
SPE-1
H=27.000

I-SPW
H=27.000



SPE-1

I-SPW



土層注記

層位	色調	土質	粘性	しまり	混入物
L1 表土	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	やや弱	やや弱	
L II A-1 流出土	10YR3/3暗褐色	シルト	やや弱	中	暗褐色(10YR3/3・粘質やや弱・しまり中)を含む
L II A-2a 流出土	10YR6/6明黄褐色	シルト	弱	やや弱	
L II A-2b 流出土	10YR3/4暗褐色	シルト	やや弱	中	
L II A-3 流出土	10YR4/5褐色	シルト	やや弱	中	褐色(10YR4/6・粘質やや強・しまり中)を含む
L II A-4 流出土	10YR3/4暗褐色	シルト	やや弱	中	褐色(10YR4/6・粘質やや弱・しまりやや弱)を含む
L II A-5a 流出土	10YR3/3暗褐色	シルト	やや弱	やや強	暗褐色(10YR3/4・粘質やや弱・しまり中)を含む
L II A-5b 流出土	10YR1/3黒褐色	シルト	やや弱	やや強	
L III 旧表土	10YR2/2黒褐色	シルト	中	中	
L V 地山	10YR5/6黄褐色	粘性シルト	やや強	強	

第8図 第1トレンチ平面、断面図 (1/60)

2、墳丘北斜面

墳丘北斜面の構造を解明するため、第2トレンチを古墳南北主軸にトレンチ西壁を合わせて設定した。ただし、墳丘上の立木があり、一部調査不能であったため、上下に分断せざるを得なかった。また、周濠等の様相を知るため、墳丘外の主軸上および主軸に直交する方向にもトレンチを拡張した。2トレンチの墳丘上部をA区、墳丘下部をB区、主軸方向の墳丘外部をC区、墳丘外部主軸直交方向をD区とした。

A区の調査の結果、墳丘斜面を検出した。墳頂平坦面との傾斜変換線が標高28.8m付近で見られ、その変換線から、傾斜約20度の墳丘斜面となっていたが、調査区の標高27.0m付近より下では古墳築造以降の攪乱があったため、墳丘本来の姿は確認できなかった。しかし、攪乱により墳丘断面が露出したため、墳丘積土の層序を観察することができた。墳丘積土は下層に粘土質の土、上層に礫混じりの白色の土が積まれていることが判明した。また、墳丘積土の下層には黒色土層があり、弥生土器片が包含されていた。この土層は旧表土層とみられる。また、さらにその下層は地山であることが判明した。

2トレンチB区では墳丘斜面と墳端を検出した。墳端は標高24.200m付近で、地山を削りだして作りだされていた。周濠と思われる掘り込みは確認されなかった。

2トレンチC区では水道管や畑の畝などが検出されたが、周濠の落ち込みは検出できず、周濠外縁と判断できるような上がり等も検出されなかった。

2トレンチC区がたまたま陸橋部にあたっている可能性を考慮し、B区に直交する方向にD区を設定し調査を行ったが、周濠は確認できなかった。

以上、第2トレンチの調査結果を総合すると、墳丘北側斜面では墳丘が攪乱されており、テラスの有無について手がかりを得ることができなかった。また、墳丘南側墳裾には周濠は存在しないことが明らかとなった。

出土遺物は墳頂平坦面に置かれていたと考えられる二重口縁壺形土器片が22点、旧表土中から弥生土器片が36点であった。(伊東静香)



写真4 第2トレンチ調査風景



第2トレンチ全景（北→南）



第2トレンチ掘込面（近景）



第2トレンチB区



第2トレンチC区



第2トレンチD区

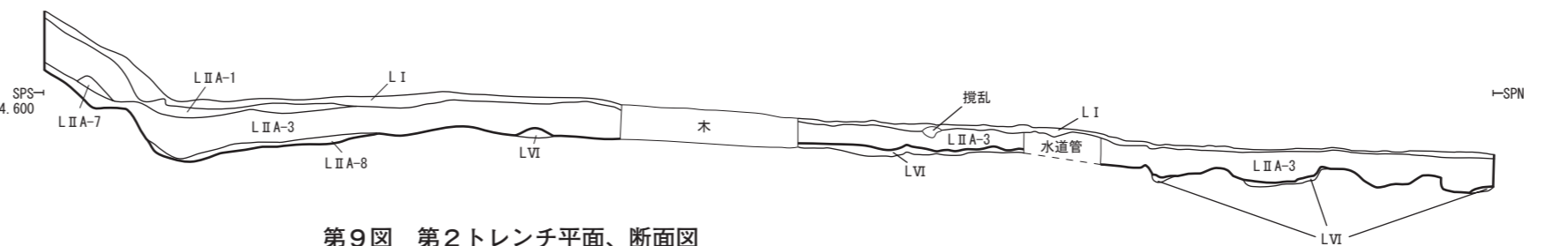
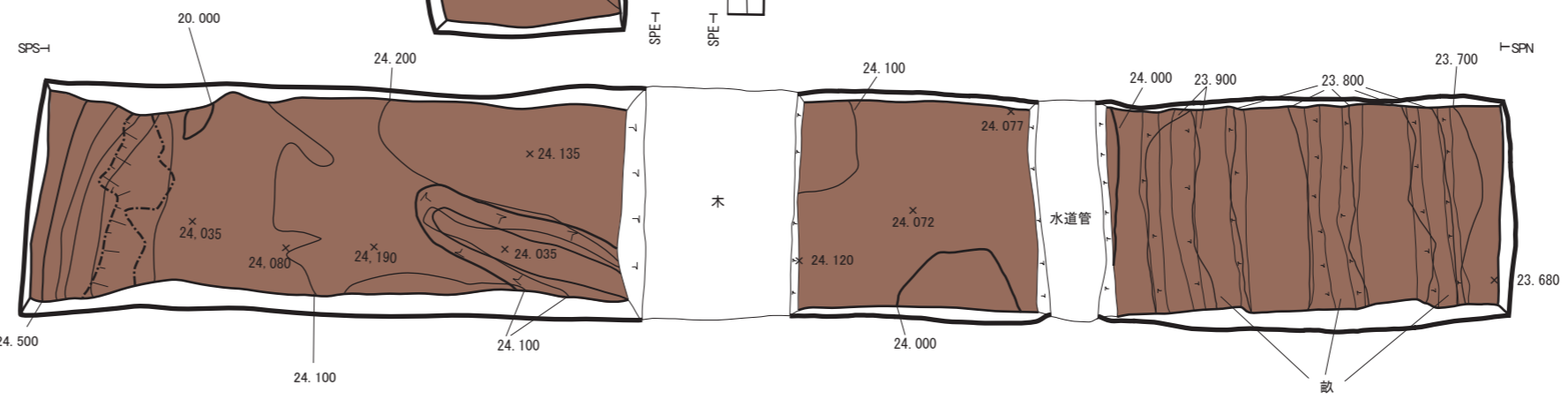
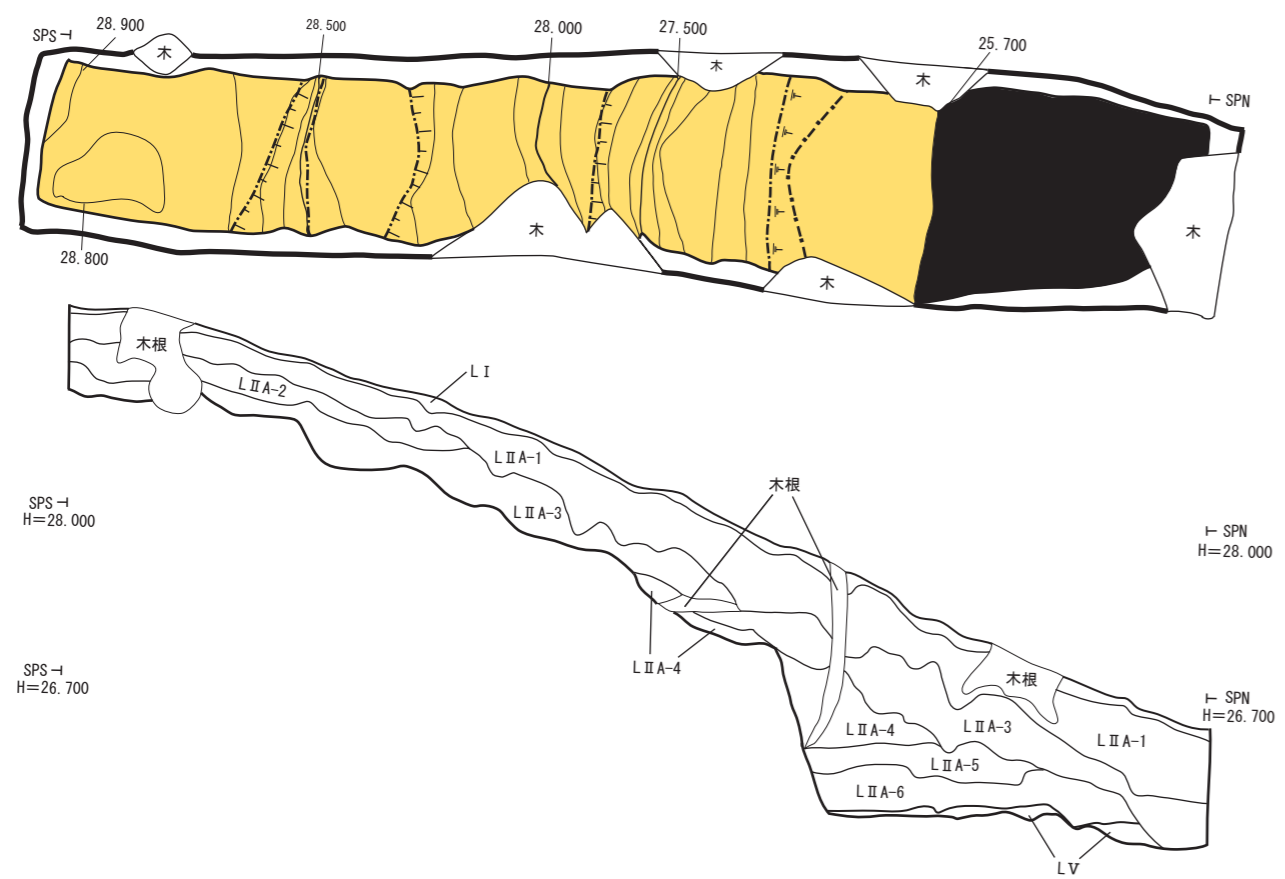
写真5 第2トレンチ

凡例

- コンタライン
- - - - - 傾斜変換線
- · - · - 土層変換線と傾斜変換線が同一

土層	土色	土質	粘性	しまり	混入物
L I	表土 7.5YR3/2黒褐色	砂質シルト	弱	やや弱	全体的に約5mmほどのブロックを含む。木の根が地表面に広がっている。
L II A-1	流出土 7.5YR4/3褐色	シルト	やや弱	中	層の約30%に7.5YR5/6明褐色を含む。全体的に約5mm程のブロックを含む
L II A-2	流出土 7.5YR6/8褐色	シルト	中	強	層の約10%に1cm程のブロックを含む。しまりが非常に強い。
L II A-3	流出土 7.5YR6/6褐色	シルト	中	強	約1cm程の小石を含む。所々攪乱があり、しまりが非常に強い。
L II A-4	流出土 7.5YR6/6褐色	シルト	やや弱	強	
L II A-5	流出土 7.5YR4/4褐色	シルト	中	中	7.5YR6/8褐色(砂質シルト、強、中)の土をブロック上に10%含む。
L II A-6	流出土 7.5YR5/6明褐色	粘性シルト	中	弱	7.5YR3/4褐色(砂質シルト、弱、弱)の土を20%含む。
L II A-7	流出土 7.5YR3/3暗褐色	砂質シルト	やや弱	中	
L II A-8	流出土 10Yr6/8明黄褐色	シルト	中	中	しまり、粘性がやや弱い。
L V	旧表土 10YR3/4暗褐色	シルト	弱	中	
L VI	地山 7.5YR3/3暗褐色	シルト	中	やや弱い	

- 填丘積み土
- 旧表土
- 地山



第9図 第2トレンチ平面、断面図

3、墳丘西斜面

墳丘西斜面の構造および墳端・周濠の有無の確認を目的として第3トレンチを設定した。古墳東西主軸上にトレンチ北壁が重なるよう配慮している。墳頂平坦面に石碑があり、墳頂の調査区とは接続できなかった。

第3トレンチでは墳丘上段斜面とテラス、墳丘下段斜面を検出した。墳丘上段斜面は、傾斜角30度、斜距離にして4.5mを測る。墳頂平坦面から上段斜面下端までの高低差は2.14mである。斜面の大部分は積み土で構成され、下端近くに旧表土が観察される。テラスは概ね平坦で、幅約2.0mを測る。西側にむけてわずかに傾いており、高低差は約20cmである。

テラスの下には本来は下段斜面が続くところであるが、下段斜面中には2ヶ所の平坦面が作り出されていた。テラスに続く短い斜面は角度35度、標高25.8mから25.5m、斜距離約0.4mを測る。その下に続く平坦面1は標高25.5m地点から25.4m地点、幅約0.8mと狭い。平坦面1に続く斜面は急角度で短く、平坦面2に至る。平坦面2は標高25.2mから25.0m、幅約1.0mを測る。平坦面2からまた急角度の短い斜面を経て墳端に至る。平坦面2の場所で壺棺が出土した(第10図)。テラス、下段斜面、平坦面1、2、墳端はいずれも地山を削りだして作られている。

墳端は旧表土に比べて1.3m低く、その分地山を堀込む形で作り出されていることから、墳端の外側に周濠が存在することが予想された。そのため墳端の外側にトレンチを拡張し、周濠の西側の上がりを探査した。その結果墳端から西に9.8mの地点ではほぼ旧表土の高さまで底面があがってきたことが確認された。周濠と考えた場合この地点が周濠の西側上端と考えることが可能である。ただ、第10図の断面図で見ると墳端部が最も低く、ゆるやかに西側に上がって行く形状は一般的な周濠の底面とは異なっており、ただちに周濠と見るにはやや問題が残る。なお、周濠の底面から焼土遺構を検出したが性格は不明である。

出土遺物

出土遺物は最下段テラスに埋納されていた壺棺および壺棺の下部に敷かれていた土師器壺破片2個体分、墳丘流出土や周濠内の堆積土の中から出土した二重口縁壺型土器片、旧表土層より出土した弥生時代終末期の土器片である。底部穿孔二重口縁壺型土器片は墳頂平坦面に据え置かれていたものが、風化により破片となり、墳丘斜面に流出したものと思われる。(伊東静香)



写真6 第3トレンチ調査風景



第3トレンチ全景 (W→E)



第3トレンチ全景 (E→W)

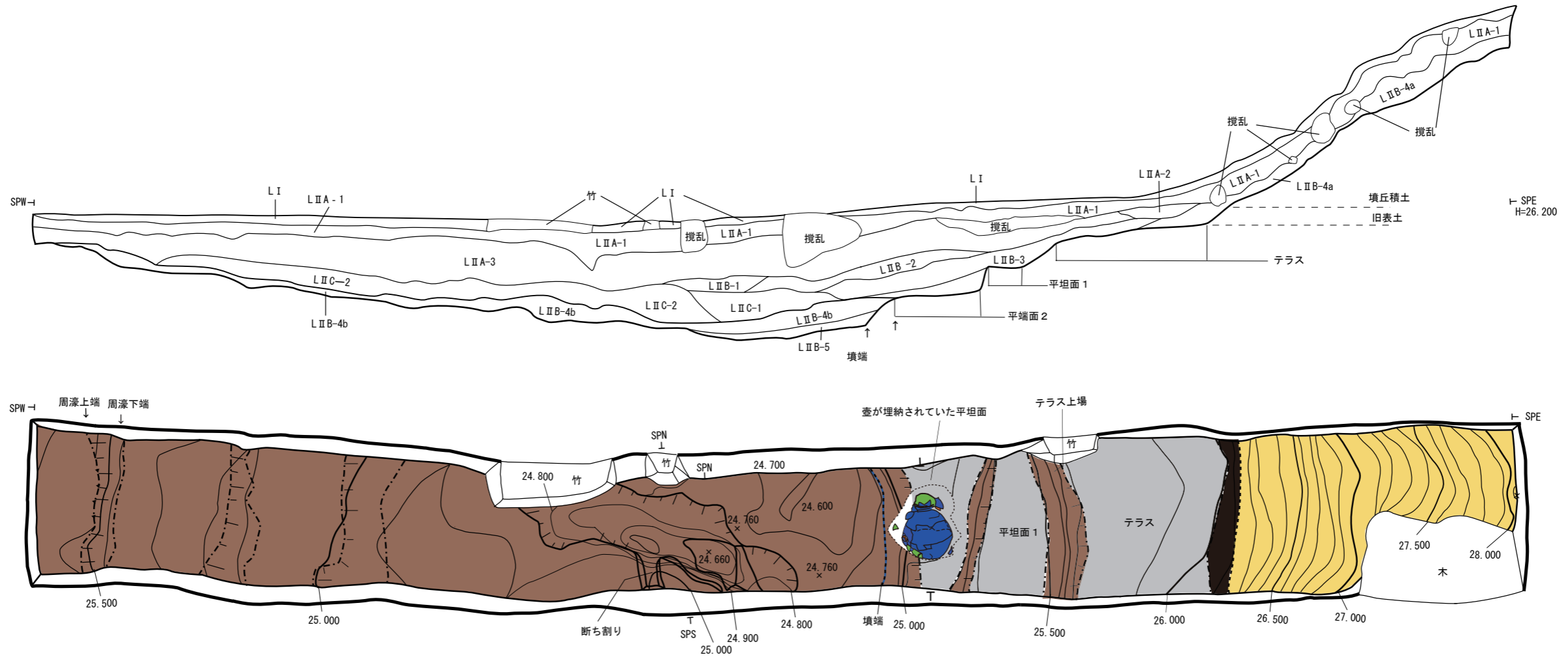


第3トレンチ周濠西端 (E→W)



第3トレンチ焼土遺構

写真7 第3トレンチ写真



土層注記

層位	土色	土質	粘性	しまり	含有物	備考
L I	現表土 10YR 5/6 黄褐色	砂質シルト	弱	強	なし	なし
L II A-1	流出土 10YR 4/4 褐色	シルト	中	中	なし	なし
L II A-2	流出土 10YR 3/4 褐色	砂質シルト	弱	中	なし	なし
L II A-3	流出土 10YR 5/4 褐色	粘性シルト	やや強	やや弱	なし	なし
L II B-1	流出土 10YR 5/4 にぶい褐色	粘性シルト	やや強	やや弱	なし	なし
L II B-2	流出土 10YR 6/8 明黄褐色	粘性シルト	強	強	なし	なし
L II B-3	流出土 10YR 5/3 にぶい黄褐色	シルト	やや弱	弱	なし	なし
L II B-4a	填丘崩壊土 7.5YR 4/6 褐色	砂質シルト	やや弱	中	なし	なし
L II B-4b	填丘崩壊土 10YR 4/3 にぶい褐色	シルト	やや弱	やや強	なし	なし
L II B-5	填丘崩壊土 10YR 3/2 黒褐色	シルト	中	中	なし	なし
L II C-1	堆積土 10YR 7/8 黄褐色	粘性シルト	中	中	なし	なし
L II C-2	堆積土 10YR 8/8 黄褐色	シルト	やや弱	やや強	なし	なし

凡例

- コンタライン
- 傾斜変換線
- 傾斜変換線とコンタラインが同一
- 土層変換線
- 壺棺埋納時の掘り方

- 填丘積み土
- 旧表土
- 地山

第10図 第3トレンチ平面、断面図 (縮尺 1/60)

4、墳丘南斜面

墳丘南側の墳端と周濠の有無を確認することを目的として、第5トレンチを設定した。

墳丘南側の主軸上に祠と参道があることから、トレンチの方向は主軸と合わせたが、祠や参道に配慮し、主軸よりやや東側に配置した。

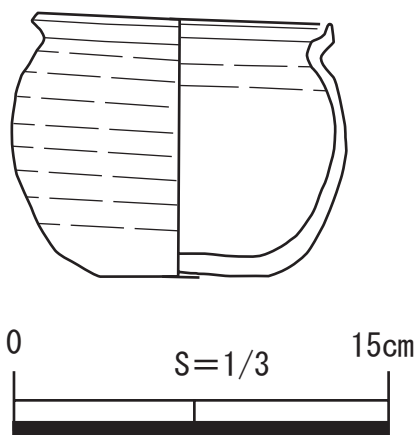
測量の段階で墳丘南側が祠により大きく変改されていることが分かっていたが、第5トレンチの掘り下げでも墳丘が大きく削られていることが確認された。幸いに、墳丘斜面の一部と墳端を確認することができた。墳丘下部の斜面は地山を削り出して作られており、地山面を検出していく過程で、墳丘から続く約10度の緩やかな斜面が、標高25.5mの地点から約30度という急傾斜になっていることが明らかとなった。この急斜面が墳丘斜面下部であると判断した。さらに急斜面は、標高25.2mの地点からほぼ平坦な面へと変わり、その面が続いていく。このことから、標高25.2mの地点の傾斜変換線が墳端であると考えられる。墳端より南側に続くほぼ平坦な面は、その後、南に行くにつれて緩やかに上がっていくものの、明確な立ち上がりを確認することはできず、このことから墳丘南側には周濠が巡っていないと考えられる。

【出土遺物】

第5トレンチからは多数の遺物が出土した。流出土中から、二重口縁壺形土器片が237点、底部穿孔壺形土器片と思われるものが5点、その他の土師器片が220点うち平安時代のものが79点)、内黒土器片が34点、縄文土器片が6点、弥生土器片が4点、不明な土器片が18点、坏の破片が2点、石器が4点、古銭が1点である。

これらの遺物に加え、地山を掘り込んで据えられた平安時代のものと思われる土器（第11図）や墳丘流出土を掘り込んで据えられた壺棺が出土している。

（阿部良祐 佐竹 崇 鈴木麻衣 成瀬裕也 遊佐恵太）



第11図 平安時代土器実測図

写真8 平安時代土器写真

第2節 周辺埋葬の調査

第3トレンチと第5トレンチで墳裾近くから大型壺が横倒しの状態で出土した。いずれも据え方に埋納されており、壺棺と判断された。

1 第1号壺棺 (第13図)

第3トレンチで検出した壺棺である。テラスを検出後、墳裾を検出するためテラスの外側の墳丘流出土を掘り下げていく過程で、検出した。検出位置は平坦面2の上にあたる。周囲を精査したところ、墳丘流出土を切って据え方が掘られ、その内部に横倒しの状態で壺棺が据えられていた。壺棺の周囲及び下から壺形土器の破片が多く出土した。特に壺棺の口頸部の下には意識的に大型の破片が敷かれていた。埋納の際に、横倒しの壺棺を安定させるために頸部の下に意識的に敷かれたと見られる。接合作業の結果、壺棺周囲から出土した土器破片は全て写真に示した2個体の壺形の破片であった。壺棺埋納にあたり、2個体の壺をこの場で打ち割って敷いたと見られる。1個体には体部にススが付着しており、日常生活で使用されたもので、もう1個体は使用痕跡を明瞭にはとどめていなかった。両個体ともに打ち割られた際の打痕が観察された。

壺棺はほぼ完全な形であったが、横倒しで上になった部分が失われた状態で発見された。当初は土圧で内部に落ち込んでいるのかと思われたが、内部を掘り進めていくと、失われた部分の破片が乱雑な状態で発見されるとともに、壺の破片に混じって糸切り底の杯破片が出土した。また、壺および破片には打ち欠かれた痕跡が随所に認められた。このような観察から、壺そのものは疑いなく塩釜式期であり、壺棺の埋納は古墳時代前期に行われたが、平安期に一度発見され、打ち欠かれて内部を荒らされたと考えられた。壺の内部からは何も出土しなかった。古墳に伴う周辺埋葬であり、幼児埋葬と考えられた。

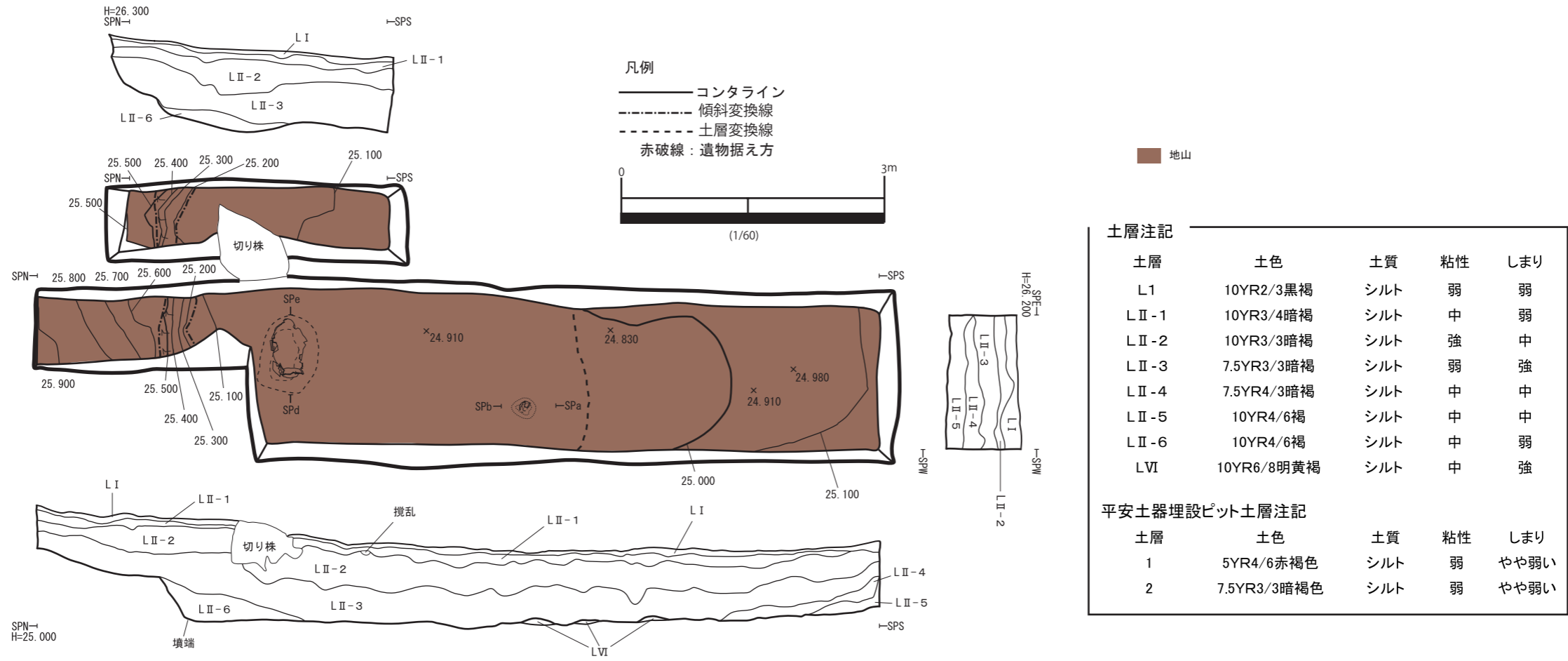
(小関修太郎 畑中光 幕田奈々)

壺棺に用いられた大型壺 (第14図、写真11)

壺棺に用いられた壺の全容は以下の通りである。口縁部直径18.2cm、体部最大径60cm、残存器高68cmを測る。底部は欠損している。出土状態からみて、壺棺に用いられた段階では底部はなかったと思われる。底部を欠いた状態で壺棺に用いられたのであろう。

口縁部は短く、わずかに外反する。断面では、口縁部は最初に粘土紐巻き上げで薄い外反する口縁部を造り、その後幅1.5cm程度の粘土の帯を外側に貼り足すことで形作られていることが観察された。頸部はごく短く、直立する。体部上半はやや内湾しながら下方に広がり、体部中程よりやや下にある最大径となる屈曲部に至る。屈曲部の内面には、粘土の接合面が明瞭に観察され、下半部まで製作された後、乾燥のためこの部分でいったん製作が休止されたと見られる。体部下半は屈曲部から内湾しながら底部にむけてすぼまる。底部の形態は不明だが、形態が類似する山形県今塚遺跡(須賀井新人 植松暁彦 黒坂広美 1994) 竪穴住居跡出土資料を参考とするとやや突出した平底である可能性が高い。

外面の調整は、口縁部から体部中程よりやや下までミガキで体下部、底部近くはヘラケズリだけで調整が終了している。口頸部のミガキは丁寧であるが、体部のミガキは疎らで



第12図 第5トレンチ平面図・セクション図

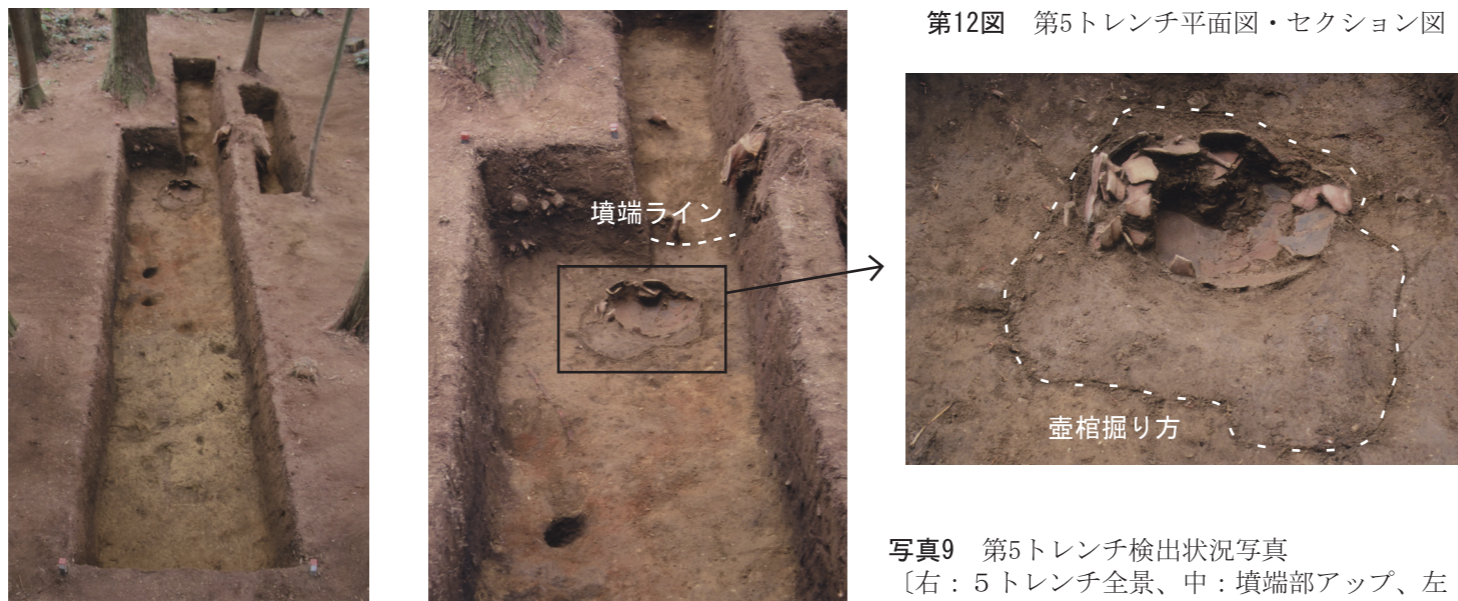


写真9 第5トレンチ検出状況写真
 [右：5トレンチ全景、中：墳端部アップ、左：壺棺アップ]

荒い。口頸部内面は丁寧なミガキで、体部内面は屈曲部の上下のあたりで横方向の刷毛目が観察される。

写真右に示したように、体部には楕円形の汚れがあり、出土状況からみて壺棺として据え方に横向きに置かれ、長時間土と接触していたために付着したと見られる。一方反対側の面には多く打ち欠かれた痕跡が観察される。第1次調査の概要報告でも述べたように壺棺の上部は壊され、破片は壺棺の内部にいれられた状態で発見された。調査時点でも打ち欠かれた痕跡が随所に認められたがその後の観察でもさらに打ち欠かれた痕跡は発見された。打ち欠きの痕跡はいずれも直径1cm程度の円形であるため、棒状のものをを用いて突く行為を繰り返して壺棺の露出した体部を破壊したと見られる。壺棺内部や周辺から糸切り底の土師器杯が出土したことから、壺棺が破壊されたのは平安時代と見られる。

壺棺の据え方は墳丘流出土を切っており、古墳が完成し、一定の時間が経過してから行われたと考えられる。従って壺棺の所属時期は、古墳築造時期の下限を示すことになろう。壺棺は筆者編年のⅢ-3または4（辻1994、1995）に位置づけられるから、歓請内古墳は少なくとも前期の終わりには築造は終了し、墳丘流失が始まっていたと判断される。

小型壺（第15図1、2 写真12）

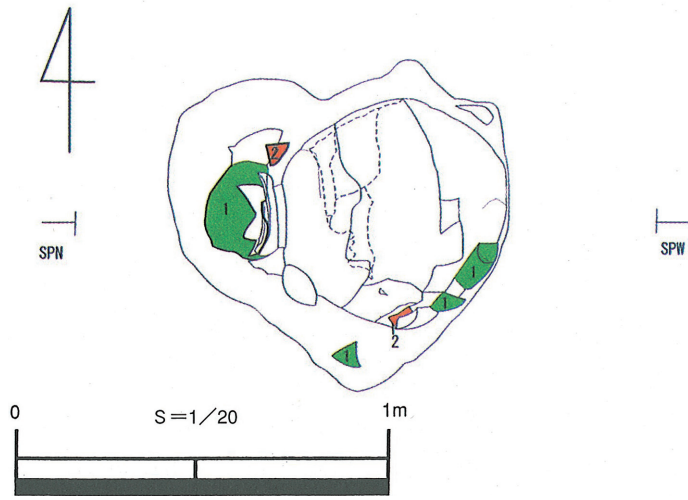
壺棺の下に意識的に打ち欠かれ、敷かれていたである。

1は頸部から口縁部が欠損している。残存高28cm、底径9cmを測る。同一個体と見られる破片もないため、古墳に持ち込まれた段階ですでに破損した状態であったことと見られる。体部は球形でやや突出した底部は平底である。体部外面は丁寧なヘラミガキで仕上げられている。体部内面には縦方向のハケメが観察される。体部外面は赤彩されている。全体に薄手で、精良に作られている。

2はほぼ完形品である。口径16cm、器高28.7cm、底径10.5cmを測る。意識的な打ち欠きの痕跡が各所に見られる。体部中程から下部にかけてススが明瞭に付着しており、持ち込まれる直前まで使用されていた様子がうかがわれる。口縁部やや長く、外反する。体部は倒卵形で中程に最大径がある。底部はやや突出した平底である。口縁部はヨコナデの後にミガキ、体部はヘラケズリで調整され、底部周辺にハケメが残る。内面は口縁部ヨコナデである。
(辻)

引用・参考文献

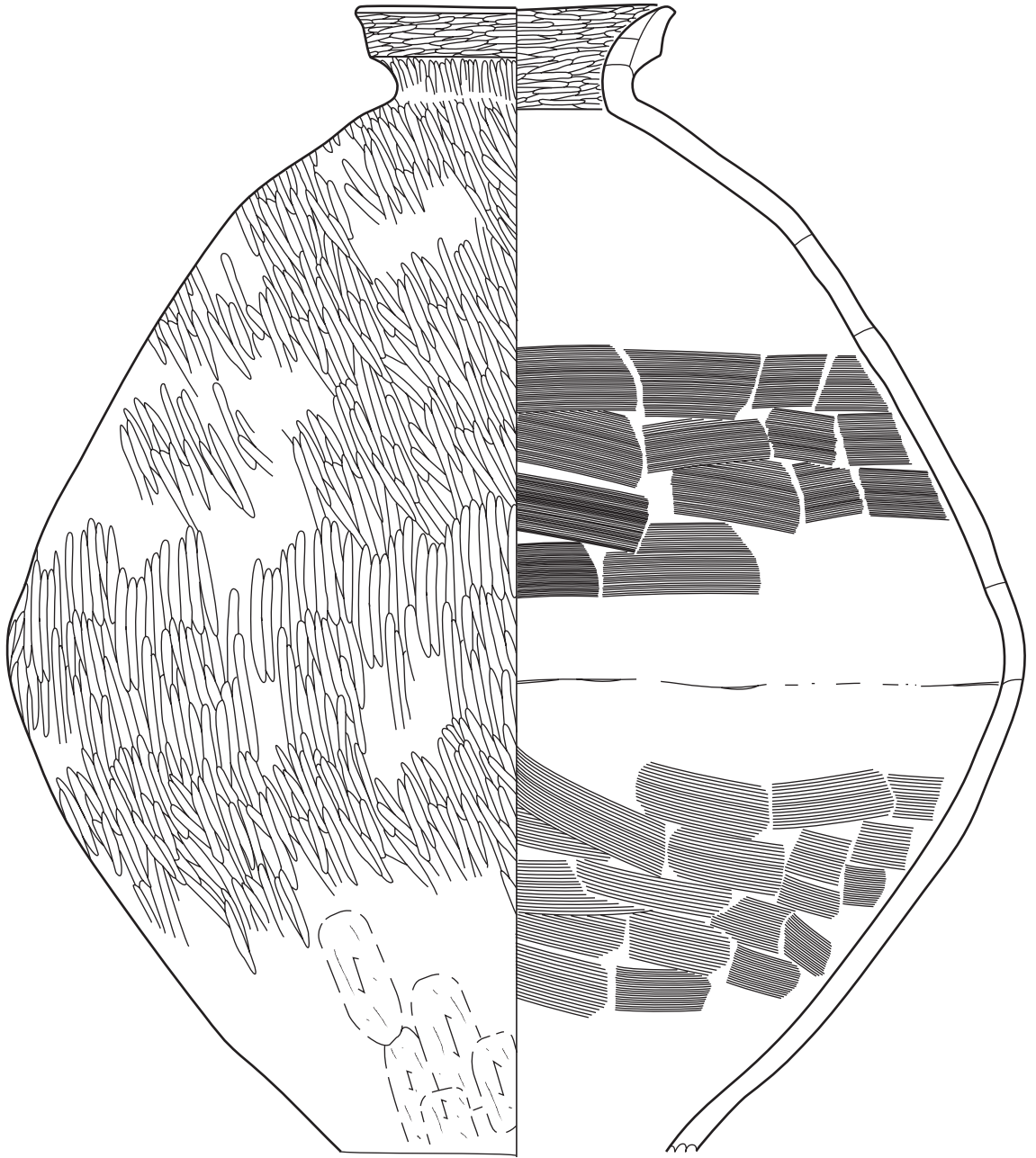
- 須賀井新人 植松暁彦 黒坂広美 1994 『今塚遺跡発掘調査報告書』 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
- 辻 秀人 1994 「東北南部における古墳出現期の土器編年-その1 会津盆地-」『東北学院大学論集 歴史学・地理学 史学科創立30周年記念 第26号』pp.105～140 東北学院大学学術研究会
- 辻 秀人 1995 「東北南部における古墳出現期の土器編年-その2-」『東北学院大学論集 歴史学・地理学 第27号』pp.39～88 東北学院大学学術研究会



第 13 図 第 1 号壺棺埋納状況実測図



写真 10 第 1 号壺棺埋納状況



第 14 图 大型壺（1号壺棺）实测图（1/3）



据え方の痕跡



据え方の痕跡

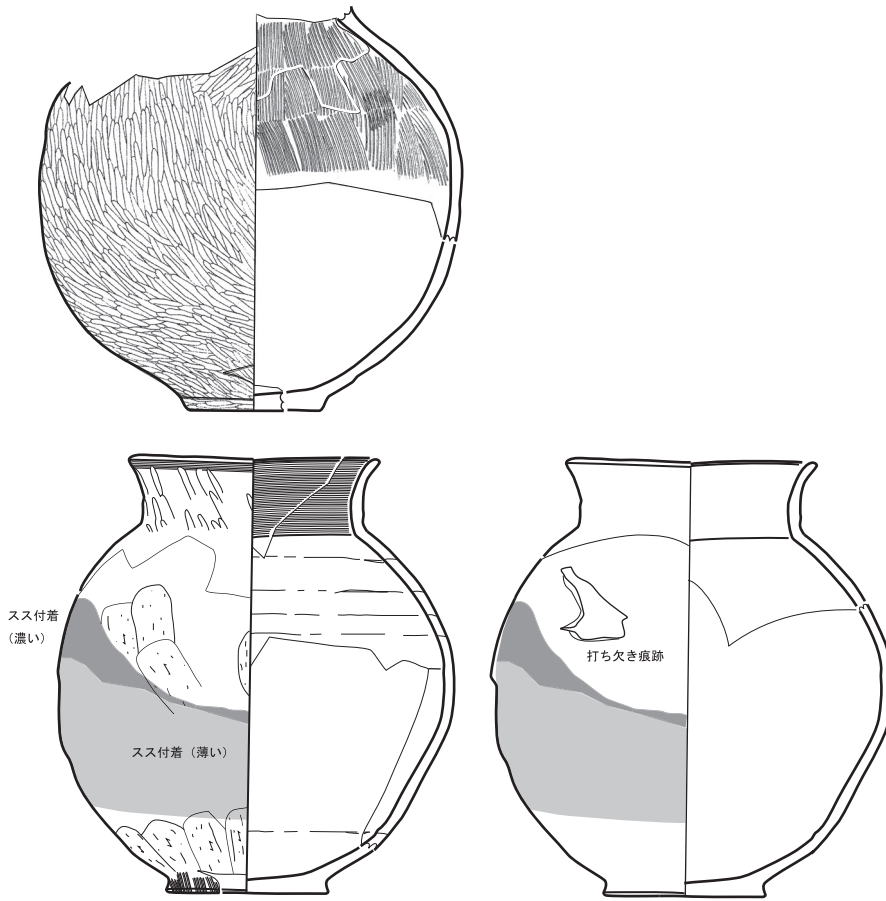


口縁部断面



打ち欠き痕跡

写真11 大型壺（1号壺棺）写真



第 15 図 小型壺実測図



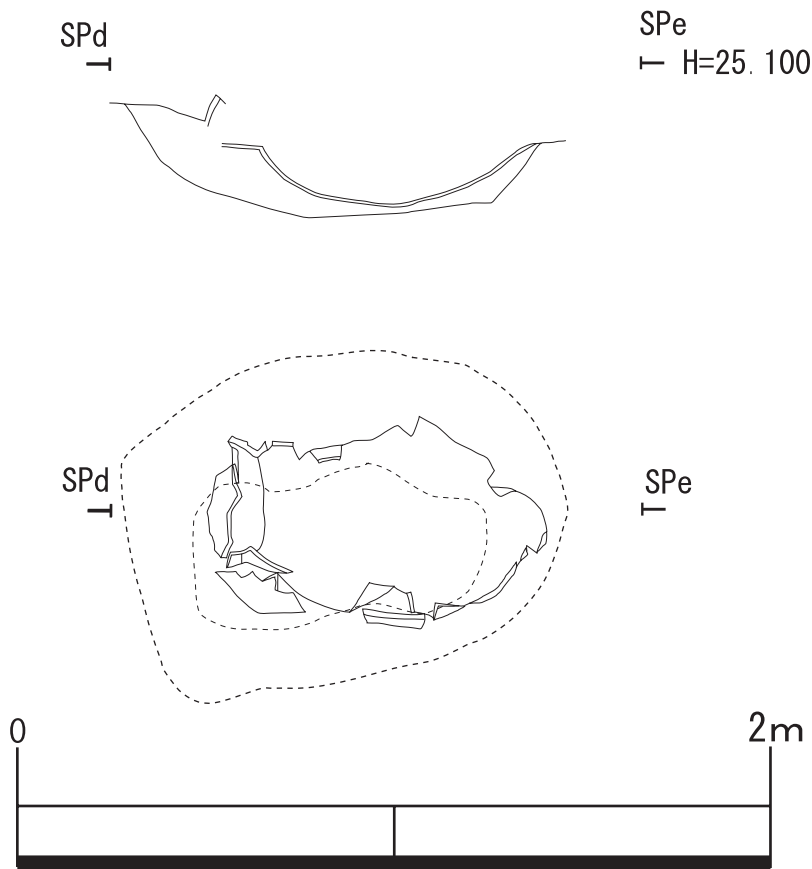
写真 12 小型壺写真

2 第2号壺棺 (第16図)

第5トレンチで墳丘面確認のため、流出土を掘り下げていく過程で、複合口縁の壺を検出した。確認された墳端より南に約0.5mの地点にあたる。周囲を精査したところ、流出土を切り込んで浅い据え方が確認された。壺はその内部に意識的に横倒しに据えられていた。西側をむいた口縁部には意図的に割られた別の土器片が蓋状にかぶせられていた。保存状態が悪く、剥離していたため多くが破片として取り上げるようになった。この壺は、流出土を切り込んで埋納されている点や壺の大きさなど第3トレンチで発見された壺棺と共通点が多いことから壺棺であると考えられる。今回出土した壺棺はやや小型であるが、第1号壺棺と同じ周辺埋葬の性格をもつものと考えられる。

周辺埋葬の被葬者は、古墳に埋葬された首長に従属する人物とみられ、全国的に幼児を埋葬する例が多い。今回の例も壺棺の大きさから幼児の埋葬であると推定される。東北地方における周辺埋葬は例が少ない。

(阿部良祐、佐竹崇、鈴木麻衣、成瀬裕也、遊佐恵太)



(1/20)

第16図 2号壺棺平面、断面図

大型壺（第2号壺棺）（第17図、写真13）

底の一部を欠損するだけでほぼ完形品である。土器の保存状態が悪く、内面の多くの部分が剥離してしまっているため、復元は困難をきわめ、ゆがみが生じた部分が多い。図及び写真は本来の形を残す部分を対象としたものである。

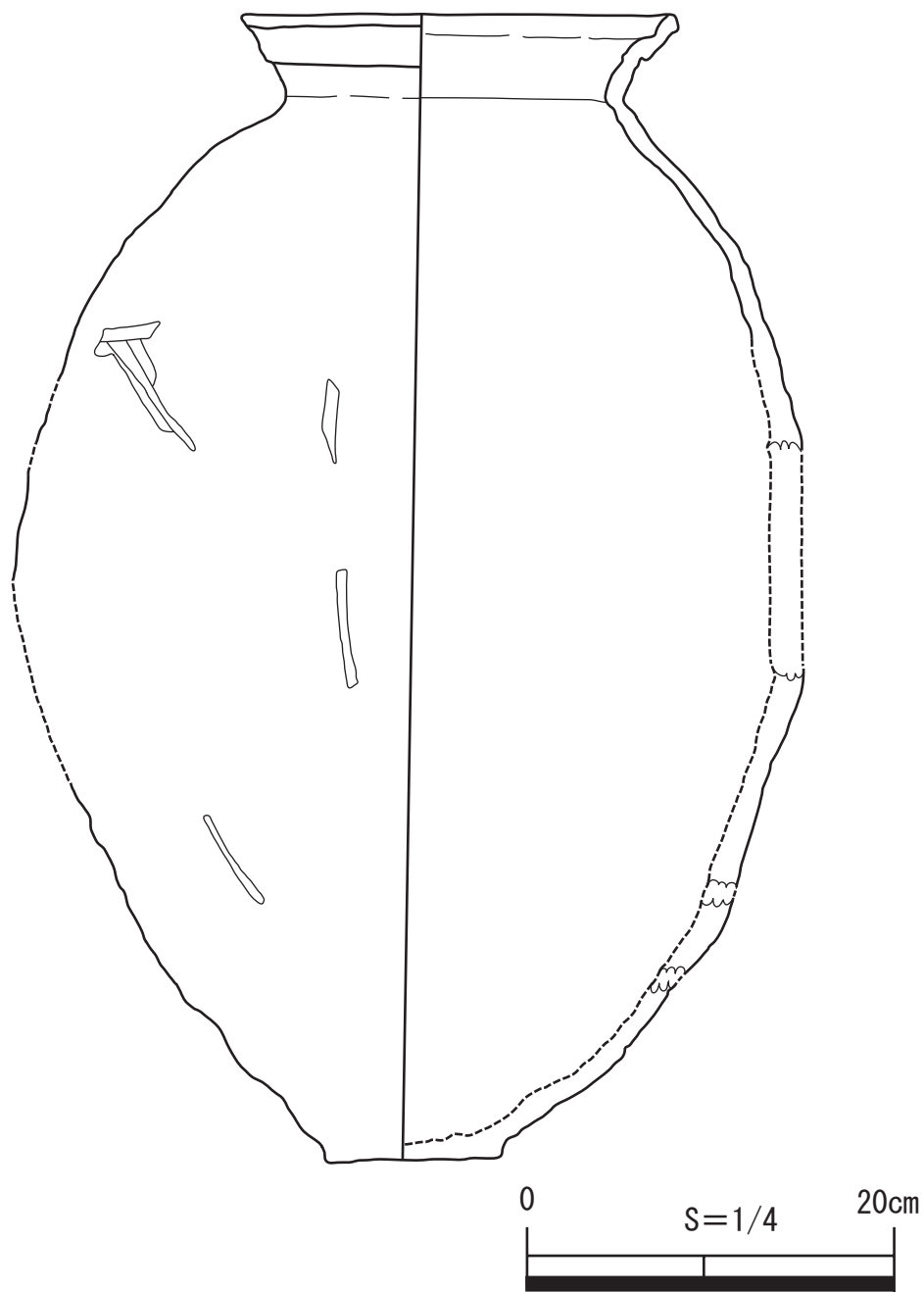
口径23.2cm、器高62.0cm、底径9.6cmを測る。口頸部は外傾し、口縁部は口縁部の外側に幅2cmほどの粘土帯を貼り足すことで複合口縁を形成している。体部は丸みを帯びるが比較的長く、倒卵形を呈する。最大径は体部中程にある。胴部最大径は42.8cmである。底部はやや突出し、平底である。器壁の保存状態が悪く、調整を見るのは難しいが、外面口縁部付近は横方向のミガキ、体部外面は斜め方向の粗いミガキが観察される。内面は剥落がひどく観察不能である。体部上半に一对の黒斑が見られる。焼成は軟質で、全体に茶褐色を呈する。1号壺棺は焼成が良好で特別な土器であることを感じさせるが、2号壺形の焼成は一般の土器に近い。

全体の形状から、塩釜式期後半段階の土器と見られる。

大型壺（2号壺棺の蓋として使用された土器）（第18図、写真14）

2号壺棺の蓋として使用された土器破片はすべて同一個体であり、すべて接合することができた。体部上半のほぼ半分と頸部のごく一部が残存している。頸部は強く屈曲して外反する。体部上半は丸みを持ち、体部は球形ないしは上半に最大径を持つ形が予想される。外面頸部は縦方向のミガキ、体部は削りの後ミガキ調整である。体部のミガキは頸部近くが丁寧な印象がある。内面頸部は横方向のミガキ、体部はナデで調整される。焼成はきわめて良好で赤褐色を呈する。器壁は1cm程度の厚さである。焼き上がりや器壁の様子は1号壺棺と良く似ており、本来は壺棺に使用するために焼かれた可能性が高いと思われる。また、蓋に使用された破片のすべてが接合した様子から、2号壺棺の埋納にあたり、口縁部を欠いた壺上半の半分程度の破片、すなわち復元された状態（写真14）で持ち込まれ、埋納時に割って蓋として使用されたとみられる。

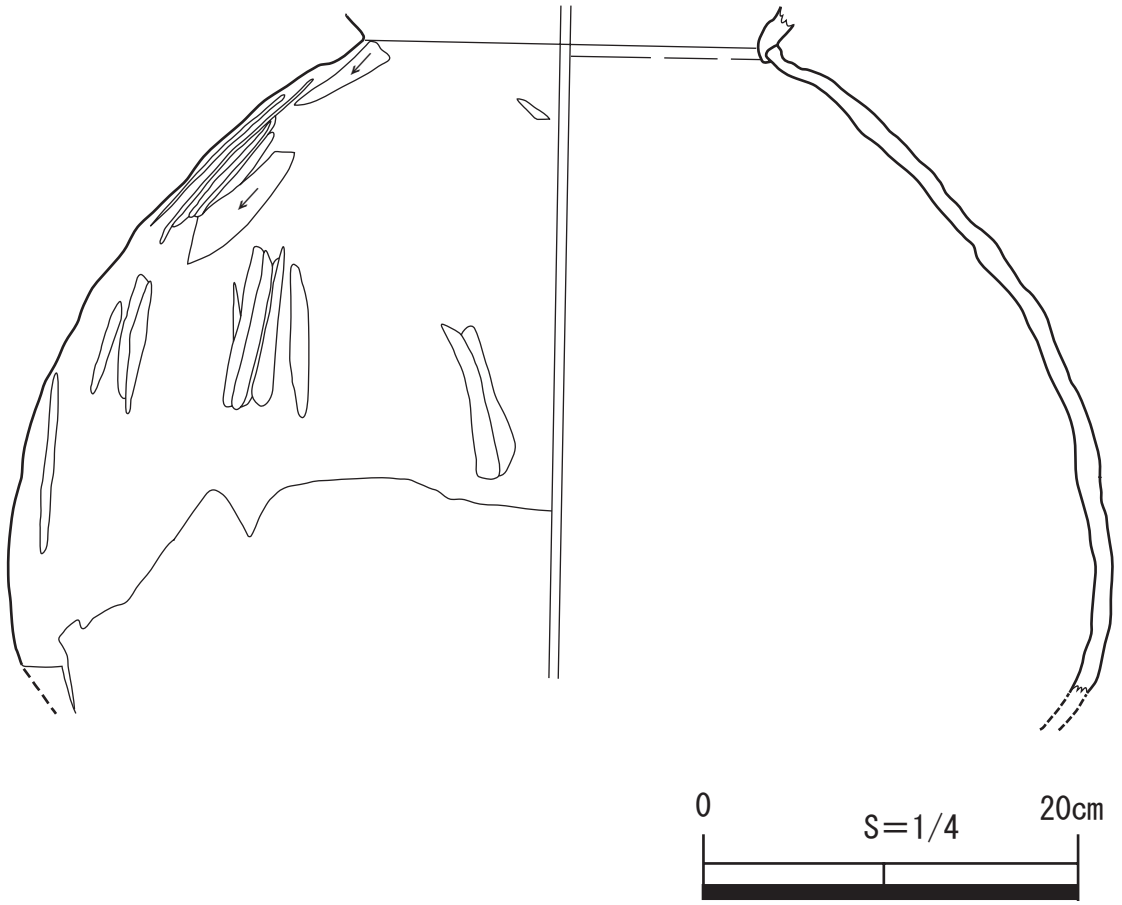
（辻 秀人）



第 17 図 大型壺（2号壺棺）実測図



写真 13 大型壺（2号壺棺）写真



第 18 図 大型壺（壺棺蓋に使用）実測図



写真 14 大型壺（壺棺蓋に使用）写真

第3節 墳頂部の調査

墳頂平坦面に想定される埋葬部を調査するため第4トレンチを設定した。

第4トレンチでは第1次調査以来第5次調査に至るまで墓壙および陥没坑の確認を目指して精査を繰り返してきた。概要報告の中でも毎回墓壙のラインと陥没坑の存在について述べてきた。しかし、その過程で墓壙ラインと認識した線に基づいて掘下げても、土層を検討するとラインから斜め方向に土が伸びていき、墓壙壁としてふさわしい急激な落ちこみにはならなかった。第5次調査終了の段階で、墓壙のラインと陥没坑のプランが確認できたと考え、第6次調査で墓壙と陥没坑の掘り下げを慎重に実施した。しかし、第6次調査の掘り下げでもこれまでと同様にラインを境に土層が傾斜して伸びることが確認され、これまでに想定したラインがいずれも墳丘積み土の土質の違いであったことが判明した。第7次調査ではこのような結果を踏まえ、第4トレンチ内にサブトレンチを設け、状況把握に努めた結果、少なくとも調査区内には墓壙のプランや陥没坑は存在しないとの結論にいたった。従って第4トレンチでは結果として墳頂部の墳丘積み土の状況を把握することになったが、墳丘積み土の様相を確認するためにサブトレンチを掘り下げていく過程で墳丘の下層で粘質土と砂礫を用いて構築した遺構を検出した。以下、墳丘積み土の様相と墳丘積み土下層の構築物について報告したい。

1 墳丘積み土の様相

第4トレンチ西壁の断面図を見ると、墳頂平坦面の外周部の積み土が盛り上がっている。墳頂平坦面の内側の積み土は外周の高まりから流し込まれた土が細かい層に分かれている様子が観察できる。第4トレンチの堀上がった状態で墳頂に窪み(写真15の白線内側部分)ができてるのはこの外周から流し込まれ、細かい層に分かれた積み土を掘り上げた結果である。つまり墳頂部の最も新しい土層は、墳丘築成の最終段階の土層ということになる。このような様相は青木敬が指摘する(青木敬 2003)西日本的手法と一致している。つまり、歓請内古墳の墳頂近くは、墳丘築成にあたってまず外周部を積み、その内部に土を流し込む手法で構築されていることになる。これまで、土層の違いをもって想定してきた墓壙ラインは、すべてこの外周部の盛り土と流し込まれた積み土との境であったと理解される。ただし、外周部の盛り土にも上下関係があり、数回にわたって形成されているようで、外周にドーナツ上に盛り上げて一斉に内部に充填していくのではなく、外周を盛り上げては内部に充填する工程が繰り返されているようである。

2 墳丘積み土下層の構築物

4トレンチ内の積み土の除去作業の過程で黄褐色の厚い粘土による構築物が確認された。はトレンチ北西から南東の方向にトレンチ中央部を横断するような形である。北西の部分は純粋な粘土質の土で構成され、一辺1.9m程度の正方形を呈し、断面台形を呈する。南西側はシルトと砂礫を互層に断面台形状に積んだ長方形を呈し、北西側に取り付いた形である。平面形全体は前方後方形に近い。長さ約4m、高さ約80cmを測る。写真で明らかのように、この構築物は明らかに墳丘積み土とは区別され、意図的な構築物であること

は間違いない。

この構築物は類例に乏しく、その性格を判断することは難しい。古墳墳頂の中心部分にあることを考えれば、墳丘積み土下層に埋葬施設が存在する場合もあり、現状では埋葬施設である可能性を考えておきたい。ただし、このような特異な様相はこれまでに知られておらず、今後類例の探索も含めて検討が必要である。なお、レーダ探査では、この構築物の内部に空洞は認められないとの所見であった。

出土遺物

墳頂部表土から底部穿孔壺型土器破片若干と平安期の土器片が数点出土している。墳丘積み土からは旧表土由来の弥生土器片が出土した他に鉄族が出土した。

(熱海泰輔 新沼祐伸 千葉優菜 池田昇平)

鉄族

鎌身部が細長く、先端が三角をなす無茎鎌である。鎌身部長さ6.9cmを測る。先端を上にして左の腸袂部は欠損し、右の腸袂部は折れ曲がっている。右の腸袂部の折れ曲りの状況は自然に圧力によるものではなく、人為的に折り曲げられた可能性が高い。左の腸袂部も人為的に折り曲げられ、欠損しているのかもしれない。鎌身部の形態は会津大塚山古墳出土鉄鎌(福島県立博物館 1994)に類似するものがあり、古墳時代前期にみられるタイプである(川畑純 2009)。

(伊東静香)

引用文献(年代順)

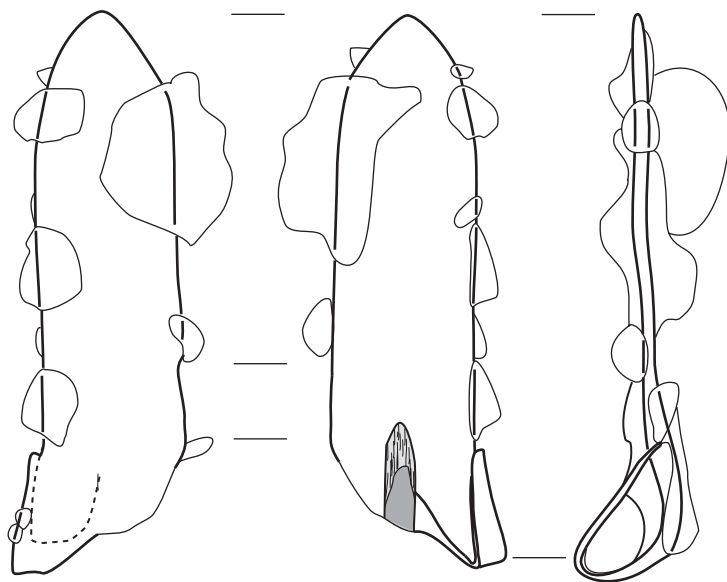
福島県立博物館 1994年 『企画展 会津大塚山古墳の時代—激動の三・四世紀—』

青木 敬 2003年 『古墳築造の研究 墳丘からみた古墳の地域性』 六一書房

川畑 純 2009年 「膳・中期古墳副葬鉄の変遷とその意義」『史林』第92巻第2号



写真 15 最終段階の墳丘積み土範囲



第 19 図 鉄族実測図 (1/1)



表



裏



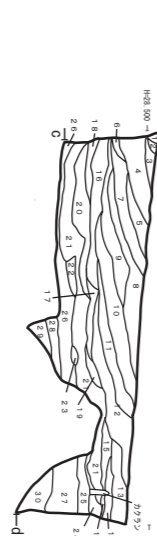
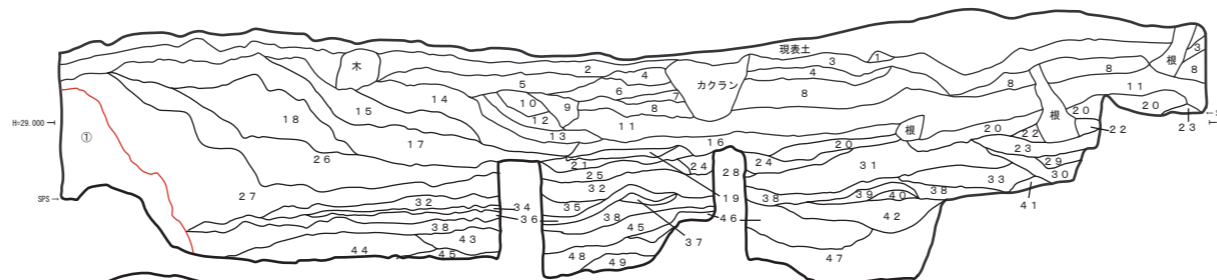
反り返った腸袂部

写真 16 鉄族写真

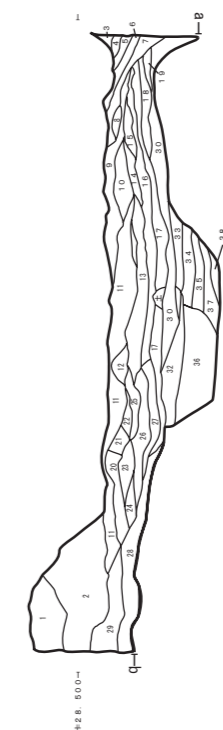


写真 17 第 4 トレンチ写真

第4トレンチ西側セクション図



南側あぜ北壁セクション図



北側あぜ南壁セクション図



(1/60)

第20図 第4トレンチ平面、断面図

第5章 まとめ

第1節 墳丘の規模と構造

(1) 墳丘規模と平面形

歓請内古墳は調査前には円墳と見られていた。しかし、測量調査の結果、方墳であることが判明し、規模は地表面の観察から南北約30 m、東西約25 mと判断された。墳頂平坦面は一辺約10 mの方形で、墳丘にはテラスがある可能性が考えられた。

発掘調査の結果、南北約30 m、東西約34 mの方墳であることが判明した。墳丘頂部の比高は西側で3.0 m、東側で5.5 mを測る。

測量段階と理解が大きく変わったのは東西の規模である。その理由は、墳丘東斜面の墳端が西斜面の墳端よりも外側にあると判断したことによる。

墳丘平面が南北に比べて東西が約4 m長いことがそのまま墳丘が長方形であることを意味しないことは注意が必要である。第21図に古墳の南北縦断面と東西縦断面を示した。この内21図上に示した東西縦断面中黒色で示した旧表土の高さを見ると、西側で標高25.25 m、東側で24.5 mを測り、75cmの標高差がある。図ではこの標高差を模式的に直線で結んでいるが、実際は少し違っているのだろう。とはいえ、歓請内古墳の墳丘は西から延びる丘陵が東側に傾斜しはじめる場所に築造されていることは間違いない。南北と東西の長さの違いは、もともとの地形の低いところに墳端をおいた東斜面では、墳頂平坦面に正方形に作り出すため長い斜面をつくることになり、結果として平面でも長さが4 m増えたと考えられるのである。墳頂平坦面は比較的正確な一辺10 mの方形をしており、墳丘自身の平面形も墳丘西斜面の墳端の高さ、標高26 m付近まではかなり正確な方形であり、歓請内古墳の平面形は長方形ではなく、方形と見られる。

なお、歓請内古墳の築造場所は丘陵斜面の落ち際を選択しており、意識的に長い東斜面を作り出し、東の墳裾と墳頂平坦面の比高を大きくしたと見られる。第2章測量調査の項でも指摘したように、集落の存在が想定される東側の海岸平野から見上げた場合、墳丘がより大きく見えることを意図した結果と考えられる。

(2) 墳丘

墳丘下部と墳端はすべての斜面で地山を削りだして形成している（第21図）。墳丘築成の前の段階で地表面であった旧表土はそのまま残し、その上に地山を削った土を乗せて墳丘を構築している。墳丘の上部では、墳丘外周に土を盛り上げ、その内部に土を重点する、青木が指摘する西日本型工法（青木 2003）を用いて墳丘が築かれている様子が確認できた。

墳丘斜面は東西の斜面で確認できた。東斜面では、標高26.5 m付近に幅の狭いテラスがあり、さらに標高2.4 m付近、墳端近くに幅2.2 m程度の幅の広いテラスが確認できた。西斜面では標高26.0 m付近に幅の広いテラスがあり、その下につながる墳丘下段斜面に2段の平坦面が存在した。南北の斜面では墳丘が改変されており、墳端だけが確認できた。

東西両者面のテラスの対応関係は南北斜面のテラスが不明あるため、判然としない。ただ、テラスの幅の共通性を考えると、東斜面上段テラスと西斜面テラスは一連であるのかもしれない。そう考えた場合、東斜面上段テラスは一周せず、部分的なものとなる。西斜面の対応する標高の位置にテラスが確認できなかったこともこのような推測を裏付けるかもしれない。北斜面の第2トレンチでは墳丘が改変を受けているため確認できなかったが、測量図ではテラスになるかと思われる緩斜面があり、対応する可能性もある。

以上の理解を総合すると、歛請内古墳の墳丘は、上段斜面、テラス。下段斜面を原則とし、二段で構成され、東斜面を中心に三段の構成をとる部分があると理解される。

なお、測量図で墳丘西南の角から南に伸びる土塁状の高まりが読み取れる。これは地主水谷隆氏から雨水が流れ、崖下の民家に害を及ぼすことを防ぐために作ったとのことご教示を得た。

(3) 古墳外周構造

第1次調査第3トレンチで墳端が古墳周囲の地山面よりも1m程度弾くことを確認してから、周濠の存在を想定し、調査を進めた。第3トレンチではその後、墳裾から9.6m外(西)側にいたり、墳裾から伸びる緩やかな斜面が古墳周囲の地山面の高さに達する(第10図断面)ことからこれを周濠の立ち上がりとして周濠の存在を確認したと考えた。

しかし、東の墳端は地山を削りだして作られているが、墳丘東斜面は丘陵の落ち際に作られており、墳端のさらに東側に周濠の立ち上がりがある可能性はなかった。北の墳端は外周の地山面と同じ高さで、周濠が存在しないことは明らかであった。南の墳端は地山面よりもやや下にあったが、墳端から南へはごく緩やかな斜面が続き立ち上がりは認められなかった。つまり、墳丘の東、北、南には周濠は存在しないと考えられたのである。

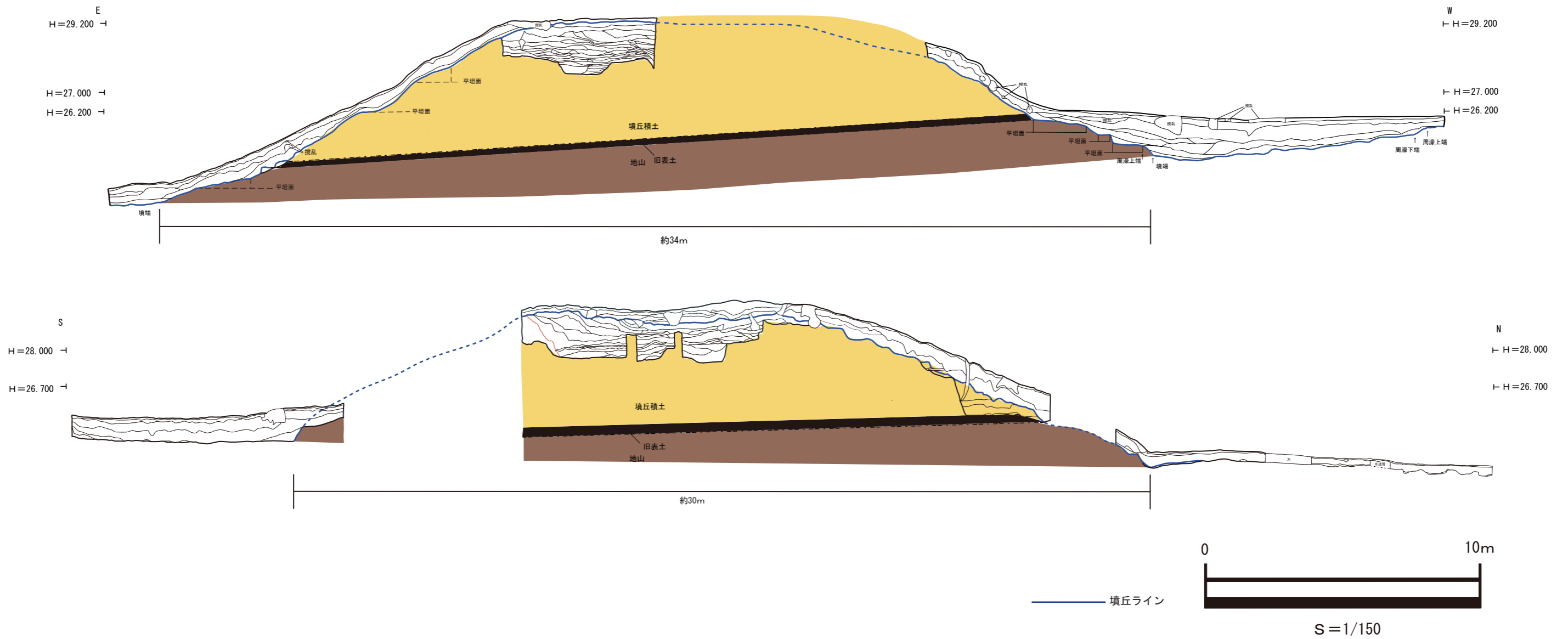
このような状況を踏まえ、再検討した結果、西側でも断面をみると一般的な周濠底面のようなU次形を示さず、他の墳端の様相を含めて考えれば、西に向けて伸びる傾斜面とも見ることが可能だとの判断に達した。

最終的には、墳丘西側の墳端にいたる掘り込みは前期古墳に通有な丘稜から墳丘を切り離すための地業の一種であり、歛請内古墳に周濠は存在しないと考えられた。

(4) 底部穿孔二重口縁壺形土器の配置

墳丘調査及び墳頂部の調査を通じて各トレンチで底部穿孔二重口縁壺形土器の破片が広く出土したが、東斜面の第1トレンチから多くの破片が出土した。第1トレンチでは明らかに墳丘上段斜面上から多くの破片が出土し、上段テラスよりも下では出土破片数が減少した。従って、底部穿孔二重口縁壺形土器の配置は墳頂平坦面に限られ、テラスには存在しなかったと見られる。

配置された底部穿孔二重口縁壺形土器の個体数は明らかではないが、第1トレンチトレンチ全体で約350点の破片が出土し、そのうち底部資料が10点含まれていた。調査面積がごくわずかであることを考えると、墳頂に置かれた底部穿孔二重口縁壺形土器の個体数は数十点にのぼる可能性が高い。配置の痕跡は確認できなかったが、墳頂平坦面の周囲に

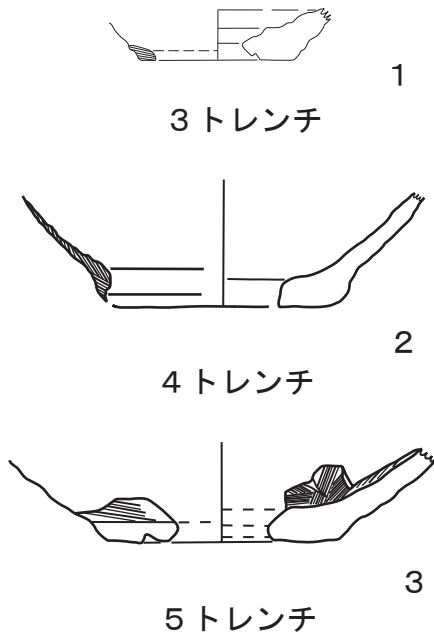


第21図 墳丘東西、東西縦断面図

朱彩の底部穿孔二重口縁壺形土器が配置されていた可能性は高いと考えられよう。

第2節 古墳築造年代

歓請内古墳の年代を示す資料は、周辺埋葬に用いられた土器と底部穿孔二重口縁壺形土器である。



第22図 各トレンチ出土底部穿孔二重口縁壺形土器実測図



1

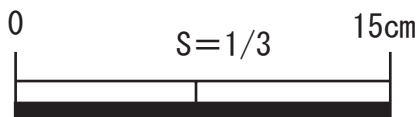


2



3

写真18 各トレンチ出土底部穿孔二重口縁壺形土器写真



第1号壺棺に用いられた土器はすでに述べたように山形県今塚遺跡（須賀井新人 植松 暁彦 黒坂広美 1994）S T 708 竪穴住居跡出土資料に類例があり、筆者編年のⅢ-3 または4期（辻 1994、1995）と考えられる。第1号壺棺の下に割り敷かれた2個体の壺もこの時期で矛盾はない。

第2号壺棺に用いられた土器は、細長い胴部の形態に特徴があるが、類例を挙げることはできない。口縁部の特徴から見て第1号壺棺と同様の時期と考えておきたい。

底部穿孔二重口縁壺形土器には、残念ながら全体の形状を知りうる資料はない。現状で

は底部が焼成前に穿孔されていること、底部からの広がりや体部破片の様子から見て比較的丸みを帯びた体部を持つこと、頸部は比較的太く、逆「ハ」の字状に外傾し、口縁部近くでさらに屈曲して外方に広がること、口縁部は外側に粘土帯を貼り足して複合口縁を形成することなどの特徴を挙げうるにすぎない。全体の姿は福島県郡山市大安場古墳出土資料（柳沼賢治他 1998）に類似する可能性が高いと思われる。

古墳で用いられる底部穿孔の特殊な土器群には古墳ごとの個性があって、比較には困難が伴うが、一応現状では歓請内古墳出土資料は筆者編年のⅢ—Ⅲ期を当てておきたい。

壺棺に用いられた土器群は墳丘の流出が始まった時間を示しており、底部穿孔二重口縁壺形土器の年代は古墳築造時の年代を示している。従って歓請内古墳は古墳時代前期後葉に築造され、前期末葉までには墳丘の流出が始まっていたと考えたい。

第3節 埋葬部の探索と墳丘下層構築物

墳頂部の調査では、第1次調査以来墳丘積み土を切る墓壙の掘り込みと木棺の腐朽にとまらぬ陥没坑の探索を継続してきたが、可能性があると考えた土の違いはすべて墳丘積み土を構成する土の違いであったことが判明した。

この結果、第4トレンチを設定した墳丘平坦面の東側には墓壙、陥没坑は存在しないと考えられた。第4トレンチは墳頂平坦面の半分弱にあたり、未調査の部分に墓壙、陥没坑がある可能性は残されている。この場合、墳頂平坦面の中央部分は調査しているので、墓壙と棺は西側に偏った位置に残されていることになるだろう。

墳丘下の構築物の存在はまったく想定外であった。調査期間の関係で構築物の最下部は南側で一部確認したにとどまったので、全体の姿を完全に検出したわけではないが、全体を完全に検出しても一辺1.9m程度、高さ0.8mの方形台状を呈する粘土質の土で構成される部分にシルトと砂礫の互層で構築された平面形が細長い三角形状、断面台形状の高まりがとりつく形が大きく変わることはないと思われる。

現状ではこの構築物がそのような性格であるのか判断する手がかりが乏しい。墳丘下層に埋葬部が存在する例は知られており、墳頂平坦面の中央部分に存在することを考えれば埋葬部である可能性は高い。ただ、これまで、このような形態の埋葬施設の類例は管見の限りでは知られていない。また、もし棺を覆う粘土槨のようなものであるとしたら、天井部が崩れていないので、当然内部に空洞があるはずだが、レーダ探査では内部に空洞がある可能性は低いとの所見であった。

残念ながら、現在のところこの構築物は埋葬施設である可能性は高いものの、どのような構造であるのか想定出来ない状況にある。今後類例を探索し、検討していきたい。

第4節 歓請内古墳の特質

調査の結果、歓請内古墳は古墳時代前期に築かれた中規模の方墳であり、古代の南相馬市小高区域に出現した最初の首長の墓であることが判明した。第1章第2節歴史的環境で

述べたように、福島県浜通り北部では前期に出現する大、中規模の古墳は前方後方墳または方墳であり、歓請内古墳もまた、この地域の他の首長と同じ墳形を採用している。しかし、歓請内古墳には特徴的な要素がある。それは周辺埋葬の採用と埋葬施設の特異性である。

歓請内古墳では2基の壺棺を検出した。四方に設定したトレンチのうち2カ所で壺棺を検出したのはかなりの高確率である。また、2号壺棺の蓋に用いられた土器は明らかに壺棺用に製作されたと考えられた。このような状況は歓請内古墳の墳裾部にはまだいくつかの壺棺が残されている可能性が高いことを示している。

歓請内古墳では墳裾に少なくとも数基の壺棺が埋葬されたと見られる。墳丘の周囲に小規模な埋葬が行われる形は一般に周辺埋葬と呼ばれ、古墳の主たる埋葬者に対して従属する人物が埋葬されたと考えられている。周辺埋葬の被葬者は古墳に埋葬された主たる人物の血縁者で幼児または小児が埋葬される例が多いという（清家章 1999）、歓請内古墳の2基の壺棺もまた大きさから見て幼児または小児が被葬者である可能性が強く、主たる埋葬者の血縁者であったのだろう。

ところで、東北地方では前期古墳の調査例は決して少なくないが、これまで他に周辺埋葬の存在が確認された例はない。つまり、東北地方には墳丘周囲に血縁者を葬る風習が古墳時代前期には持ち込まれていないのである。中期まで範囲を広げてもわずかに福島県本宮町天王壇古墳（山崎・大河内 1984）を挙げうるにすぎない。この点で周辺埋葬の風習を持つ歓請内古墳の様相は極めて特徴的と言えよう。

埋葬施設は確認できなかったが、墳頂平坦面の中央部に墓壙はなく、墳丘下層に埋葬施設の可能性がある構築物が確認された。このような様相は東北地方にまったく類例はない。歓請内古墳の近くには福島県南相馬市原町区桜井古墳（荒 淑人他 2002）、桜井古墳群上洪佐支群7号墳（鈴木・吉田 2001）、浪江町本屋敷1号墳（伊藤玄三他 1985）など前期古墳が知られている。これらの埋葬部はいずれも墳頂平坦面の中央部に墓壙を掘り、内部に木棺を埋納する型式のもので、歓請内古墳の埋葬部とはまったく共通点は見出せない。この点でも歓請内古墳は際だって特徴的な様相を示している。

第5節 おわりに

福島県浜通りの首長墓が方形を基調とする墳形を採用することは、この地域の首長間で葬送のスタイルが共通している、ひいては政治的なまとまりを形成している可能性を示唆するものであろう。歓請内古墳も同じ方形を採用する点でこの地域の政治的なまとまりの一員であったと考えられる。それにも関わらず、歓請内古墳が特徴的な様相を持つことによどのような意味があるのか、今後の重要な検討課題である。

また、東北地方南部の古墳時代前期の社会にあって、福島県浜通り地域の大、中の古墳は方形を基調としており、他の地域と大きく様相を異にしている。この地域の古墳時代前期社会の成立に、弥生終末段階での北陸北東部からの人々の移住と古墳時代初期の関東地方沿岸部中でも上総、下総の人々の移住（辻 2008）が深く関わっていることが背景にあ

る。このような動向と古墳の様相の違いとがどのように関係するのか、集落、土器群の様相を含めた総合的な検討が必要であろう。(辻 秀人)

引用文献 (年代順)

- 山崎 義夫・大河内光夫 1984年 『天王壇古墳』本宮町文化財調査報告書第八集
- 伊藤 玄三他 1985年 『本屋敷古墳群の研究』法政大学
- 須賀井新人 植松暁彦 黒坂広美 1994年 『今塚遺跡発掘調査報告書』財団法人 山形県埋蔵文化財センター
- 辻 秀人 1994年 「東北南部における古墳出現期の土器編年－その1 会津盆地－」『東北学院大学論集 歴史学・地理学 史学科創立30周年記念 第26号』pp.105～140 東北学院大学学術研究会
- 辻 秀人 1995年 「東北南部における古墳出現期の土器編年－その2－」『東北学院大学論集 歴史学・地理学 第27号』pp.39～88 東北学院大学学術研究会
- 柳沼賢治他 1998年 『大安場古墳群－第2次発掘調査報告－』郡山市教育委員会
- 清家 章 1999年 「古墳時代周辺埋葬墓考－畿内の埴輪棺を中心に－」『国家形成期の考古学』
- 鈴木・吉田 2001年 『桜井古墳群上佐佐支群7号墳発掘調査報告書』原町市埋蔵文化財調査報告書第27集
- 荒 淑人他 2002年 『国史跡桜井古墳保存整備事業報告書』原町市埋蔵文化財調査報告書第31集
- 青木 敬 2003年 『古墳築造の研究 墳丘からみた古墳の地域性』六一書房
- 辻 秀人 2008年 「倭国周縁域と大和王権」『百済と倭国』高志書院

謝辞

調査にあたっては、土地を所有する飯崎地区水谷堯宣氏、水谷隆氏、松本登氏、富沢けい子氏にご支援、ご協力をいただきました。また、南相馬市教育委員会には全面的にご支援をいただきました。荒淑人、麻美ご夫妻には宿舎をご提供頂きました。末文ではありませんが心より感謝申し上げます。



写真 19 歆請内古墳全景